
幻魔戦記

yu-ki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻魔戦記

【Nコード】

N6063U

【作者名】

y u - k i

【あらすじ】

目が覚めえたらそこは神様がいる真っ白な世界だった。どうやら神様は俺を拉致ってきたらしい。そして神様は言った・・・「異世界に逝って来て。」 いや、明らかに字が違うよね字が・・・神様のお願いに巻き込まれた純がお送りする、ハーレム系超ご都合主義のどたばたファンタジーサクセスストーリー！。

純はこの世界で何を望むのか乞うご期待！（作者談）

いや、望むも何も平穏を下さい・・・（純談）

あつ、ごめんそれ無理（笑）

誘拐っていけないよね？

みんな、初めまして。俺の名前は秋本純だ。あきもとじゅん 気軽に純って読んでくれ。

今俺は真っ白な部屋の中にいるんだ。そして突然だが皆にお願いがある……

「助けてくれ!!!」

「いきなり自己紹介して何言ってるのこいつ？」とか「新手の宗教乙。」とか思われている諸君。取り合えず見捨てないでくれないか。君たちが頼りなんだ。

取り合えず、どうしてこんな状況になったか説明したい。いや、説明させてくださいお願いします。

えっ？聞いてやるから言ってみろ？ありがとう諸君!!!じゃあ、俺はありのまま起こったことを話すぜ。

あれはたぶん昨日のことだったと思う……

く回想く

自慢じゃないが、俺はオタクだ。エロゲー（泣きゲーオンリー）と深夜アニメとネット小説のファンタジー物をこよなく愛するニートだった。

あの日は、お気に入りの小説を朝方まで読んでベットに入った。

そして目が覚めたら・・・

く回想終了く

神様と交渉（前書き）

少し修正を加えました。

神様と交渉

やあみんな、秋本純だ。

さつきは取り乱してすまない。おかげでだいぶ落ち着いてきた。

それでだ。冷静になって考えると、やっぱりこの展開は『異世界^{あれ}』
行きのフラグだと思っただよね。

つと、そうこうしている内にお迎えが来たみたいだ。

「初めまして。君が秋本純君かな？」

いつの間にか目の前に、『神様^{いかにも}』なご老人が現れた。

「はいそうですよ。貴方はどちらさまですか？」

「うむ。わしは神様じゃ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

神様（仮）と名乗ったご老人にとりあえず白い目を向けてみる。

いや、だってそうじゃん？いきなり目の前に現れて『私が神様だ』
って・・・・どう考えても沸いてる人とは思えんし。

「で？その神様がこの私めに何か御用でしょうか？」

神差は発言に呆れながらとりあえず先を促してみる。しかし、それ

は間違いだった。何故ならそこには、いかにも待つてましたと言わんばかりに満面の笑みを持った老人の顔があった。

「良くぞ聞いてくれた。実はの、お主には異世界に逝って貰いたいのじゃ。」

「ヤ」

即答である。しかもなんだ？『逝ってきて』って明らかに字が違っし、確実に厄介ごとになりそうな予感じゃん。

「えっと・・・お主には異世界に逝って貰いたいのじゃ。」

「イ・ヤ!！」

繰り返してきた。よほど異世界行きが重要なことらしい。てか、二度繰り返しても『逝ってきて』ってないわ・・・

「頼む！もうお主しかおらのじゃ！何なら、可能な限り能力も付けるから。」

とうとう神様は土下座してきた。しかも泣きながら・・・あなたにプライドとかはないんか・・・

しかし、今俺は気分がいい。何故ならチートオリ主の可能性を見出したからだ。

「わかった。そこまで言うなら行ってもいい。ただし、行く前に幾つかの確認と聞きたい事があるんだがいいか？」

「良いぞ、何でも聞いてくれ。」

何でも聞いていいと言っているの、ここは遠慮なく行こう。

「まず、第一にあんたは何者だ？」

「お主が今から行く世界の最高神じゃ。」

「次ぎ、今から行く世界はどんなところだ。簡潔でいいから答えてくれ。」

「ふむ。時代はお主の世界で表すなら、中世ヨーロッパといったところじゃの。あと、魔法が存在するのう。」

やはりファンタジー世界か・・・なら大体の方針は決まったな。

「最後だ。俺はその世界で何をすればいい？」

「むう詳しくは話せないが、ある戦争を止めてほしいのじゃ。」

「詳しく話せない？なぜだ？」

「これ以上はわしも世界に干渉出来ないんじや。すまんのう。」

「干渉できないんなら、俺を送ることは出来ないんじやないか？」

「そこは大丈夫じゃ。召喚魔法の暴走という事で世界を騙せる。」

「騙すって・・・それならあんたがその魔法で世界を騙して、その”戦争”とやらを回避すればいいんじゃないのか？」

「それはあまりにも大っぴら過ぎて、世界が感付いてしまう。それにわしにはそれほどの干渉はできないのじゃ。わしに出来るのはお主を世界に送り、無事戦争にたどり着けるように導いてやる事しかできん。」

そう言つて神様は自嘲気味に笑みを浮かべた。

うーん・・・いわゆる世界の修正力つてやつか？なら仕方ないな。

「まあ干渉できないんじゃ仕方ないな。それじゃ、能力の設定といきますか。」

「うむ。じゃがあまり強すぎるのは出来ないから気をつけるんじゃぞ。」

「わかつてるよ。とりあえず、筋力とかの身体的ステータスをその世界の最高レベルに”なれる”ようにしてくれ。」

「無理じゃ。いきなり最高レベルは出来ん。」

「いや、いきなり最高レベルにしるなんて言つてねーよ。用は修練を重ねたらその世界の最高または最強にしてくれって言つてんだ。」

「なるほどの。それなら可能じゃ。しかし何故そのようなことを？」

「何、保険だよ保険。世の中どんなに努力したって報われない奴もいるんだ。なら、初めから出来るって分かっていたら、後はそいつの努力しだいだろ？」

「まあ確かにのう。後は何じゃ？」

「そうだな。まあせっかく魔法の世界にいけるんだ。俺にも魔法を使えるようにしてくれ。あと俺の記憶にある魔法も使えるようにしてくれ。」

「何だそんなことか。それなら初めからそのつもりじゃわい。わしの世界のすべての魔法が使えるようにしておくからの。記憶の方も出来るようにしておいてやる。」

「おつ。いいね。それ最高だぜ。」

「但し、我々が使う神の奇跡『ロストマジック失われた魔法』は自分で探すことじや。後はイメージすれば使える様にしておくぞ。」

「サンキュー爺さん。『ロストマジック失われた魔法』の中には空間系の魔法はあるのか？」

「ああ、あるぞ。なんじゃ？使いたいのか？」

「ああ、某慢心王の『王の○宝』みたいな空間系の倉庫のような物が使いたいんだが・・・」

「それ位なら大丈夫じゃぞ。さすがに武器とかは持って行けないがそれでいいかの？」

「それでいい。つーか宝具はさすがに反則だからな。倉庫のように使えるのなら何も入ってなくていい。」

「わかった。他はないのかの？」

「ある。てかここからが本番だ。俺が最後に求める能力はただ一つ。特殊能力だ。」

「ほう・・・して、その特殊能力とは何じゃ？」

「ああ、それはな、『意思強制付与』だ。」

「聞いたことがないの。どんな能力なんじゃ？」

「無意識のモノに強制的に意思を付与させて使役する能力だ。使い方によっては最強の部類に入るから一定の空間内に留めるがな。」

「むう。なんだか分からんが凄そうじゃの。まあ自分で制限を付けるなら良いぞ。」

よし。通った。これで心置きなく戦える。

「もうないのかの？」

「ああ。最後の能力さえ通るなら後は大丈夫だ。」

「あまり欲がないの。まあわしからも色々特典を付けてやろう。」

「いいけど、あんま強すぎるのは無しな。」

「わかつとるって。さて、——このものに神の祝福を与えたまえ——」

神様が呪文を唱えると、俺の体が光りだした。

そして、光が収まると体の奥底から何かが湧き上がるものを感じるようになる。

「なあ爺さん。この体の中から湧き上がる感触が魔力でいいのか？」

「うむ。そのとおりじゃ。直にその感覚にも慣れるじゃろ。」

そんなものなのか？結構な量だと思っんだが・・・

「さて、じゃあそろそろ逝って来て貰おうかの。」

「ああチヨイ待ち。準備くらいさせろ。てか、丸腰で行けるか！装備品寄こせや。」

「むう仕方ないの。一般的な旅人の装備でいいかの？」

「ああそれでいい。あと、あつちに着いたらでいいから最寄の町に行ける地図と道に迷わないためのコンパス、あと食料一か月分とキヤンプ道具一式用意しといてくれ。」

「わかったわい。まったく神使いが荒いのう。」

「うつせ。じゃあ行って来る。」

「ああ逝ってこい。」

こうして俺は異世界に旅立った。

初めての・・・

光の先を抜けるとその先は地平線が見える何もない草原に立っていた。

皆こんにちは。秋本純だ。

冒頭でも言ったように、今俺は何も見えない草原に立っていた。

これからどこに行けと？

そんなことを考えていると、目の前に木箱が現れた。どうしますか？

- 1・開ける ↑
- 2・放置

純は目の前の木箱を開けた。

純は冒険者セットを手に入れた。テレテレー♪

はい。すいません調子こきました。そして木箱の中身はこっちに来る前に言っていたキャンプ道具一式と食料でした。そしてなぜかあの爺からの手紙。

とりあえず手紙を読んでみる。

『純へ

この手紙を読んでいるということは無事に着いたと思う。

約束どおりお主が言っていた物は用意した。地図とコンパスはこの手紙に同封しておいたから確認するように。

あと、お主の言っていた能力を調べたのじゃが、あれは強力すぎるのでこちらで制限をかける。詳しくは別紙に書いておいたのでよく確認すること。

では、お主の健闘を祈る。オーバー。』

おーばー。

やはり強力すぎて制限がかかったか。

さてまずはどんな制限になったか確認してみよう。なにに？『特殊能力入門編』？まさかこれか？

『特殊能力入門編』

この本はあなたの能力について詳しく簡単に書いてあります。

まず、概要です。

この能力『意思強制付与』は読んで字のごとく強制的に意思の無いモノに意思を与えて自分の指揮下におくことが出来る能力です。

もちろん意思のあるモノ、例えば生物などには効き目はありません。あくまで『無意識』のモノ、または『無意識』に近い微弱な意思があるモノに限ります。

使用方法

無意識なモノ・・・剣、斧、槍等の武器、または鎧や盾等の防具。

無意識に近い微弱な意思があるモノ・・・草、木、建物など。

使用制限

能力使用時の重量制限・・・100×レベル キログラム以下

能力使用時の有効効果範囲・・・10×レベル メートル以内

死者について

生命活動の停止している生物については無意識のモノに分類されません。

使用制限

能力使用時の限界使役人数・・・10×レベル 名まで

なお、使役する場合は自分のランク、またはステータス以下のモノしか使役できません。

また、使役人数の重量は重量制限に加算されます。

以上が概要及び能力使用時の注意事項になります。

また、この能力は自分のレベルが大きく関係していきます。どんどんレベルを上げていきましょう。

作者by神様

了解。大体把握した。こりゃ、最初はちよつときついな。自分のレベルが上がれば強くなっていくのか・・・面白くなってきた。

さてと、最初はどこに行けばいいんだ？

そう思い俺は地図を確認する。するとそこにも手紙があつた。

『純よ。能力は把握したかえ？

最初の目的地は面倒なので王都にしておいた。

ここからなら歩いて3日と言った所じゃ。迷うでないぞ。

PS・この世界の通過を渡し忘れていたのでちよつとしたイベントを用意した。そのイベントをうまく使ってお金を稼ぐように。』

ああーそういえばお金もらい忘れてたな。うっかりしてた。

まあ今更そんなことでくよくよしても仕方ないので先に進もう。

「地図を確認したら、ここから来たに真っ直ぐか・・・まあ魔法の練習とかは歩きながらやればいいか。とにかく冒険者セット（俺命

名)を空間倉庫に入れて出発すつか。」

一人ごちて、気合を入れ俺は旅の準備をする。

爺が言ってたな・・・魔法はイメージすれば出るって。

俺は四次元空間をイメージしてみた。

すると、目の前に本当にイメージどおりの空間が出来た。

「これに入れるのか？大丈夫かな？」

俺は、冒険者セツトの中にあつた食料を一つ取り空間へと放り込んだ。

「うわ！見えなくなっちゃった。これ手を入れて取り出すんだよね？いや、待てよ・・・慢心王や赤い弓兵はイメージしただけで武器が出てきたよな？ならこつちも・・・」

俺はそう思い立ったので、今度は空間の中からさっきの食材を取り出すイメージをした。

ポンッ

そんな音が出るような勢いでさっきの食材が空間の中から飛び出てきた。多分イメージが強すぎたんだろう。

「よし、実験成功だな。じゃ、ちゃっちゃんと準備を終わらせますか。」

俺は鼻歌交じりにドンドン冒険者セットの中身を入れていった。

そして、全ての道具を空間倉庫に入れて俺は王都へ歩き出す。

降り立った場所からコンパスと地図を片手にかなり歩いた気がする。

こんなに歩いたのは何年ぶりだろう？おかげでかなり足がクタクタだ・・・

夕暮れが近くなってきたので、この辺でキャンプを張ろうと思う。

空間倉庫からキャンプ用具（6人入りの家族用・組み立て説明書付き）を取り出し、説明書（なぜか付いてた）を見ながら組み立てていった。

無事テントが完成して、俺は唐突にあること思い至った。

「そうだ。魔法を使おう。」

京都に行こう的なノリで、いまだ試していない魔法を使う事にした。

ベースキャンプから少し離れて、俺は手をかざし・・・

「ファイヤー・ボール」

しっかりと頭の中で火球をイメージし、少し離れた所に着弾するようにイメージする。すると・・・

カッ！

ゴウ・・・

ドカーン！！！！

なんつー威力・・・

一瞬でクレーターで出来たぞ・・・まあ確かに大きい火球をイメージしたのは俺だけど、ここまで威力があるとは・・・

並の人間なら消し炭に確定だね、うん。良かった、試す前に威力確認しといて♪——はぁ・・・

ため息を吐きながら俺はベースキャンプに戻る。

ベースキャンプに戻った俺は、夕飯の仕度と焚き火の準備に取り掛かる。

まずは焚き火からだよね。うん。

俺はそう思い、倉庫の中から焚き火用の木（何故かあった）を取り出した。

焚き火の準備が終わり火を付けようと思ったときに、火打石の使い方が分からないことに気づいた。

「どうすんべ・・・やっぱ魔法^{アレ}しかないよな・・・」

俺は先ほどの光景が思い出し、戸惑いながらイメージする。

イメージするのは小さな炎。

うん。イメージが大事イメージが・・・

「ファイヤ」

準備した焚き木の真ん中に非が燈る様に小さく呟く。

ボウ

うまく火が付きパチパチと燃え始める。

「成功だな。とりあえず飯にしよう。」

魔法が成功したことに安堵しつつ、倉庫から食材を取り出し準備する。

「いただきます。」

いつもより空腹だったので、少し多めに用意して食事をする。

「ご馳走様でした。」

さてご飯も済んだし、お次は風呂だ。

えっ？どうやってそんな物には入るんだって？ご安心を。何故か冒険者セットの中に入っていた。

てか神よ・・・準備良すぎやしないか？いや、嬉しいけど・・・

そんな事を考えて、俺はユニットバス（結構大きめサイズ）と取り出し、魔法を使用する。

イメージはお風呂いっぱいのお湯。温度は40 前後

「ヒート・ウォーター」

ジャー

よし成功。水が無い所で水が出るか心配だったけど、ちゃんと出たから一安心。

うん。魔法ってホント何でもありだね。

程よい所で、お湯を止め湯加減を確かめる。

「うん。ちょっと熱いけど大丈夫だね。」

早速服を脱ぎお風呂に入る。

そして、これまた何故があったシャンプーや石鹸で体を洗い、最後に温まってお風呂を出る。

お湯を捨て、ユニットバスを倉庫にしまってからテントの中に入る。

「あつ、そういえば夜営どうしよう・・・」

すっかり忘れていた。どうしようと思い色々考えていたら、テントの説明書の裏に何か書いてあるのが目に入った。

『純へ

このテントは完成したときに、自動的に半径100メートルの侵入感知の結界と弱い認識障害結界（モンスターランクDまで）を張る様になっておる。

ここら辺りのモンスターランクはDまでじゃから安心して眠るが良

い。
』

ご、ご都合主義過ぎるだろうが爺さんよ・・・まあ助かるからいいんだけど。

んじゃ、不安要素も無くなったしさっさと寝よう。

おやすみなさい・・・

覚悟

皆の者おはよう。私が秋本純であゝる。

すいません。のっけから調子こきました。

初っ端から変なテンションでごめん。だけど今俺は結構パニくってる。

・ 一体なんでこんなことになっているかと言うと、ちょっと朝の風景から回想（現実逃避のため）するから良かったら付き合ってください・

~~~~~回想~~~~~

そう、俺は普通に朝起きて飯食って、準備して王都目指して北に進んでいた。

それで結構歩いたので、「少し疲れたな」って思い試しに空中に飛んで移動しようと思ったのよ。

うん。あの時最初は浮かびすぎてビビッたけど、試行錯誤していく内に何とか飛べたんだよね。

いやあ、あの時は素直に感動したね。武。術ってこんなに気持ちいいんだって……

んで、しばらくしてたら変な集団見つけたわけよ。

なんか5人くらいで馬車を追いかけてるの。

それで、その集団が馬車に追いついたら、なんか丸っこいおっさんが出てきてその集団に切り殺されてんだよね。↑今ここ

~~~~~回想終了~~~~~

な？軽くパニくるだろ？

俺はさつき状況説明したらなんか落ち着いてきた。

つーかこれって俗に言う『盗賊イベント』っぽいよね？

てか助けなきゃまずい状況だよね？

だけど良く聞いてほしい。平和な国ジャパンで育った生粋の日本人である俺は、人殺しなんてしたこと無いんだよね。いや、当たり前のことなんだけども……

だからさ、正直何が言いたいかって言うつぶつちゃけ怖いんだよね。ほら今だって足が震えてきてるし……

よく、冒険物の漫画や小説じゃ『殺す覚悟と殺される覚悟は出来るか』って言うけど、実際にその光景を目の当たりにすると絶対何も出来ないと思うよ。

だって俺が今実際にそうだもん。

この世界に来るときは確かに軽い気持ちだったけど、ちゃんと自分の意思でここに来てって自負してる。

だけどこれはまずいよ・・・確かに昨日の『ファイヤー・ボール』を使えば何とかなると思う。

しかし俺に出来るのか？『人殺しが』

あつ、今護衛の人と馬車の馬が切り殺された。

それで、馬車の中から誰かを引きずり出している。女の子が二人だ。

結構可愛いな・・・あの子達だけでも助けたい！！

そう思った瞬間、俺の中でナニカが崩れた・・・

~~~~~side~~~~~

馬車の中が激しく揺れる。

今私たちは盗賊の追っ手から逃げている。

「くそ！何てことだ。アレは『宵闇』の盗賊たちじゃないか。」

「つく、旦那もう追いつかれますぜ。」

「分かっている。先に逃げる。お前たちはあいつらを追い払え。商品は最悪死んでもかまわん。とにかくわしを守れ。」

欲にまみれた商人が指示を飛ばし、そのまま馬車の馬に乗り先に逃げた。

護衛の男たちは「了解」とだけ言って、馬車から飛び降りる。

馬車は運転手を失い、恐怖で馬は暴走し私たちが乗っている馬車が倒される。

「キャ！！！」

「大丈夫？」

倒された馬車にバランスを崩し、私の妹が悲鳴を上げた。

「お、お姉ちゃん・・・」

妹は襲われてからずっとこの調子だ。不安と恐怖の目で私を見つめる。

そんな私は、「大丈夫だから」と必死に声を掛け続けた。

激しい剣戟の音と時折聞こえる男の声の断末魔。そして馬の悲鳴が聞こえる。

それが最後だったのだろう。私たちの前に盗賊が現れる。

「へへへっこいつは上物だ。さあこっちに来な女共!!」

抵抗しようにも手足は枷で封じられ、抵抗できない。

「リーダー、こいつら俺らで犯っちゃいましょうよ。こんなに金があるんだから金だけボスに謙譲しましょうよ。」

「そうだな。俺達だけで犯っちまうか。」

下種な笑い声が辺りに響く。そして、妹はその提案に「ヒッ」と声を出す。

しかし、神様は私達を見捨ててはいなかった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

突然空から咆哮が聞こえたと思ったら、盗賊達の頭上に炎の槍が降りかった。

side out

俺は何かが崩れると同時に咆哮を上げた。

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

頭の中で何かだ爆発する。体が熱い。あの盗賊達をコロセトナニカガウツタエル。

イメージ  
創造する。

性質は炎、形状は槍

イメージ  
想像する。

ヒョウテキハアノゴニン

イメージ  
幻想が完成し、裁きの槍が盗賊たちに降りかかる。

悲鳴も無く、断末魔も無い。盗賊達は絶命した。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

呼吸が荒い。今俺は何をした？

俺がこの盗賊達を殺ったのか？

でも、とにかく今は、あの子達の無事を確かめよう。

そう思って、わずかだが呼吸を整え馬車へと降り立った。

そして、フードを被った少女達がぽかんと俺を見つめている。

「あの・・・大丈夫ですか？どこか怪我はありませんか？」

とにかくファーストコンタクト取ってみる。

「あつ、えつと、大丈夫です。怪我はありません。あつあの、助けて頂きありがとうございます。」

ペコンと頭を下げられた。凜とした声で凄くドキドキした事を報告しよう。

「あっいえ、これはどうもご丁寧に。そちらの方は大丈夫ですか？」  
あまりにも綺麗な声だったのでこっちが恐縮してしまった。

俺はそれを誤魔化す様に、いまだ放心しているもう一人の方に声を掛けてみた。

「にゃ！だ、大丈夫です。ありがとうございます。」

もう一人の方のようやく我に帰り、慌てた様子でお礼をしてきた。

うん。少し幼さが残る可愛い声だった。

それにしても、『にゃ』ってなんだ『にゃ』って・・・

「いえいえ、二人とも無事で何よりです。それより、大きな馬車で  
すね。こんなに大きい始めて見ました。」

俺は、始めてみる馬車に興奮してしまい、馬車の周りをぐるぐる回  
って馬車を眺めていた。

「それは、奴隷商の馬車よ。そして私達はその商品なの・・・」

綺麗な声の女の人が、忌々しい声で呟いた。

やべえ、マジ怖え。俺もしかして地雷踏んだ？

「そ、そうなのですか？それよりお二方、そろそろここから離れませんか？ほら、いつ盗賊の仲間が来るか分からないし、モンスターだっていますし……」

「それもそうね。ところでこれ、外して頂けますか？」

そう言って見せてきたのは、両手両足に付いた鍵付きの枷だった。

「これは外すのに時間が掛かる物ですね。後で必ず外しますのでもう暫らくお待ち頂けませんか？」

「そう、仕方ないわね……」

残念そうに言ってきた。うう、なんか罪悪感が……

「すいません。俺はやることがあるのでもうちょっと待っていてください。すぐ済みますから。」

「やることって？」

今度は可愛い声の子が聞いてきた。

「これですよ。『空間倉庫』」

そう言っつて、俺は馬車ごと空間倉庫に入れて、奴隷商人の死体を調べた。

「おっ、あつたあつた。」

目的の物と商人が持っていた宝石とお金らしき物をパク……もと

い拝借し、女の子達を脇に抱える。

「「キャ」」

突然抱き上げられ、驚いて声を上げる二人。

「ああすいません。いきなり抱えてしまって。でもこの方がこっちも楽なので少しの間我慢してください。」

持ち上げたときに、『二人とも軽いなあ』とか『体柔らけえ』とかそんな邪な考えを隅に置き、俺はイメージする。

ここに来たときと同じ、空中に浮かび移動。時速は20キロ程度。

「行きますよ——フライ——」

ふわっ

俺達は浮き上がり、北を目指す。目的地の王都まで真っ直ぐに・・・

## 覚悟（後書き）

ヒロインズ登場！戦闘描写がうまく出来なくてすいません。

## 主従関係

盗賊イベントからある程度張られたところで、俺は地面に降りる。

とゆーか・・・

「もう無理！！マジ限界！！！！！！」

腕で抱えている少女達を降ろすと俺はそう叫んだ。

そう、俺はこの半日ほとんど空を飛んで移動を行い、『ファイヤー・ボール』の上位魔法であろう『フレイム・ランス』（今命名）を五発使用し、また空を飛んで移動なのだ。

さすがに疲れた。もう一步も動きたくないし、体の倦怠感が半端ない。軽く死ねるんじゃないかと思う、うん。

「というわけで、日も落ちかけてきたので今日はここで野宿をします。女性の二人には申し訳ありませんが我慢してください。」

うん。こんな状態でも女性に気を使う俺・・・紳士だ。（キラッ）

・・・・・・・・・・・・・・・・

自分でやってキモかった・・・鬱だ。

「あつ。大丈夫です。野宿は慣れていますから。」

何？野宿は慣れてる？いかんよお嬢さん。ちゃんとしたベットで寝

なさい。これお兄さんとの約束だぞ。

すんません。さっきから疲れてるんで変なテンションになってます。

「えっえくと、それなら問題ないのかな？それから、もう少し休憩させて。そしたら君達の枷を外すから。」

「はい。ありがとうございます。」

よっぽど嬉しいみたいだね。うんうん。おじさん頑張っちゃうよ。でももうちょっと待って・・・

—— 30分後 ——

よし皆、だいぶ魔力が回復してきたと思う、秋本純だ。

これから二人の枷を外しちゃうぜ。

「二人ともお待たせ。とりあえず魔力が回復したから、今から二人の枷を外します。」

「はい。」

さて、それじゃ空間倉庫であの商人から奪った……もとい、拝借してきた鍵で二人の枷を外していく。

——カチンツカチンツカチンツガチャ——

さてこれで全部だな。

「これで終わりだな。二人共もう大丈夫だよ。」

俺は優しく微笑みながら二人に言う。

「ほつ本当にありがとうございます。これで……やっと自由に……  
うつうつわ……ん。」

「ありが……ひぐつ……とうございばず……ふえ……ん。」

あゝあ、よつぽどさつきまで怖かったんだろう。二人とも泣き出しちゃった。しかも抱きつかれた……どないしょ。

とりあえず、無理に引き剥がすのは可哀相なので、二人の背中を撫でながら「もう大丈夫だよ」とか、「よく頑張ったね」とか言って慰め励ました。

しばらく経って、二人がようやく落ち着いてきたので話しかけてみることにする。

「二人共落ち着いたかな？そろそろ離してくれるとありがたいんですが・・・」

何気に緊張しながら言ってみる。

しかし、俺の言葉を聞いたとたん二人俺を見上げてくる。

いや、待て二人共。何故上目遣いになる？何故そんなに目をウルウルさせる？そして何でそんなに不安そうな、残念そうな顔をするんだ。これじゃまるで俺が悪者みたいじゃないか・・・

「ほっほら、ベースキャンプも張らないといけないし。ね、また後で一緒にいるから。辛いかも知れないけど今は少し我慢して。」

俺の言葉に納得してくれたのか、二人は渋々ながら離れてくれた。

二人が離れてくれたので、俺は倉庫から昨日のキャンプを取り出した。

畳むのが面倒だったのでそのまま朝に倉庫に放り込んだから、昨日のままの状態だ。

昨日と同じ感じで、テキパキと準備をしている時、二人の様子が気になったので少し見てみると何やら話し込んでいるみたいだ。

なんか真剣な顔をしていたので話しかけない事にしておこう。

キャンプの準備が出来たので、夕食の準備に取り掛かる。ちなみに今日は魚料理メインだ。なんとなくその方がいいような気がしたから。

「おい。二人とも飯だぞ。」

ご飯が出来たので呼んでやる。しかし、今日はずいぶん作りすぎた。食べきれるかな？

二人がやってきたとき、何故か凄く嬉しそうな顔をした。謎だ・・・

「いただきます。」

そう言っただけで俺はご飯を食べ始める。が、二人はなかなか食べようとしなない。

「どうした？早く食べるよ？」

俺は不思議そうに聞いたら、意外な答えが返ってきた。

「あの・・・私達が食べてもいいんでしょう？」

食べたそうなの、その上で驚きつつも食べるのを我慢する声が響く。

「意味が分からん。君達に食べてほしくて作ったんだ。遠慮しなく

ていいからドンドン食べてくれ。」

当然のように言う俺に、二人は目を丸くする。そして二人は見つめ合い、決心が付いたかのように二人同時に食べ始める。

二人の食べるスピードが徐々に速くなっていくのを見て、安堵した俺は食事を再開することにする。

「『ごちそうさまでした。』」

三人で綺麗に食べてしまった。結構な量だったが、ほとんど二人のお腹に消えてしまった。

「さて、ご飯も食べたし。そろそろ自己紹介をしようか。俺は、秋本純。あつ純のほうが名前ね。18歳だ。」

そう言って、俺は二人に自己紹介していく。

すると二人も姿勢を正し、フードを取って自己紹介してくれた。

「私はアリア＝リム＝グラシアと申します。アリアとお呼び下さい。ご主人様。」

「私はロツテ＝リム＝グラシアです。アリアお姉ちゃんの妹です。ロツテって呼んで下さい。ご主人様。」

二人が自己紹介してくれたが、今の俺の耳には届いていなかった。

俺は二人のある部分を凝視し放心していた。

「あつあの？ご主人様？どうかありませんでした？」

アリアさんが聞いてくるが、俺はうまく答えられない。そして……

⌈  
⌋  
.  
.  
.  
⌋

「？」

未だ放心している俺にどうして良いか分からず、二人は顔を見合わせて俺の言葉を繰り返した。

「リアル猫耳キター——（・）——！！！！！！！！」

俺はつい本能に逆らえず叫んでしまった……

俺の魂の叫びを聞いて二人は『ビクッ』てなった。ホント猫みたい  
に『ビクッ』って。めっちゃ可愛い。

「うわ本物の猫耳だ！ねえこれ触ってみても良い？」

そして俺の理性はまだ戻ってきていないらしい。俺は暴走状態のまま二人に聞いてみた。

「はい……いいですよ。」

「私も大丈夫です。」

二人の了承を聞いたので、ゆっくりと二人の頭に手を伸ばす。

そして、猫耳<sup>ヤッ</sup>は俺の手が近づく度にピクピクとその身を動かす。何この生き物超可愛い・・・

ピトッ

そしてとうとう俺は猫耳<sup>ヤッ</sup>に触れた。そしてゆっくりと撫で回す。

「ふぁ／／／」

「やん／／／」

二人からなんか甘い声が聞こえたがこの際無視。俺はそのまま猫耳や頭を撫で回し続けた。

「ふにや／／／／／」

二人とも気持ち良さそうだったので、俺はしばらくその行為をやめられなかった。

しばらく経って満足した俺は、そっと二人の頭から手を離す。

「「あつ・・・」」

もう終わり？って感じの視線を二人から受けるが、これ以上続けると俺の方が持たないので話の続きをする。

「えつと、撫でさせてくれてありがとう。アリアとロッテでいいんだよね？」

「いついえ、こちらもちよかったです／＼ご主人様／＼」

「はふう／＼ご主人様気持ち良いよう／＼」

ん？今二人からありえない単語が聞こえたような・・・

「あゝと、そのご主人様ってどうゆうこと？」

「あつそれはですね。私達、ジュン様に付いて行こうって二人で話し合っただですよ。」

は？これなんてエロゲ？女の子助けてご飯あげたら俺に付いていきたいって・・・いくらなんでも美味し過ぎでしょ？

「えつと、そう言われても困るんだけどなあ。それに、君達さつきやっと自由になれたばかりなんだから、俺なんかに付いてこらずに王都に行って自分にあつたものを探したほうが良いんじゃないかな？」

遠回しに付いて来るなと言ってみる。

「私達は、ジュン様と共にいきたいんです！」

「それに私達、王虎族おうこですから戦闘でも役に立ちます。必要でしたら夜のお仕事も頑張りますから／＼」

二人とも決意が硬いようだ。そしてロツテよ、恥ずかしかったら言わんでよろしい。こつちも恥ずかしくなるじゃないか／＼

「はぁ・・・わかったよ。二人とも本当にそれで後悔しないんだな。」

「「あつ、はい。よろしくお願いします。ご主人様。」」

ガバツと二人は勢いよく頭を下げてきた。俺はそんな二人に苦笑すると、「よろしく。」とだけ言った。

「さて、話が纏まった所で幾つか俺も質問に答えてもらっても良いかな？」

「はい。何なりとご質問ください。」

どうやら、アリアさんが答えてくれるそうだ。

「じゃあアリアさん。さっきロツテさんが言ってた王虎族って何？」

「王虎族は獣人族の中でも1、2を争うほどの種族で、神獣に最も近い存在とも言われています。とはいえ、これは一般常識のようなものなのですが、何故そのような質問を？」

戸惑いながら聞いてくるアリアさんがちょっと可愛い。

「俺は山の中で祖父と二人で育ったから、一般常識には疎くてね。」

俺は苦笑して言うと、アリアさんは慌てて頭を下げる。

「そうだったんですか。大変失礼しました。」

「いいよ気にしてないし。じゃあ次の質問。アリアさんとロッテさんは字の読み書きは出来る？」

「はい、出来ますよ。あと、私の事はアリアと呼び捨てて下さって結構です。」

「私の事もロッテと呼び捨ててね。ご主人様。」

「わかった。じゃあ次の質問。この世界の通貨について教えて。」

「畏まりました。えっと、それでお金のほうは？」

「あっそうか。ちょっと待ってね。」

俺は倉庫の中からあの商人の財布を引っ張り出す。

「これさっきの商人のだけど、どのくらい入ってるんだろう？」

俺はテーブルの上に財布の中身を全部出した。

——ジャラジャラジャラ——

白っぽい金貨、金貨、銀貨、銅貨がたくさん出てきた。

「結構ありますね。えっと、白金貨16枚、金貨168枚、銀貨139枚、銅貨178枚ですか。」

「通過はここにあるのが全てなのか？」

「いえ、あと、あまり出回りませんが竜金貨という物が存在します。」

「竜金貨？」

「ええ、通過の最上位になります。」

「なるほどな。換金の単位は？」

「どの通貨も100枚づつで一つ上の通貨に換金になります。」

「なるほど。わかった。」

俺はそれを聞いて瞬時に暗算する。えっと、銅貨一枚を100円と仮定すると・・・うわぁ偉い金額になったな。一生遊んで暮らせるんじゃないのかこれ？

「それじゃ、最後の質問だ。アリアとロッテは戦闘ではどんな風に戦うの。」

「私は、双剣を使います。あと、魔法も少々使えます。」

「私は主に魔法を使って戦うよ。後、護身術のために格闘術も少しだけ出来ます。」

「そっか。わかった。俺は片手剣と魔法を使って戦うスタイルだ。実はどちらも素人みたいな腕だから二人とも教えてくれると助かる。」

「「分かりました。」」

「よし、ある程度情報も纏まったしお風呂に入って今日はもう寝ようか。」

俺はそう提案すると二人は驚いていた。

「お風呂・・・」

「ですか？」

「そ、二人とも女の子なんだから体は清潔にしたいでしょ？」

「それはまあ、そうですが・・・」

「反論は認めません。準備するから付いてきて。」

俺達はテントから離れると、俺はお風呂の準備に取り掛かる。

「この辺でいいか。空間倉庫。」

昨日使ったユニットバスを出して、昨日と同じ手順でお湯を張る。

この間にも二人はひどく驚いたようだ。

「あの、ご主人様。さっきの魔法は何ですか？」

魔法使いのロツテが聞いてきた。

「ああ、空間魔法だよ。ロストマジック失われた魔法に該当するからほかの人には内緒にしててね。」

「はっはい。分かりました。」

アリアもだよって言って、秘密にさせる。

「さて、準備完了。お風呂の周りに敷居を作ったから、俺を含めて覗かれる心配は無いと思うよ。石鹸とタオルはここに置いておくからね。まあゆっくり浸かって疲れを取るといいよ。」

そう言って、俺はキャンプに戻る。

キャンプに戻った俺は、倉庫からあの時の奴隷商人の馬車を取り出した。

「さて、じゃあ色々と物色しようか。」

しかし、辺りはもう夜。従って馬車の中は真っ暗だった。

「くそもも見えないや。——ライト——」

俺は光の玉をイメージして明かりを照らす。

「お、武器発見。あの時の護衛の奴のかな、さてこっちは、おお宝石じゃん。ラッキー♪」

気分はRPGの勇者。でもやってる事は傍から見れば盗賊同然・・・

物色し終えた俺は、馬車を倉庫に入れてフライで空を飛び、盗賊イベントのあった場所へと急いで戻る。

この時の時速はあの時のざっと四倍。ほとんど一瞬で着きました。

そして、馬車を再び取り出し火を放つ。隠蔽である。

そしてベースキャンプに逆戻り。丁度二人もお風呂から上がったみたいだ。

「あ、ご主人様。お風呂お先に頂きました。見張りは私達がやりますので、ご主人様もお風呂に入ってください。」

「うん、ありがとうアリア。じゃあお風呂行くね。」

気づかれていないはず。うん、大丈夫。

お風呂から上がると、二人は緊張した面持ちで待っていた。

「ただいま。二人とも緊張した顔してるけどどうしたの?」

「いえ／＼／＼なんでも／＼／」

「そう?じゃあ二人ともテントに入って寝なよ。一応テントの周りは結界が張ってあるけど、念の為、俺が周囲を警戒しておくから。」

「結界ですか?」

「そ、結界。俺も詳しい事は分からないけど、そのテントが張ってあるとモンスターが寄ってこないんだって。」

「そう・・・ですか。あの、ご主人様お願いがあるんですけど。」  
顔を俯かせてアリアが言う。ロツテも顔を俯かせて恥かしそうにしている。

「なに?言つてごらん。」

俺はなるべく優しい声になるように言う。

「「わ、私達を抱いて下さい／＼／」」

うわゝ、なんか予想をはるか上回ることを言われたぞ・・・

って、現実逃避してる場合じゃない。早くこの状況を何とかせねば。

「えっと・・・なんで？」

どうしてそんなことになるんだろ？と、俺は首をかしげた。

「あ、あのですね。ご主人様と正式な契約をしたいと思ひまして／＼」

「契約？」

俺は真っ赤になっているアリアに聞き返す。

「はい／＼主従関係・・・主人と奴隷の関係になる場合、体のパスを繋げなければならないのです。」

「奴隷？体のパス？」

「はい。私たちを従者と置く場合、主従の契約をしてから、肉体関係を結んでパスを繋げないとだめなんですよ／＼」

そう言つてアリアとロツテは真っ赤になって俯いた。

あゝ・・・なるほどね・・・つまり契約をして、f a t eでやつてた感じで俺とアリアとロツテとの間にラインを繋ぐってわけか・・・でも、会つて少ししか経ってないのにこうなるのはまずいよね？まあ、俺としては大歓迎なんだけど、二人にとってはまずいかも知らない。

「えっと、二人とも無理してない？助けて貰った恩とか感じてるん

だったら、俺は気にしてないし。第一自分をもっと大切にしなきゃだめでしょ？俺悪い人かもしれないよ？」

「無理なんかしてません。恩返しもしたいって気持ちもありますが、その感情よりもあなたに捧げたいって思っているんです。」

「そうです。それに、私とお姉ちゃんを助けてくれた人が悪い人なんてありえません。」

ロツテに断言されました。てゆうか二人に押し切られそうです・・・

「うーん。二人とも俺でいいの？本当に後悔しない？」

「後悔なんかしません。」

「私も！だから・・・」

「「お願いします。」」

お願いされちゃった。

「わかった。じゃあ契約をしてから一緒にテントに行こう。」

「「はい！」」

おうおう、嬉しそうな顔しちゃって。まあ俺もさっきからニヤケ顔が止まらないから人のことは言えないけど・・・

この日の夜、俺は・・・男になりました。

## 初戦闘×二人の実力×王都到着

男になった翌日。俺達は朝食を食べて、ベースキャンプを解体した後、再び王都に向けて歩いていった。

「ご主人様。今日は飛んでいけないの？」

ロツテが聞いてきた。多分『フライ』のことだろう。

「飛んで行ってもいいけど、ロツテとか他の魔法使いは出来るのか？」

「出来ないですよ。浮くことは出来ても移動は出来ません。」

「そうなのか？じゃあここからは歩きだな。王都に飛んでいって下手に目を付けられたらかなわないし。」

「ううゝ、便利なのに・・・」

ロツテは可愛らしく不満を漏らす。そんな俺は苦笑して

「まあ、俺は色々規格外らしいからな。」

そう、昨日テントの中で色んな話をした。その時に魔法の事について話したら規格外って言われたっけ・・・

「そういえば、俺の切り札をまだ二人には見せていなかったな。いい機会だし見せておこうと思う。ただし、わかってると思うが他言無用だ。」

「切り札ですか？」

「ああ、俺の特殊能力。」

「はあ？わかりました。」

アリアは不思議そうにしていたが、取り合えず納得したようだ。

「んじゃ、今から説明するぞ。俺の特殊能力は『一定空間内の無意識物意思強制付与』だ。」

「『一定空間内の無意識物意思強制付与』？」

「なにそれ？」

当然のように分からないといった二人に、俺は能力の説明をしていく。

「って感じの能力だ。分かったか？」

「理解しましたけど、それって強いんですか？」

「うんうん。それに結構弱点あるし。」

「強いよ。使い方次第では、この能力一つで軍と渡り合えると思うてる。」

まあ弱点があるのは仕方ないよ。

弱点が無い”最強”なんてこの世のどこにもありはしないんだから。

「

そう言つて俺は、倉庫から剣を二本取り出し地面に放り投げる。

そして腰に差している剣も放り投げ、地面には三本の剣が突き刺さった。

「ご主人様、何をなさっているのですか？」

「実験。実際に見てもらおうと思つてね。」

アリアが聞いてきたので、俺は答える。そして、剣に狙いを定めて能力を使う。

すると、剣が浮き上がり独りでにゆっくりと俺の方に向かってくる。

「凄い・・・剣が浮かんでる。」

「こんな魔法見たことありません・・・」

ロツテとアリアが驚いている。

「じゃあ軽く打ち合わせてみるな。」

俺はそう言つと、剣に命令を下す。

ギョんつと俺から剣が離れ、超高速の世にも珍しい剣同士の打ち合いが始まる。

——キンッキンッキンッ！！ガガガガガガ！！！！！！！！——  
それはまさに剣の乱舞。アリア達はこの光景に見惚れている。

「こんな感じだ。武器の技量は俺の技量に依存するが、それは俺自身を鍛えれば問題ない。

この能力の最大の特徴は武器の使い手がなく、武器が自らの意思を持ち敵を攻撃する事にある。

敵からしたら武器が襲ってくるんだからちよつとしたホラーだな。それに使い手がいないから反撃に出辛く、攻撃されたら回避か防御しか出来なくなる。」

「それはさすがに・・・」

アリアは剣士だから自分が襲われたらとも思っただろう。軽く冷や汗が出る・・・

まあ俺もこんなのに襲われたら嫌だし・・・三方向から同時に襲われる、しかも使い手がいないから倒す術が見つからない・・・これなんて無理ゲー？

「まあ、こんな能力だが弱点も存在する。

一つ、これは当然だが魔法とかは操れない。勿論生きている生物もだ。

二つ、使役できる無意識物は俺のランクに依存する。  
他にもあるがまあ大まかはこのところだ。」

「何で魔法はダメなの？」

ロツテが不思議そうに聞いてくる。

「魔法って言うのは大雑把に言ったら、魔力を消費して使用する現象を意識して魔法を使うだろ？」

この能力はあくまで『無意識』。

使役する対象に少しでも『意識』があると能力が発動できないんだ。

「

へへ、そうなんだ。」

「ああ。今の説明で分かったか？」

「うん大丈夫。」

ロツテが満足するように満面の笑みを見せてくれた。

そして俺は三本の剣を自分の目の前に差し、自分の剣を引っこ抜く。

「アリア。お前は双剣使いだろ？王都まであと少しだけど、何があるか分からないからこれで敵が現れたら対処してくれ。」

「はい。わかりました。ご主人様とロツテは私が守ります。」

「ええへお姉ちゃんだけずるい！私にも頂戴よへ。」

俺がアリアに双剣をあげたら、ロツテが駄々をこねた。

「ごめんなロツテ。武器はこれしかないんだ。王都に着いたらすぐにお前の武器も買うから今は我慢してくれ。」

「ううゝ、わかった。絶対だよご主人様。」

「ああ、分かってる。アリアも今はそれで我慢してくれな。アリアの分も買っから。」

「はい。ありがとうございます。ご主人様。」

「ところでロッテ、やっぱり魔法使いは杖とか魔法媒体がないと魔法は使えないのか？」

「え？そんなの当たり前でしょ？」

私は杖も使うけど、接近された時の為に魔法媒体はガントレットで契約してるよ。

お姉ちゃんの場合は剣を魔法の媒体にしてるけど。」

ロッテの言葉を聞いて、確認の為にアリアを見ると頷いてくれた。

「なるほどな。わかった。」

俺はそう納得して、王都に向かって歩き出した。

しばらく歩いていると、前方から犬？と人？の様なものが現れた。

「ご主人様！敵です。離れて下さい！」

アリアは逸早く剣を抜き、迎撃に備える。

「そくだよご主人様。ここは私とお姉ちゃんに任せて。」

そう言っテロツテも前に出る。

「待テロツテ。お前はアリアと違ッテ丸腰じゃねえか！」

「大丈夫だよご主人様。昨日も夜言ッたけど、獣人族は人族より力とスピードがあるんだよ？」

「いや、そうかも知れないが危険だ！おれがやる。」

「大丈夫ですよご主人様。ロツテの格闘術は強いです。だから私達を信じてください。」

「アリアまで・・・ああもう分かった。二人ともやって来い。」

「「畏まりました。ご主人様。」」

俺がそう言ッテ、二人は一礼して敵に突ッ込んでいく。そして・・・

そして、二人が姿が一瞬消えて

——ザシュッ——

——ドガンッ——

何かが切れる音と、何かがぶつかる様な音が聞こえた。

そして、二人は意気揚々と戻ってきた。

「たっだいま〜ご主人様。」

「只今戻りました。ご主人様。」

そこには満面の笑みを浮かべたロツテと、まるで何事も無かったような表情のアリアがいた。

「あっああ、お帰り二人とも。早かったな・・・」

「うん。だってあんなの雑魚だもん。」

「ええ、さすがにワイルドウルフとゴブリン如きに遅れは取りません。」

「そっそうなのか。」

俺はそう戸惑ったように言いながら、モンスターのいた所に行く。

すると、モンスターの死骸の近くにキラキラ光る石の様な物があつた。

「これはなに？」

俺はその光る石を摘んで二人に見せた。

「さあ分かりませんか？王都に行けば分かると思います。」

「わたしも。ねえねえ、それよりこの死体から採取はしないの？」

「うーん。採取したいけど、どこを採取したらいいのかわからないから今はお預けだな。二人は分かるのか？」

「すみませんご主人様。私も分かりません。」

「わたしもだよ・・・」

俺の質問に答えられなかったのがショックなのか、二人はシュンとする。猫耳をペタンと伏せるオマケ付だ。

「そうしょげるなよ二人とも。」

そう言っただけ俺は二人の頭を撫でた。

「／／／」

二人は真っ赤にして受け入れてくれたので俺も頬が熱くなる。

「さて、じゃあこの石みたいのだけ回収して出発するか。」

「はい。」

モンスター初遭遇から歩いて三時間。ようやく俺たちは王都に付いた。

時間帯から言って今はお昼過ぎのようだ。

「ようやく着いた・・・」

「そうですね・・・」

「長かったよう」

それぞれ思っていることを口にして、俺達は城門へと歩き出す。

「止まれ！お前達は旅の者か？」

「リム達、ここは俺に任せて。」

二人に小さな声で言うと、頷いてくれた。

「はい。そうですが・・・」

「ならば身分証を見せろ。」

「私達は小さな村からやってきたので、身分証は持ち合わせていません。どうしたら王都に入れるのでしょうか？」

少し嘘をついて下出に出る。

「ならば、入場料は一人銀貨1枚だ。お金は持っているか？」

「はい。長老が持たせてくれました。これでいいですか？」

そう言つて俺は門番にお金を渡す。

「そうか。ならば、仮の身分証を渡すから着いてきなさい。」

「はい。ありがとうございます。」

門番の兵士さんが歩き出すので俺達はそれに付いて行く。

「ご主人様。一体いくら渡したのですか？あの兵士、お金を渡したときから態度が変わつたような気がしたのですが？」

アリアが小さな声で聞いてくる。

「鋭いね。あの兵士に渡したお金は銀貨6枚だよ。」

「何故そのようなことを？」

「情報を得るためさ。俺達は王都の事を知らなさ過ぎる。だから少しでも情報を得て対策を得たほうがいい。アリアも覚えておいてね？」

「なるほど。ロッテにも伝えておきましょう。」

「よろしくね」と話をしていたら、テントのような詰め所につれてこられた。

「いやあ、さつきはキツイ態度を取ってすまなかったね。」

「いえ、お仕事なので仕方ありませんよ。」

それより、私達は王都に来るのは初めてなのですが何か注意することはありませんか？

なにぶん田舎から出てきたもので、右も左も分からない状態なのですが・・・」

俺は困ったような表情を作り、兵士に聞いてみる。

「はっはっはっ、まあ田舎から出てきたのならしょうがないね。」

注意することか・・・まあ南地区にある貧困地帯に足を踏み入れなければここは良い所だよ。」

「貧困地帯ですか？」

「ああ、職を失った浮浪者や犯罪者達が住まう場所さ。」

「なるほど。ありがとうございます。」

「いやいやいいって。それより身分証が出来たみたいだ。はいこれだよ。」

兵士は三枚のカードみたいなものを渡してくる。

「ありがとうございます。ところで、職を探しているのですが何かいい職はご存じないですか？」

「職かい？そうだな・・・ここでならギルドに登録するのもいいか

もしれないな。君達は旅人なのだろ？」

「はい、そうですが。ギルドですか？」

知っているが一応聞いてみる。

「ああ、簡単に言うと何でも屋さ。この町の中央広場を東に行けば大きな建物がある。そこが王族直轄のこの王都最大のギルドだよ。」

「そうなんですか？ありがとうございます。あと、最後にお勧めの宿屋があれば教えて下さい。」

「お勧めの宿屋ねえ……  
なら、『月の女神』に行くといい。

あそこは、なかなかに安価でサービスも充実。何より飯がうまい。  
おっと、少し話すぎたみたいだね。もういいかな？」

「はい。お忙しいのにわざわざありがとうございます。」

俺はそういうと、リム達も頭を下げる。

「ああ、気をつけてな。中央広場はこの通りを真っ直ぐ行けばつくから。」

兵士はそう言って仕事に戻っていく。

そして俺達も中央広場に向けて歩き出した。



## 月の女神とギルド

アレから俺達は王都の城下町を歩いている。

見渡すだけで色んな種族がいることが分かる。

人間のおばさんと耳の長いおばさんが談笑していたり、鎧を着た二本足で歩くトカゲがいたり、狼みたいな獣人族が果物っぱいのを売っていたりと様々だ。

そしてようやく、広場に出たので教えて貰った通り東の大通りに行く。

「あつ、ご主人様。あれみたいですよ『月の女神』という宿屋は」

アリアが大きな建物を指差して言う。

「わかった。しかし、大きい所だな。」

俺は予想より大きな宿屋に圧倒される。

そして宿屋の扉を開く。

——チリンッチリンッ——

ベルの音が宿屋に鳴り響く。多分来客を知らせるベルだろう。

「いらっしやいませ。『月の女神』へようこそ。」

元気いっぱい少女が俺たちを出迎えてくれる。

「この宿にしばらく滞在したいのだが・・・」

「ご宿泊ですね？こちらです。」

宿屋の人にカウンターまで案内される。

「おかあさん。お客さんだよ。」

「はいはい。いらっしやいませお客様。『月の女神』へようこそ。宿泊はお一人様銀貨1枚ですよ。」

カウンターから肝つ玉母さんみたいなおばさんが現れた。

「あっじゃあこれで三人分。期間はそうですね・・・30日でお願いします。」

俺はそう言つとポケットに手を入れて、その中で倉庫から金貨を1枚取り出しカウンターに置く。

「はい。お預かりしますね。ではここに代表者の名前を書いて下さい。」

「俺は字が書けないので代筆でもいいですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

「わかりました。じゃあ、アリア頼む。名前はジュン・アキモトな。」

「畏まりましたご主人様。」

アリアは台帳に俺の名前を記入していく。

「では、身分証を見せてくれないかい？」

おばさんは、アリアが書いているときに俺に話しかけてきた。

「わかりました。一人分でいいですか？」

「ああかまわないよ。」

俺は身分証を見せる。

「はい。これで手続きは終わったよ。部屋はどうするんだい？一緒にいいかい？」

「そうですね・・・なら分けて」「一緒にいいです！」「おいおい、お前等なあ・・・」

「ふふ、わかったよ。私はこの女将のミトだよ。これからよろしくね。」

二人の必死な様子が可笑しかったのか、ミトさんは笑いながら自己紹介してくれた。

「うつ／＼こちらこそこれからお世話になります。私はジュン＝アキモトです。こちらが・・・」

「ご主人様の従者のアリア＝リム＝グラシアと申します。これからお世話になります。ミト様。」

「同じくご主人様の従者でロツテ＝リム＝グラシアです。これからお世話になります。ミト様。」

二人は俺の自己紹介の後に続いてお辞儀をした。

「ミト様なんて恥かしいね。ミトさんでいいよ三人とも」

ミトさんは恥かしそうに言う。

「だそうだ二人とも。気をつけろよ。」

「かしこまりました。これからよろしくお願いします。ミトさん。」

二人は改めてお辞儀をした。

「ああこちらこそ。部屋は娘に案内させるよ。おいコッル、この子達を部屋まで案内しなさい。」

「はい。」

大きな返事をしてさっきの娘がやってきた。

「じゃあコッル。ジュンさんたちをお願いね。アリアちゃん、ロツテちゃん娘と仲良くしてくれると嬉しいよ。」

「はい。わかりました。」

「あつ、ありがとうございます。私はココルです。皆さんよろしく  
願います。」

「こちらこそよろしく。俺はジユン＝アキモトだ。こっちが・・・」

「ご主人様の従者のアリア＝リム＝グラシアと申します。これから  
お世話になります。ココルさん。」

「同じくご主人様の従者でロッテ＝リム＝グラシアです。これから  
お世話になります。ココルさん。」

そうして俺達は挨拶を交わす。

「私の事はココルって呼び捨てて下さい。さん付けはなんか慣れて  
なくて・・・」

「なら俺はジユンでいい。よろしくなココル。」

「私の事はアリアと呼んでください。よろしく願います、コ  
コル。」

「私はロッテって呼んでね。よろしくココルちゃん。」

「皆さんよろしく願います。あとアリアさん。敬語じゃなくて  
いいですよ？私は敬語は呼ばれ慣れてなくて変な感じがします。」

「そうですか？ですがこれは私の癖ですので、なるべく気をつける  
ようにしますね。」

「ありがとうございます。じゃあ部屋に案内しますね。」

「こちらがジュンさんたちの部屋になります。」

そう言っ、部屋に案内された俺は部屋を見ると絶句した。

大きめな部屋には、四人が座れるテーブル、鏡がついた大きめな化粧台、かなり大きな木箱、そして筆筭。極めつけは大きなキングサイズのベットが”一つ”。

「食事は地下で取ることが出来ます。基本的にいつでも食事が取れるようになっていきます。次にお湯の提供ですが、基本的に私に言って頂ければ用意します。その場合は使用料としてお一人様銅貨5枚を頂いています。何かご質問はございますか？」

結構早口で説明された。まあ理解したけど・・・

てゆうか、微妙にココルの顔が赤い気がする。きつとお年頃なのだろう。リム達も真っ赤になって俯いてるし・・・

「ああ大丈夫だよ。」

「そうですか、なら私はこれで失礼します。」

ココルが一礼して立ち去っていった。

「んじゃ、二人とも。部屋も確保できたし早速だけど、ギルドに登

録に行こう。」

部屋を確保した俺達は、ギルドに行くことにした。

『ギルド』それは様々な依頼が飛び交う『何でも屋』の総称。俺達は今そのギルド前に来ている。

「でかいなここ。さすが王国直轄なだけはある。」

「そうですね・・・まさかここまでとは。」

「おっきい・・・」

俺たちが呆けていると周りからジロジロと視線を受ける。

「って、呆けてる場合じゃない。行くよ。」

「「はい。」」

そしてギルドの扉を開けて中に入る。

・・・・・・

中に入った俺達は、一瞬にして視線を浴びたが、それはすぐに無く

なった。

そして俺はすぐ近くのカウンターにいるお姉さんに話しかける。

「あの・・・」

「はい、ギルドへようこそ。見ない顔ですが初めての方ですか？」

「あっはい。それで、ギルドに登録に着たんですけど。」

「ご購入ですね。ご購入の場合は右の階段を上がってすぐ目の前にある受付でご購入が出来ます。」

「わかりました。右の階段ですね。ありがとうございます。」

俺はお礼を言うと、右の階段に向かった。

階段を上って、すぐの窓口みたいな所にいるお姉さんに話しかける。

「あの、ギルドの登録をしたいのですが。」

「ご購入のお客様ですね。まず、当ギルドについてご説明したいのですがよろしいですか？」

「はい。よろしく願います。」

「では、隣の部屋で掛けてお待ちください。」

俺達はその言われて隣の部屋に入り、椅子に腰掛けた。

そしてさっきのお姉さんがお茶を持ってきてくれた。

「ソフィール茶です。どうぞ。」

俺はお礼を言っ  
て口にする。

スツとした味が口の中に広がる。どうやら、ミントテイみたいなの  
もらしい。

「では、改めまして当ギルドについてご説明させていただきます。」

「はい。お願いします。」

「当ギルドは……」

となります。何かご質問はございますか？」

なっ長い・・・正直覚えきれそうにない。

「長すぎて質問が思いつかないですね。あとで思いついたときに聞いてもいいですか？」

「はい。構いませんよ。では、ギルドカードを発行しますのでこちらにご記入をお願いいたします。」

発行カード枚数は三枚でよろしいですか？」

「はい。大丈夫です。俺は字が書けないのですが、代筆でもいいですか？」

「構いませんが、名前の記入は申し訳ありませんがご本人様でないといけない事になっています。

よろしければ私が別の紙に字を書きますので、それを真似て書いて頂けませんか？」

「分かりました。それをお願いします。私の名前はジュン＝アキモトです。」

「ジュン＝アキモト様ですね・・・ではこちらになります。」

俺は差し出された紙を見よう見真似で自分の名前を書いていく。

「はい。ジュン＝アキモト様、アリア＝リム＝グラシア様、ロット＝リム＝グラシア様ですね。

カードの発行には一日ほどお時間を頂いてます。明日また当ギルドにお越しください。」

「そうなんですか？わかりました。では、また明日伺いますね。」

「はい。では明日こちらの受付までお越しください。お疲れ様でした。」

そう言って窓口受付のお姉さんは一礼してきたので、俺達も一礼して部屋を出た。

階段を下りて、俺は最初の受付の人の所まで歩いていった。

「さきほどはどうも。あなたのおかげで無事に登録することが出来ました。ありがとうございます。」

俺はそう言って受付のお姉さんにお礼をする。

リム達も驚いていたが、俺に習い御礼をした。

「いえ、これも仕事ですので。また何かお困りでしたら声を掛けて下さい。私に出来ることならお力になりますので。」

「ありがとうございます。では早速お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はいどうぞ？」

「武器や道具を探しているのですが、市はどこに行けばよろしいでしょうか？」

なにぶん今日始めて王都に着たばかりですので、何がどこにあるのか分からないんですよ・・・」

「そうでしたか。それでしたら、中央広場から西の地区一帯が商会のお店になっていますよ。この人たちは大抵の物はそこで揃えます。」

「中央広場の西ですね？わかりました。ありがとうございます。」

俺はもう一度お礼をしてギルドを後にした。



## クレナイとアカツキ

ギルドから出た俺達は、出店の食い物を食べながら情報を集めたり、珍しい食べ物を食べたりして西地区に向かっていった。

「そういえばご主人様、何で寄り道する店に行くのにあのような質問をしていたのですか？」

アリアが、クレープもどきを食べながら聞いてきた。

「そうですよ。『変わった店は無いか？』とか、『偏屈な人はいるか？』とか何の意味があるんですか？」

ロツテも、焼き魚もどきを頬張りながら聞いてくる。

「あれは、情報屋を聞き出すためだよ。最も最初から当てにしていけどな。」

俺はフランクフルトもどきを食べながら答える。

「そうなんですか？でもなんで直接聞かないんですか？」

アリアが不思議そうに首をかしげる。

「あほか。直接『情報屋の人を教えてください。』って言って教えてくれるわけねえだろ。そもそも情報屋っていうのは裏家業。一般的にヤバイ業者なんだから。」

俺はリム達に情報屋の事を説明した。

「へえ、そうなんですか？でも、ご主人様は何でそう情報を欲しがってるんですか？」

「そんなの今後の為だよ。世の中いつ何が起るか分からない。だから事前に、今後起こり得る事が予測できれば何かしらの対応策が浮かび上がるかもしれないだろ？」

何も知らずとせずに、後になって知らなかったで後悔するなんていやだからね。

それに、『情報を制するものは世界を制する』って昔の偉い人も言ってるし。」

そう言っただけは二人に聞かせていく。

「——へえ……その言葉には僕も賛成だね。——」

突如、何処からともなく男の声がした。

「「「！！！」」」

リム達にも聞こえたようで、二人は警戒態勢をしている。

俺も慎重に辺りの気配を探る。

「誰だ？どこにいる？」

俺は独り言のように呟くと、目の前にフードを被った人が立っていた。

「西地区の裏通りにある雑貨屋『アカツキ』に行け……」

低い声の男はそれだけ言うと、人ごみの中に消えていった。

「ご主人様・・・」

気が付くとリム達が服の袖を掴んでいる。

「・・・取り合えず行ってみよう。」

二人も黙って頷いて、俺の後に続いていく。

西地区の裏通りにある『アカツキ』はすぐに見つかった。

「二人とも警戒だけはしといてくれ。罠だったら不味い事になる。」

「わかりました。」

俺達は『アカツキ』の中に足を踏み入れる。

——チリンッ——

ベルの音が店の中に鳴り響く。

「いらつしやいませ。『アカツキ』へようこそ。ここはアクセサリ  
ーや日用品、雑貨まで品揃い豊富に取り扱ってますよ！」

店には青年の店員が一人、かなりの好青年が笑顔で店の説明をして  
くる。

「いや、店員さん。冷やかしです。ところで、ここはあなたが一人  
で？」

取り合えず他に仲間がいないか尋ねる。まあ当てにしないけど・  
・

「冷やかしても大歓迎ですよ。この店は僕一人です。王都に引つ越  
してようやく最近になってこの店を開いたんですよ。」

「へえ、そうなんですか。俺も今日王都に付いたばかりなんですよ。  
さすがは王都ですよね、色んな物がある。」

俺はそうやって店内を見渡す。

「そうですか。観光ですか？」

「まあそんな所です。所で最近変わった噂とかないですか？」

「噂ですか？色んな噂がありますが、例えばどんな噂を知りたいで  
すか？」

ここが勝負所か・・・間違いだったら大赤字、正解だったら大もっ  
けだな・・・

「これであんたの知っている情報が欲しい。」

俺はおどけた態度をやめて、真剣な顔で金貨1枚を店主に突きつけた。

「へえ、あんたそつちの客か。この事を誰に聞いた？」

ビンゴ！！長期戦覚悟してたけど一発でたどり着いた。

「知らない。」

「へ？」

「だから知らない。フード被った男にこの店の事を聞いた。」

「この店を聞いただけ？」

「ああ、最初は誰かの罠だと思ったけど、その線はすぐに消した。今日王都に入った俺達は誰かに罠を張られるだけの恨みも買っていないからな。」

「じゃあ、あんたは見ず知らずの男の言葉を信じてこの店に来て、誰とも分らない僕に金貨1枚って大金を突きつけて情報を聞き出そうとしたのか？」

「そうだ。掛けの部分は多かったが、俺は結構確信してたからな。あんたが情報屋だって。」

「そつなのですか？」

「ああ、確信した理由は三つ。  
一つ目は、あの男のタイミングが良すぎることに。  
二つ目は、こんな隠れるようにして店があるのに品揃えが豊富すぎる事。しかも、どの品も結構な高級品みたいな事。  
三つ目は、店主であるあんたが俺たちの事を知らなかった事。そしてさっきの言動。さらにこういう場合の情報屋ってのは好青年と相場が決まってる！」

ビシッという感じで俺は人差し指を店主に突きつける。

「くっあははは、まさかこんな事で気付かれるなんてね。いいよ。教えてあげる。俺はあんたの推察通り、情報屋ギルドの一員だ。」

「ジュン＝アキモトだ。よろしく。」

俺は情報屋と握手をする。

「さて、それじゃ改めてどんな情報が欲しいんだ。」

「最近起こった事。出来れば確定情報がいい。」

「わかった。金貨二枚だ。」

「おまつ、金取んのかよ。」

「あたりまえじゃん。僕は情報屋だよ。それでどうする？」

「払う。」

笑顔で言われたので渋々払う。

「最近起こった事件は、賞金首にもなっていた豪奴隷商人アレクサ  
「クリキンが二、三日前に殺された奇妙な事件だね。」

「賞金首？そんなのがあるのか？」

「そうか・・・君は今日ギルドに加盟したばかりだね。この国のギ  
ルドは賞金首のシステムがある。まあ詳しくはギルドの人に聞くん  
だね。」

「わかった。続きを。」

「ああ、その事件なんだけど、どうもアレクサを殺したのは『宵闇』  
の連中みたいなんだ。」

「『宵闇』？」

「ここ最近になって急速に勢力を拡大している盗賊グループさ。」

「なるほど。でも殺したのはそいつらなんだろう？何処が奇妙なんだ  
？」

「奇妙な点は犯人じゃないんだ。襲われていた状況さ。」

「襲われている状況？」

「そう。その状況って言うのが、アレクサの周りには護衛の騎士達  
と”宵闇の盗賊”の死体があったんだ。」

「被害所と加害者の死体が？刺し違えたのか？」

「いや違う。問題なのは宵闇の方だ。彼らは何かを囲むようにして立っていた所を、上から下に槍の様な物で刺されて即死していた。しかも、刺された箇所は焼け焦げていて体内の血液も蒸発していたんだ。」

何か、心当たりのある光景だな・・・

「そいつはえげつないな。他には？」

「もう一つ。馬車が無くなっていたんだ。」

「馬車が？物取りか？」

「わからない。だが、少し離れた所でアレクサの馬車と思われるものが焼け焦げていた。

あの巨大な馬車は大の男が10人がかりでやっと運べる大きさだから、王宮は少なく見ても10人以上の犯人の仕業だと思って調査している。」

「なるほどねえ。じゃあ次だ。この町一番の武器屋と防具屋の情報を。」

「一般が銀貨50枚、シークレットで金貨10枚。」

「シークレットで。15枚出すから口添えと道案内よろしく。」

「わかった。少し待ってて。」

俺は金貨15枚を渡した。

『アカツキ』を出て裏路地を右に左に進んで行き、かなりの奥まで進んで行った所でようやく情報屋は立ち止まる。

「ここだよ。」

「ここは？」

「ギルドランクA以上御用達。知る人ぞ知る隠れた名店『クレナイ』だよ。」

情報屋はそう説明して店へと入る。

「おーい。カレルーいるー。面白い新人連れてきたよ。」

「何だジャンか・・・どうしたんだ。」

「新人連れてきた。結構面白いからこいつらにも売ってあげて。腕はまだ分からないけど、かなり凄い事になると思うよ。」

「こいつらが・・・ねえ？」

そう言つて『クレナイ』の店主、カレルと呼ばれた女性は怪しい者を見るようにこちらを見る。

「あんた達、ギルドランクは？」

「今日登録したばかりで、まだカードもらってない。」

「なんだって？ジャン・・・本当に大丈夫でしょうね。」

「大丈夫だって。」

「根拠は？」

「勘！」

「勘ってあんたねえ・・・そんな理由であたしが納得するとても？」

「ああするね。ちゃんとこいつ等をよく”見てみるよ”。」

そう言われたカレルは、今度は俺達を注意深く見てきた。

「——！なるほど・・・あんたが押す理由はこいつかい？」

そう言って俺を指差す。

「<sup>1</sup>」明察。面白いでしょ？」

「ああ確かに・・・よしわかった。あんた達ここにある武器好きなの持ってきた。」

そう言って俺達は案内された。

ある程度回って俺はアリアとロッテの武器を選んだ。

アリアの武器は炎と氷の属性を持つ魔法剣の双剣。

ロツテは雷属性を持つグローブとレガースに決まった。

「杖はいいのか？」と聞いたらご主人様を守りたいからと言われて断られた。

なんでも魔法拳士の道を前々から進む予定だったので丁度いいきっかけだとか・・・

そして俺の武器。

俺は片手剣で戦闘をしようかと考えていたが、何かに呼ばれた気がして、今、大剣がある場所のある武器の前で止まっている。

「あのご主人様？どうかしましたか？」

アリアが心配してくれた。

「あんだ。そんな体でその大剣持てるのかい？」

カレルが最もな意見を言ってくる。

確かに俺の体ではこの剣を振り回す事はおろか、持ち上げることすら危うい。

しかし俺は、なんとなく「大丈夫」だと思い剣を手取る。

見た目に反して物凄く軽い感じがする。そして抜群のフィット感。まるで腕の延長した感じのような一体感。

「これを貰う。」

俺は迷うことなくこの剣に決めた。

「本当にいいんだね？この剣は特別なんだ。白金貨10枚は貰うよ。」

「構わない。これにする。カレルさん会計を。」

「わかったよ。そっちの娘達も一緒にいいかい？」

「ああ頼む。」

「全部で白金貨14枚だよ。そんな大金払えると思えないけど大丈夫かい？」

俺は黙って白金貨14枚を渡す。

「・・・確かに。あんた何者だい？どこかの貴族なのかい？」

「俺はしがない冒険者だ。色々諸事情があるんでね・・・」

「わかった。また来ておくれよ。」

俺は頷いて店を出る。

ジュンたちが『クレナイ』を出て行った後、店内に残る二人は言葉

を交わす。

「ジャン。あのボウヤ一体何者だい？」

「見ての通りだと思うよ。やっぱり面白い奴だった。」

「まあ確かにね・・・あゝあ、アレ・・・持っていかれちゃった。」

「そうだね。でもいいの？アレは君が生涯を掛けて探したやつなのに・・・」

「まあ・・・ね。けど、あい子もこんな武器屋で埃をかぶるより、あの子が認めた人に使って貰った方が幸せだよ。」

店の扉を見ながら、カレルは思い耽る。

「でも君が認めてくれたみたいで良かったよ。ずいぶん彼を気に入ったんだね。あの剣、今は伝説級のお宝なのになった白金貨10枚で売るなんて・・・」

「いいんだよ。あの子が認めたってだけで、本当はただで譲ろうと思ってたんだから・・・」

「え？じゃあ何で？」

「そんなの、あの子を旅に出させないための嫉妬に決まってるじゃないか・・・」

頬を赤くさせて照れるカレルに、ジュンはただ笑う。

そして、二人の笑い声が『アカツキ』の店に響く。それはまるで我が子の旅の無事を祈るような幸せそうな笑い声だった。

## 契約と言つ名の絆

『クレナイ』から出た俺達は、西地区の大通りにいた。

そして、人気の防具屋で防具を調べて、今魔法道具屋にいた。

「へえ、色んなのがあるんだな。」

店の中には、小さな赤い水晶だったり、よく分からない物の目玉だったり、青い液体の入ったポーションだったりと色々あった。

「いらつしゃい。何を探してるの？」

妙齢の肌が褐色のいかにも魔法使いって感じのお姉さんに話しかけられた。

「魔力の回復薬を探しているんですがどれになりますかね？」

俺は、お姉さんに質問する。

「ボウヤは魔法使いなの？」

「ええまあ、そんなところです。」

「その割には、魔力発動態が無いようだけど・・・」

「まだ契約してないんですよ。この剣で契約しようと思ひまして・・・」

俺はそう言っ て剣を見せる。

しかし、お姉さんは顔を顰めながら言う。

「ボウヤ、あなた素人ね？魔法剣じゃ契約できないわよ。」

「えっ！そんなんですか？お前達知ってたか？」

俺は驚いてリム達に聞いた。

「いえ、知りませんでした。私達は魔法剣を初めて使いますので・・・」

アリアが申し訳なさそうに言う。

「後ろの子達も魔法使いなのかい？」

「あついや、この子達は魔法剣士と魔法拳闘士です。」

「なるほどねえ・・・でもあんた達まだなりたての素人だろ？」

「うっ、わかりますかね。」

「まあ私もこの商売が長いからね。新人の区別くらいは出来るよ。」

「そうですか。失礼ですが、ここには魔力発動態のアイテムは置いてありますか？」

「ああ置いてるよ。こっちに置いておいで。」

そう言って店の奥に案内される。

「さあここだよ。どれでも、銀貨50枚だよ。」

そういわれて案内されたのは、いろいろなアクセサリーが置いてある場所だった。

「そうですか。ん？すいません。何でこれだけ高いんですか？しかも別にわけてあるし・・・」

俺は少し離れて置いてある、三つの腕輪に目を付ける。

「ああ、それは特別製だね。その三つがセットになって、始めて効果を発揮する代物なんだ。」

「へえ、具体的には？」

「魔法威力の増幅。そして、腕輪装備者同士限定だが任意の対象への魔力の供給。最後に、契約者同士の思念通話だよ。」

「めっちゃくちゃ便利ですね。どうして誰も買わないんですか？」

「それは持ち手を選ぶんだ。だから今まで誰の手にも渡らなかったのさ。」

「そうなんですか？俺達で試してみてもいいですか？」

「ああ構わないよ。こっちもいい加減処分したくてね。うまく契約

できたら金貨1枚でいいよ。」

そう言って店主は腕輪を取り出し、俺達に渡してくる。

そして、全員出を腕輪を装着したら、腕輪が光りだした。

そして、しばらくしたら光が止み、店主が口を開く。

「驚いたね。まさか本当に契約できるとは・・・どうだい？何か変わったことはあるかい？」

店主が俺達に聞いてくる。

「俺は特に何も。だけど、何か暖かい感じになります。」

「私は、そうですね。何かとても大きなものに包まれている感じがします。」

「私もそんな感じです。」

俺、アリア、ロットはそれぞれ感想を口にする。

「そうかい。見た所無事に契約が終わったみたいだね。」

店主は、俺達の感想を聞いて安堵したように言う。

「え？もう契約は終わったんですか？もつと何か儀式みたいな事をすると思ってました。」

「あんた本当に素人だね。確かにそうゆうのもあるけど、この腕輪

は『絆』を象徴する精霊が宿っているんだ。だから、この場合の契約は宿っている精霊に認められることなんだよ。最もこの腕輪に認められたって事は、あんた達にはそれほど深い信頼関係があるって事だろうけどね。」

店主の言葉を聴き、リム達は真っ赤にしていた。

「へえ、そうなんですか。勉強になります。」

「ふふ、後ろの二人は可愛いじゃないか。さて、私はもう戻るよ。魔法薬は、ボウヤが最初に見ていた青いポーションだよ。まあゆっくり見ていきな。」

そう言ってお姉さんはカウンターに戻っていく。

そして魔法薬を金貨1枚分購入し、最初に言っていた通り腕輪は金貨1枚にして貰い、合計金貨2枚を支払って店を出た。

店を出たらもう夕暮れ時だったので、俺達は『月の女神』に急ぐ。

『月の女神』に着いた俺たちは、部屋の鍵を貰う為にカウンターに向かう。

「ああおかえり。王都はどうだった？ギルドの登録と買い物は出来たかい？」

ミトさんが笑顔で迎えてくれた。

「ええ、でもさすが王都ですね。人が多いし、街自体が広いから結構疲れました。」

「ははは、そうかい。でも直に慣れてくるよ。もうご飯にするかい？」

「ええそうですね。荷物を置いてご飯にしますよ。確か食堂は地下でしたよね。」

「ああそうだよ。うちのご飯はおいしいって評判だから期待するといい。」

「そうですね。期待しています。」

俺達は部屋の鍵を貰い、荷物を置いて地下の食堂に向かう。

「さて、リム達は席をテーブルを確保してくれ。俺はご飯を貰ってくるから。」

「ご主人様。それくらい私達が行きますので、ご主人様は待つてください。」

アリアがそう言うが俺は待ったをかける。

「いいよ、これくらい。俺が行く。二人は待つて。主命令だ。」

「うっ、分かりました。では、ロツテと一緒に待つてますね。」

そう言つてリム達はテーブルを探しに行く。

俺はカウンターに行き、お金を払いご飯を貰う。

三人分のご飯を貰った俺は、大きめのトレイを借りてリム達の姿を探す。

すぐに見つかったが、誰かが話しかけているようだ。

「姉ちゃん、こんな所に二人で座つてないで俺達と一緒に食おうぜ。」

「そうそう。飯の後は部屋でマッサージしてやるからよ。」

ギャハハハとうるさい声が辺りに響く。

「私達には連れがいますのでご遠慮ください。」

「そうよ。私達にはご主人様がいるんだからどっか行つてよ!」

アリアが静かに、しかしどこか怒った様に言うと、ロツテもそれに

便乗する。

「いいじゃねーか。ご主人様なんてほっという俺達と遊ぼうぜ。」

飯はどうした飯は・・・そんなことを考えていたら、大柄の男がロツテに手を伸ばしてきた。

さすがに傍観しすぎたので、二人を助けることにする。

「アリア、ロツテ。おまたせ。ご飯にしよう。」

俺は男達を無視してリム達に声を掛ける。

「ああ？誰だお前？今俺達が話してんだからすっこんでろ！」

大柄の男は俺を睨み付けて言う。なんて言うか台詞が三流だった。

「ごめんね二人とも。初めてだったからちょっと分からなくてさ。」

それでも大柄の男を無視して、手に持っているトレイをテーブルに置こうとした時、男に料理をひっくり返された。

「いきなりしゃしゃり出て無視してんじゃねーぞコラ！ぶっ殺されてーのか！？」

そう言つて男は俺を突き飛ばした。その反動で残りの料理が俺にかかる。

「「ご主人様！」」

二人は突き飛ばされた俺に驚き悲鳴を上げた。

「おい、ゴリラ。覚悟は出来てんだろうな・・・」

ここまでやられると、さすがの俺もキレる。

「ゴリラだと？ テメエ俺が誰だか分かって言ってるのか!？」

「知らねえよ三下。お前が誰だか知ったことか。」

「さっさっ三下だと？ Aランクの俺を捕まえて三下とほざきがったなこのガキ!!」

俺の挑発に、男は顔を真っ赤にして怒る。

「ギャーギャー喚くな脳筋。それに、弱えと言われて取り乱す奴は自分で弱えと認めている証拠だぜ？」

「テメエぶっ殺す!!」

俺の締めくくりの挑発に激怒して、男は突っ込んでくる。

——ブンッブンッ——

——ヒョイツヒョイ——

男は次々と拳を繰り出すが、俺には当たらない。

客観的に分析すると男の方は自分でAランクと言う實力を持つほど、繰り出す拳は早いのだが、俺にはそれさえも遅く感じてしまう。

「クソッちょこまかとかわしやがって。いい加減当たりやがれ。」

「そう言っんなら当ててみな。あつ、そうだ。ロツテ！」

俺はあることを思いつきロツテを呼ぶ。

「はい！何でしょうか？ご主人様。」

突然呼ばれたロツテはビックリして俺に返事をする。

「今からお前にある技を教える。よく見ておけよ。」

そう言っ俺はバックステップで距離を取って構える。

「鬼ごっこは終わりか？それに技を教えるなんて、この俺様相手にずいぶん余裕だな。」

「ああ、それほどまでにお前が弱いつて事だ。」

「このガキ。減らず口を・・・本気で殺す！」

そう言って、男は俺に突っ込んでくる。

しかし俺はそれをかわし、男の胸に拳を置く。そして・・・

「崩拳！！」

ドンッといって男は後ろへと吹き飛び、壁に激突する。

「おい、あいつ吹っ飛んだぞ。何者だあいつ。」

「だめだ。ゴルドーの奴完全に気絶してやがる。」

俺達の喧嘩を見ていた他のギャラリーがそう言っていた。

「どうだロツテ。俺が何をしたかわかったか？」

「いえ、すいませんわからなかったです。」

ロツテはまだ目を丸くしてそう言った。

「そうか。ならあとで説明してあげる。ロツテなら必ずマスターで  
きるから。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って俺はテーブルに着こうとしたが、テーブルの上は結構悲  
惨な状況だった。

「あゝあ、こりやだめだな。ここにいちや迷惑になるから今日は部  
屋で食べるか。」

そう言って俺はココルの姿を見つける。

「おい、ココル。今日俺達は自分の部屋でご飯食べようと思って  
るんだけどいいかな？」

未だ放心状態のココルに話しかける。

「・・・あつはい。大丈夫です。すぐに新しいのお持ちしますね。」

「あつ、いいよ。自分で持つてあがるから。それより服を洗いたいんだけどどうすればいい？」

「えつと、それでしたら私があとで取りに伺いますね。」

「わるいね。お願い。すいませーん。マスターもう三食分新しいの作ってもらえますか？」

俺はコッルから許可を貰うと、すぐ近くにいたマスターに新しい料理を作ってもらう。

料理を作り直してもらって、俺達は部屋に戻る。

部屋に戻った俺は、部屋にあるテーブルにご飯を置き新しい服に着替えた。

食事を終えた俺達は明日の事とさっきの喧嘩のことを話した。

「さて、武器や道具も揃えたし、明日は朝早くにギルドに行つてそのままギルドの依頼を受けようと思うけど、二人とも問題ないな？」

「はい。異論はありません。」

「私も大丈夫。」

「んじゃ、さっきの食堂での事だけど、リム達は俺が構えを取った後、どんな風に見えた？」

「私は、ご主人様があの男に手を置いた所しか見えませんでした。」

「私も同じ。でも、その後足に力を込めてた様に見えました。」

「うん。ロツテはいい線だね。あの時俺は『震脚』をした後、『崩拳』って技を使ったんだ。」

「震脚？崩拳？」

「なにそれ？」

「やっぱ知らないよね。わかった。一つ一つ実践して見せるね。」

俺はそう言つと立ち上がり、少し離れて構える。

「まずは『震脚』からだ。これは技と言うより技術なんだ。足腰に力を入れて、下半身の筋肉を閉める技術を『震脚』と言う。」

そう言つてやって見せると、ドンって音がして床にミシミシと音が鳴る。

「さすがに全力でやると床が抜けるから今は抑えているけど、これ

も極めればこの技術だけで立派な技へと昇華する。  
次に崩拳だけど、これは立派な技だ。」

「この技は言ってしまえばただの突きだ。だが、さっきやった震脚と合わせてやると・・・」

俺はそう言いながら拳を前に出す。

ブンツと音がして、拳圧が壁に当たり壁が少し凹む。

「こうなる。コツは力の移動。震脚で溜めた力を上半身に移動させ、拳を突き出すと同時に今度は上半身に移した力を拳に乗せる。すると、さっき俺がやったみたいに少ない動作でもアレくらいの威力は出せる。わかったかな？」

「うん。大丈夫。でも私に出来るかな？」

「出来るよ。ロツテは才能ある子だって信じてる。俺も教えるから一緒に頑張ろう。」

「はい。ありがとうございます。ご主人様。」

ロツテは花のような満面の笑みをしてくれた。

——コンコン——

「ジュンさん。ココルです。食器と洗濯物を回収しに来ました。」

「ああココルか。どうぞ。開いてるよ。」

ココルが来たので俺はココルを部屋に招き入れる。

「こんばんはジュンさん。さっきは凄かったですね。」

「やあココル。さっきはごめんね。片づけ大変だったでしょ?」

「いえ、いつもの事ですから。それより汚れてましたよね?お湯を用意しましょうか?」

「ああ大丈夫だよ。それで、その事なんだけどこの部屋にお風呂を設置しちゃだめかな?」

「お風呂ですか?どうやってやるんですか?」

「ん?俺の魔法でね。」

俺はそう言うつと倉庫からユニットバスを出す。

「これなんだけどだめかな?」

俺はココルに聞く。ココルは突然の出来事に目を丸くする。

「えっ今どこから出したんですかそれ?」

「それは秘密。お湯も自分で用意するし、迷惑はかけないからさ。」

「はあ、まあそれならいいですけど・・・」

「ありがとココル。これ迷惑料ね。ミトさんにも言っというて。」

そう言いながら俺は金貨一枚の口止め料をココルに握らせる。

「こっこんな大金もらえません！」

「いいって。貰ってよ。お湯を請求しなくなる事と勝手にこの部屋にお風呂を作る迷惑料だと思って取っておいて。」

「でも・・・」

「じゃあ、多いつて思ったお金は泊まってる時の洗濯代ってことにしてよ。これならいいでしょ？」

「うう、わかりました。多分何を言っても無駄ですよね？ジユンさん意地悪です。」

「ははは、まあいいじゃん。じゃあこれ、食器と洗濯物だから。服は明日乾いたら部屋に置いておいてくれたらいいから。」

「はあい。わかりました。」

そう言って、ココルは部屋を後にした。

「そう言っ事だから、今からお風呂ね。お湯沸かすからちょっと待ってて。」

そうして俺はお風呂の準備をして、二人をお風呂に入れた。

そのあと、俺もお風呂に入り寝ようとしたら二人が真っ赤にしながらベットで待っていた。

あまりにもその姿が可愛かったのでニヤンニヤンしました。

## ギルドカード

翌日、俺達は昨日の話した予定通りギルドへと向かっている。

「おはようございます。朝早く来て申し訳ございません。ギルドカードは出来ていますか？」

俺はギルドの二階にある受付窓口に声を掛けた。

「ああジュンさん。おはようございます。カードのほうは出来ていますよ。」

受付には昨日のお姉さんがいて、ギルドカードを三枚渡してきてくれた。

「では、このカードの右下にある青い部分にご自身の血液を垂らして下さい。血の個人情報をカードに記憶し、そのカードはジュンさんたち専用のモノになります。」

そう言われたので、俺達はその指示に従い自分の血を垂らす。

カードが個人情報記憶したのか、カードが淡く光る。

「はい。これで晴れてジュンさんたちは冒険者です。これからあなた達の活躍を、私達ギルドは期待しています。」

そう言ってお姉さんは立ち上がり、頭を下げた。

さすがに驚いたのだが、俺は何とか持ち直し返事をする。

「これはご丁寧ありがとうございます。まだ駆け出しの身ではありませんが、精一杯頑張りますので、ご指導ご鞭撻のほど従者共々よろしくお願いいたします。」

噛まずに言えて良かった。きつちりとした返答も出来たし。

——パチパチパチ——

俺達が挨拶をしていたら、周りから拍手が送られる。何か嬉しい気分になった。

「では、カードの説明をさせて頂きますね。まずは個人情報です。先ほどの青い部分を指で押さえると、個人情報が見覧できます。」

言われたとおり試してみる。すると

名前：ジユン＝アキモト  
レベル：5  
ギルドランク：E  
種族：人間  
職業：冒険者、剣士  
ステータス  
筋力：D  
体力：D  
魔力：A  
敏捷：D  
器用：D  
精神：B

運勢：EX

保有スキル

神の祝福（A）、精霊の祝福（B）、英雄の資質、天才、黄金率（B）

保有アビリティ

ドロップ上昇（S）、体力上昇、体力増幅、魔法威力上昇、魔力共有、思念通話、???

装備品

武器

大剣：バルムンク

防具

頭：-

鎧：プレートメール

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

「ジュンさん凄いスキル持ってますね。今までいろんな人を見てきましたが、こんなスキル持っている人は初めてです。」

俺の情報を見た受付のお姉さんが驚く。

「そうなんですか？それより聞きたいことがあるのですがいいですか？」

「あっはい、どうぞ。」

俺は強引視話をそらす。

「この三人でチームを作りたいんですが、どうしたらいいですか？」

「チームですか？でしたらこの紙に記入して下さい。」

お姉さんはそう言っ受付け用紙を渡してきた。

「分かりました。あつ、まだチーム名が決まっていらないんですが、無しじゃまずいですかね？」

「別に構いませんよ。あとから名前を決めて下さいね。でも、一度決まった名前の変更は出来ませんので、よく考えて名前を付けて下さい。」

そう言われている間に、俺は記入欄を埋めた。昨日リム達に字を教えてもらっていたので、間違いはないと思う。

「はい。これでチームの結成は完了しました。えっと、ギルドカードの説明の続きですが、今度は左下の赤い部分に触れて下さい。」

そう言われて赤い部分に触れると、たくさんのモンスター情報が浮かんできた。

「左下の赤い部分はモンスター図鑑になります。モンスターの採取部分とモンスターのドロップアイテムの詳細が載っていますので、ぜひ今後の冒険に役立てて下さい。」

「へえそうなんですか。分かりやすいですね。」

「そうですね。冒険者の方には重宝していただいています。最後に真ん中の緑の部分に触れて下さい。」

言われた通りに緑の部分に触れる。すると、色んな顔写真が出てきた。

「これは？」

「これは賞金首リストです。近頃犯罪者達が急激に増えてきたので、その処置ですね。賞金首の討伐はギルドの依頼と異なりますので、重複が可能です。ですが、賞金首の討伐は早い者勝ちになりますね。」

「以上でギルドカードの説明は終わります。何かご質問はございますか？」

「いや、大丈夫です。すぐにギルドの依頼をしようと思っているのですが、以来の重複は出来るんですか？」

「申し訳ございません。ギルドの依頼は個人で一つ、チームで最大二つまでとなっています。」

「何故チームは二つなんですか？」

「チームの場合、必然的に数が多くなります。ですので、二つ依頼を受けることが可能になります。しかし、チーム用の依頼は個人の依頼より2ランクほど難易度が高くなっていますのでご注意ください。」

「そうなんですか。分かりました。依頼はどこで受けられますか？」

「依頼は一階の中央にあります依頼ボードにランク別けであります。」

」

「そうですか。依頼はどこに持っていけば？」

「依頼がお決まりになりましたら。奥の窓口に持って行ってください。担当のものが対応いたします。」

「そうですか。ありがとうございました。早速行って来ます。」

「はい。お気をつけて。」

そう言っただけで俺達は窓口のお姉さんに見送られて一階に降りた。

さて、一階の中央にある依頼ボードの目の前にいる俺達は、何の依頼をしようか迷っている。

「ご主人様。依頼がたくさんあるよ。何にするの？」

「私達は初めての初心者ですし、出来れば簡単なのが良いです。」

ロツテとアリアが言う。

「そうだな・・・まあ簡単なのも良いけど、あんま簡単だと手応えないしこれなんかどうだ？」

そう言つて俺は二つの依頼書を手に取り、カウンターに持っていく。

「すみません。この依頼をチームでやりたいのですが・・・」

「はい。お預かりしますね。チームでのご依頼で『ゴブリンの討伐』と『ヒカリゴケの採取』ですね。畏まりました。チームリーダー様のギルドカードをお願いします。」

そう言われて俺のカードを出す。

受付の人が何かの魔法を使うと、俺のギルドカードが淡く光る。

「はい。これで受付は終了です。詳細はギルドカードの個人情報でご確認できます。それではいつてらっしゃいませ。」

そう言われてギルドカードを返された。

とりあえず情報を確認してみる。

『パズズ山のゴブリン討伐』

依頼内容

パズズ山に生息しているゴブリンの集団の討伐。数は10～20程度

報酬：銀貨10枚

最近パズズ山でゴブリン共が暴れている。繁殖期が近いので手が付けられない。誰か討伐してくれ。

パズズ山愛好会

『ヒカリゴケの採取』

依頼内容

パズズ山の洞窟に生息しているヒカリゴケの採取。

報酬：銀貨5枚

娘が病気なんだ！直すにはパズズ山のヒカリゴケが必要だとお医者様が言っていた。誰か俺の娘を助けてくれ！  
宿屋『すずめの涙』店主

なるほどねえ・・・こんな感じか。

依頼内容は両方パズズ山。まあそうなるように選んだんだけど・・・  
えっと、パズズ山はここから西に一日かけて行った山だろ？行つて一日。採取と討伐で一日づつ。帰りに一日かぁ・・・

「よし。依頼内容も確認したし。食料とか準備して早速行こうぜ。」

「「おー！！」」

俺達は元気よくギルドを出た。

俺は『月の女神』に行つて旅の準備をしてから、ミトさんに依頼のことを言う。

初任務だと言つたらエールを送られた。

その後、一週間分の食料を調達してパズズ山へと向かった。

二人の能力、一同パズズ山へ（前書き）

今回は短いです。

## 二人の能力、一同パズズ山へ

王都を出た俺達はパズズ山を目指し歩いていた。

「そういえば、リム達のカードってどんな感じになってるんだ？」

「私達のカードはこんな感じです。」

そう言つてアリアが俺見カードを見せてくれた。

名前：アリアⅡリムⅡグラシア

レベル：5

ギルドランク：E

種族：王虎族

職業：冒険者、魔法双剣士

ステータス

筋力：B

体力：B

魔力：C

敏捷：S

器用：D

精神：C

運勢：C

保有スキル

精霊の祝福（B）、獣化

保有アビリティ

魔法威力上昇、魔力共有、思念通話  
装備品

武器

双剣：氷炎双剣ヴィルマフレア  
防具

頭：-

鎧：アイアンプレート

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

「私はこんな感じだよ。」

名前：ロツテリムグラシア

レベル：4

ギルドランク：E

種族：王虎族

職業：冒険者、魔法拳闘士

ステータス

筋力：B

体力：B

魔力：A

敏捷：S

器用：D

精神：D

運勢：D

保有スキル

精霊の祝福（B）、獣化

保有アビリティ

魔法威力上昇、魔力共有、思念通話

装備品

武器

グローブ：グローリアーツ

防具

頭：-

鎧：アイアンプレート

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

リム達のカードを確認した俺は、質問をした。

「この保有スキルの『獣化』ってなんだ？」

「あっそう言えばまだ言っていないませんでしたね。私達王虎族は虎の姿に変身できるんですよ。」

そう言ってアリアの体が光に包まれる。

次の瞬間、俺の目の前にはアリアの姿は無く、代わりに白と黒の縞模様の大きな虎がいた。

「どうですかご主人様？驚きました？」

「ああ、スゲービックリした。ロットも出来るのか？」

俺はロットに聞いてみる。

「うんできるよ。」

そう言つとロツテも獣化し、俺の前に真っ白な大きな虎が現れる。

「どう・・・かな？ご主人様？私変じゃない？」

「あつああ、変じゃないよ。」

「ホントに？」

「うん。凄く綺麗だ。」

「えへへ／＼／」

俺が褒めるとロツテは照れた。

「ご主人様。ロツテの毛並みは真っ白ですが、実は王虎族の間では真っ白な毛並みは禁忌とされていました。ですので、ロツテは王虎族の間で嫌われていました。どうかご主人様はロツテを嫌わないであげて下さい。」

アリアが小さな声で言う。

「嫌わないよ。俺は王虎族じゃないから詳しいことは分からないけど、こんな良い子を嫌うはずが無い。勿論アリアもね？」

「ありがとうございます。ご主人様。」

俺の言葉に安堵した表情を見せるアリア。

「それで、獣化した時としない時とじゃどう違うんだ？」

「獣化した場合は、私達は力とスピードがさらに増しますね。そして、王虎族の毛は鋼よりも硬いので並の剣じゃまずき傷つきません。あと、どの生き物よりも早く走れます。」

「へえそうなのか？じゃあ馬よりも早く走れるの？」

「ええ、むしろ勝負になりませんね。私達の圧勝です。」

「じゃあ俺を乗せて走れる？」

「構いませんよ。私達は半分は獣なので、大切な人を乗せるのに幸せを感じています。どうかご主人様も私の背にお乗り下さい。」

「ああ！お姉ちゃんばかりずるい！私にも乗って！ご主人様？」

「わかったわかった。じゃあ帰るときにロッテに乗せてもらおうかな？」

「わーい。約束だよ？」

嬉しそうなロッテに、俺とアリアはやれやれと言った感じで顔を合わせた。

そして俺はアリアに乗ってパズズ山へと向かう。



## 間章 緊急クエスト（前書き）

今回も短いです。

## 間章 緊急クエスト

ジウンたちが王都を離れ、パズズ山に向かう少し前、ギルドのある一室で会合があった。

煌びやかな室内には二人。

一人は部屋に負けないくらいの豪華な衣装を身に纏う、威厳のある男性。

もう一人は、老人の男性。しかしこの男性には静かに他者を圧倒する威厳に満ちていた。

部屋の中が沈黙する中、老人は静かに口にする。

「これはこれは公爵様。このような所に足をお運びになって恐縮です。今日はどのようなご用件で。」

公爵と呼ばれた男性は、静かにテーブルに手紙を置き言い放つ。

「ギルド長。緊急だ。至急今日中にBランク以上、可能な限りAランク以上の者で『宵闇』を討伐して貰いたい。」

「この手紙を拝見しても？」

ギルド長は公爵の顔を見ると公爵は頷く。そして手紙の内容に目を通す。

キールⅡグランツⅡアルベルド公爵殿

貴殿の一人娘、セシルⅡグランツⅡアルベルド嬢は我々宵闇が預かった。

返して欲しくば、三日以内に金貨300枚を持ってパズズ山のネイル洞窟まで一人で来られたし。

なお、反故にした場合は貴様の娘を始末する。

ゲイルⅡバンデット

「頼む。ギルド長！娘を助けてくれ。」

そう言つて公爵は頭を下げる。

本来公爵が頭を下げるなど持つての他なのだが、ここにいるのは紛れも無く一人の父親の姿だった。

「頭をお下げ下さい。アルベルト卿。すぐに緊急クエストとして手配いたします。」

「おお、ありがたい。では出発は明日にする。よい返事を期待しているぞ。」

そう言つて公爵は嬉しそうに出て行つた。

そしてしばらくして、ギルドに緊急クエストが張り出された。

『宵闇盗賊団の討伐』

依頼内容

パズズ山を根城にしている盗賊団『宵闇』の討伐

なお、緊急のため複数化。

報酬：金貨30枚　ただし、首領のゲイルを討ち取った者のみ報酬を支払う。

パズズ山のネイル洞窟を盗賊団『宵闇』が根城にしていることが分かった。腕に覚えのある者は討伐を求む。  
キールⅡグランツⅡアルベルド公爵

このクエストが張り出されて、討伐が終わる間パズズ山に入る事は禁止された。

そしてこのクエストが張り出された時、既にジュン達の目の前にはパズズ山が目の前に広がっていた。

## ファーストクエストはゴブリン討伐！

ゴブリン。

それはゲームの初期の段階で登場する雑魚モンスターである。

ゴブリン

妖精族で小人のモンスター。

単体での討伐ランクはE。群れの場合D～Aランク・

特徴は知恵を持ち武器で戦うが、雑魚である。しかし、群れを成す習性があり群れた場合は討伐のランクが上昇する。

なんだけど、今俺の前にいるのは大量のゴブリン。

俺は依頼クエストをもう一度確認する。

『パズズ山のゴブリン討伐』

依頼内容

パズズ山に生息しているゴブリンの集団の討伐。数は10～20程度

報酬：銀貨10枚

最近パズズ山でゴブリン共が暴れている。繁殖期が近いので手が付けられない。誰か討伐してくれ。

パズズ山愛好会

「キーキー」

おい、パズズ山同好会。なにが10〜20匹だ。ゆうに50はいるぞ？ちゃんと数えとけ。アホンダラ！

「ご主人様。どうします？これ？」

「そうだな？俺達の武器も試したいし・・・ぶっちゃけリム達はこの人数は大丈夫なの？」

「ちょっと厳しいですね。でも大丈夫です。」

「わたしも。いざとなったら魔法で殲滅するし。」

「なら決まりだな・・・」

俺は倉庫から武器を取り出し、意思を強制付与させる。

リム達は自分の武器を構え、静かに俺の合図を待つ。

俺は空中に三本のロングソードを待機させ、バルムンクを構える。

「よし。行くぞお前等！」

「はい！！」

そして俺達はゴブリンたちに突っ込んで行く。

ゴブリンたちがこちらに気が付いたが、俺はもう武器を振りかぶっていた。

—— スパーン ——

横一線にバルムンクを振るうと、ゴブリンをまとめて三匹切り裂いた。

・・・はっ？そんな力入れてなかったぞ？なんつー切れ味だ・・・

バターを切る様に何の抵抗無く切れてしまったゴブリンに、俺は一瞬騒然とする。

「おっと、ぼうとしてる場合じゃないな。とにかく片づけないと。」

俺はゴブリンが持っていた武器に意思を付与させ、敵を切り裂いていく。

~~~~アリアside~~~~

アリアです。

私達は今、ゴブリンの討伐をしています。

——ザシュ——

——ゴウ——

——ザシュ——

——パキパキ——

私は、ご主人様に買ってもらった双剣でゴブリン共を切っていきま
す。

しかしこの剣は凄いですね。さすが魔法剣です。

何の魔力も消費していないのに、勝手に切った所が炎で焼けたり、
氷で凍ったりしています。

私は、ゴブリン共を切りながらご主人様が無事かどうか見ています。

しかし、ご主人様は凄いです。

剣は素人だといっていました。あの動きはどう見ても経験者の動
きです。

それにあの能力・・・反則です。

ロングソードさん？がゴブリンに切りかかって、ゴブリンが剣を受
け止めたと思ったら、自ら剣の根元まで刀身を滑らせ円運動を持っ
てゴブリンの剣を回避し、その勢いそのままゴブリンの首を切り落と
しました。

あの動きはさすがに真似できませんね。使い手がいなく、剣自身が
動いている動きからです。

おっと、見とれている場合じゃありませんでした。お仕事をしまし
よう。

たくさん倒した後でご主人様に撫で撫でもらいましょう／＼

~~~~アリアside end~~~~

~~~~ロツテside~~~~

ロツテだよ。

ご主人様の命令で、今ゴブリン退治してるの。

でも、パズズ山愛好会の人もひどいよね。ゴブリンの数を間違える
なんて。

私怒っちゃうんだから！プンプン！

まあでもゴブリンは弱いから良いんだけどね。

悲しいけどどれだけ数揃えたって所詮ゴブリンだし・・・

あっそうそう、聞いて聞いて。

私、ご主人様から新しい武器貰ったの。この子はグロリーアーツ
って言つて、私ととっても相性がいいの！

それに、昨日ご主人様から新しい技習ったし、早速ゴブリンたちで
練習してみようと思うの。

えっと、確か『シンキヤク』をしてから『ホウケン』って順番だよ
ね？それと技を出す時は力の移動を意識するんだったよね？

確か、足を地面に踏みつけるようにして力を入れて・・・

今度はその力を上半身に移して・・・

拳を打ち出すと同時にその力を今度は拳に乗せる！

えい！！

——シュッ——

ロツテが拳を繰り出すと、その拳が当たったゴブリンの体が爆発し
た。

——ドパーンッ——

ふえーん、ゴブリンがスプラッタになっちゃった。

どこがいけなかったのかなあ？あとでご主人様に相談しよ。

ううーゴブリンの血で気持ち悪いよう。ご主人様に行ってお風呂の

準備してもらわなきゃ・・・

~~~~~ ロツテ side end ~~~~~

数十分の激戦・・・というか一方的な虐殺？の死闘が終わり、何とか俺達はゴ布林延べ66体を倒すことに成功した。

「あゝシンド・・・さすがにこれはきついな。」

「はあはあ、そうですね・・・ゴ布林は弱いですが、さすがに数が数ですので・・・」

「ふうふう、ホント、無駄に数は多いよね」

俺達は地面に座り、息が整うまで休憩する。

「すうゝはあゝ、よし大分回復した。リム達はもう動けるか？」

「はい。私も大分回復したので大丈夫です。」

「うん。私のオツケーだよ。」

「じゃ、手分けして、ドロップアイテムと剥ぎ取り素材の『ゴブリ

ンの牙』とゴブリン討伐の証の”右耳”、それからゴブリンが持っていた武器と”ギル”を回収しよう。」

俺はそう指示を飛ばし、各回収に向かう。

ちなみに”ギル”と言うのはモンスターが必ず落とす光る石のことだ。

これは強いモンスターほど純度が高く、取引される値段が高いらしい。

「ご主人様。回収し終わりました。」

「ああ、ごくろうさん。取り合えず今日はここまでにして、明日はヒカリゴケの採取をしよう。」

「はい。」

そうして俺達はベースキャンプに戻る。

時間は夕暮れ時、王都を出てパズズ山にアリアに乗せて貰って行ったら、普通馬でも半日は掛かる所をわずか3時間で着いてしまった。予想以上に早く着き過ぎてしまったので、その勢いでゴブリンの討伐に向かったというわけだ。

そして、結果は圧勝。戦利品は次の通りになる。

ギル：66個

アイアンナイフ：5本

ブロンズナイフ：10本

アイアンソード：4本

棍棒：20本

小型の戦斧：3本

布の服：30枚

皮の胸当て：5枚

ゴブリンの秘薬：22個

ゴブリンの牙：66本

以上だ。ドロップアイテムをカードで確認したら、ゴブリンの秘薬は5%らしい。

ちなみに俺達は22個手に入れた。まあ全部俺が倒した奴なんだけど・・・

いやあ、神の祝福はパネエ！ホント・・・もうヤバ過ぎて呆れるな！うん。

そうこうしている内にベースキャンプに戻った俺達は、すぐに俺はリム達のためにお風呂を用意し、俺はご飯の仕度をする。

そして初任務成功のささやかな祝勝会を開き、眠りに着く。

翌日、俺達ほとんどもない者が立ちほだかるなんて、今はまだ誰も予想していなかった。

## セカンドクエストは盗賊退治？

パズズ山2日目。

俺は朝食を食べ終え、ギルドカードを取り出して、クエスト内容と自分のステータスと確認する。

名前：ジュン「アキモト

レベル：7

ギルドランク：E

種族：人間

職業：冒険者、剣士

ステータス

筋力：D

体力：D

魔力：A

敏捷：D

器用：D

精神：B

運勢：EX

保有スキル

神の祝福（A）、精霊の祝福（B）、英雄の資質、天才、黄金率（B）

保有アビリティ

ドロップ上昇（S）、体力上昇、体力増幅、魔法威力上昇、魔力共有、思念通話、？？？

装備品

武器

大剣：バルムンク

防具

頭：-

鎧：プレートメール

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

受注クエスト

『パズズ山のゴブリン討伐』

依頼内容

パズズ山に生息しているゴブリンの集団の討伐。数は10～20程度

報酬：銀貨10枚

最近パズズ山でゴブリン共が暴れている。繁殖期が近いので手が付けられない。誰か討伐してくれ。

パズズ山愛好会

『ヒカリゴケの採取』

依頼内容

パズズ山の洞窟に生息しているヒカリゴケの採取。

報酬：銀貨5枚

娘が病気なんだ！直すにはパズズ山のヒカリゴケが必要だとお医者様が言っていた。誰か俺の娘を助けてくれ！

宿屋『すずめの涙』店主

レベルが上がってる。ラッキー。

レベルが上がっている事にニマニマしながら、俺は『ヒカリゴケの採取』の詳細を見る。

『ヒカリゴケの採取』

内容詳細

パズズ山のネイル洞窟に生息しているヒカリゴケの採取。  
地図は別紙にて。

俺は、地図を確認して目的地を定める。

「おい、二人とも。次の目的地が決まったぞ。」

「はい。」

俺はネイル洞窟の場所を二人に説明して、洞窟を目指した。

そして俺はネイル洞窟の前まで来ていた。だが何か様子がおかしい。

洞窟の入り口には武装した男が辺りを警戒している。

「アリア、ロツテ。あれ。どう思う？」

「さあ？多分盗賊の類だと思うのですが・・・」

「うん。見るからに怪しいし。」

俺達は小声で話す。

「さて、どうすっかなあ？殲滅つてのも一つの手だけど、人数が分からん分対策が立てられん。」

「そうですね。どうしましょうか？」

これからどうしようか迷っていたら、不意に後ろから声を掛けられた。

「貴様等！ここで何をしている？」

「「「！！！」」」

後ろを振り向くと、剣を構えた男が立っていた。

（ご主人様、どうしますか？）

（取り合えず様子を見よう。ロツテも良いね？）

俺とアリアは、腕輪の力で思念通話を行い、確認を取る。

「貴様等、ここで何をしていると聞いている。まさか公爵の使いのものか？」

公爵の使い？取り合えず話に乗ってみよう。

「はい。私は公爵様の使いの者でございます。」

「そうか。なら当然金は用意してあるんだろうな？」

納得してくれたのか、男は剣を下げる。

それにしてもお金ねえ？誘拐か何かな？

「勿論でございます。」

「わかった。ならば着いて来い。」

男は洞窟に向かって歩き出す。洞窟の門番？と2、3言葉を交わすと門番は中へと走っていった。

俺達は男に着いて行くと、しばらく歩いた所で大きな広場のような所に出た。

「よう。この通り娘は無事だ。お前が公爵の使いでいいか？」

中央にいるリーダー格の男が言う。その隣に拘束された少女が一人。

やはり誘拐か・・・

「はい。そうです。」

「なら早速取引だ。身代金の金貨300枚を見せて貰おうか？」

金貨300枚ねえ……んな金無いつての！

「すみません。金貨300枚は用意できませんでした。」

「ほう……なら娘の命がどうなっても良いんだな？」

男は剣を少女の首筋に向ける。

「ムー！ムー！」

少女は抵抗するが、男に体を押さえ付けられているのであまり意味が無い。

「お待ち下さい！代わりに白金貨で用意しましたので、どうかこれでご容赦下さい。」

俺は懷から白金貨4枚を取り出す。

出発前に宝石を換金しといてよかった……

「……いいだろう。ではまずは、お前と隣にいる女の武器を捨てて貰おうか。」

男は俺とアリアを指差して言う。

（アリア、ここは従って。）

（分かりました。）

俺とアリアは剣を前に放り投げる。その時、意思を付与させて置いた。

「よし。ならばその白金貨をこの袋に入れて、もう一人の女に持つてこさせる。」

男は今度はロッテを指名した。

俺は袋にゆっくりお金を入れながら、リム達に思念通話で指示を出す。

（二人とも良く聞いて。敵の総数は30人弱。取引が終わったらいっ等殲滅するよ。）

（（了解！））

（それじゃあ作戦を伝えるよ。まずはロッテがこの身代金を持っていったら、俺があの子を交換するようにするからロッテはあの子の護衛をして。

アリアはロッテが動いたら、すぐにあのこの保護を。俺は、その間に俺の剣とアリアの剣を使って二人の援護をしながら敵を殲滅する。そしてアリアはあの子を無事に保護したら、すぐに俺の所に来て。アリアの剣を返すと同時に二人は反撃開始！以上が今回の作戦。二人とも頑張っていこう。）

（（おー！！））

「わかりました。ですがお嬢様も離して下さい。」

「わかった。おい女！真ん中まで歩いて来い。その後地面に金を置

き、その場から離れる。そしたらこの娘を放してやる。」

ロツテは頷いて、俺から身代金の入った袋を持って指示に従った。

「そこで止まれ。いいか？妙な事したら殺すからな？」

男はそう言つと少女の拘束を解き、前に押し出す。

「女は離れる。お前も行け！」

そう言つて男は少女を睨み付ける。少女は戸惑つたように俺の方を見たが、俺が頷くとゆっくり俺達の方に歩いてきた。

少女が袋の入った身代金の近くまで近づくと、突然リーダー格の男の後ろに控えていた男が走り出した。

「走れ！！」

俺は咄嗟に声を出し、まだ気付いていない少女に指示を出す。

だが、指示が少し遅く、男は少女に向けて剣を振りかぶる。

——ガキンッ——

間一髪間に合ったロツテは男の剣を籠手で防ぐ。

それが戦闘の合図になったか、盗賊たちが暴れだす。

しかしここから俺達の行動は迅速だった。

まずはアリアが少女を保護し、俺の元へと走ってくる。

俺はアリアの双剣を自分の手元にとってきて、バルムンクを敵に突っ込ませる。

ロツテはアリアが少女を保護したのを確認し、アリア達を護衛しながら敵を倒していく。

俺はその間に、空間倉庫からゴブリン達から手に入れた武器を全て取り出し、武器に意思を付与させる。

その間にアリアが俺の元に到着した。

「ご主人様。この子を無事保護しました。この娘の事をお願いします。」

そう言って自分の剣を手に、アリアは盗賊達の討伐に打って出る。

「ああ、任せとけ。」

俺はそう言っつと、一気に能力を開放する。

俺の周りに剣が、斧が、短剣が浮かび踊りだす。

20をも越える武器が一斉に盗賊たちに襲い掛かった。

その光景はまさに凶器乱舞、盗賊たちは恐怖する。

「なんだよ。なんなんだよお前！」

リーダー格の男が錯乱する。

しかしそれも領けるのだ。アリアが剣を振るえば炎が、そして氷が吹き荒れ、ロツテか拳を繰り出し、蹴りを放つと雷撃が舞い、極めつけは、倒された仲間の武器がまるで意思を持つように自分達に襲い掛かる。

その光景を見て、大半のメンバーが元冒険者で構成された『盗賊団“宵闇”』はほとんどの仲間が恐怖する中、たった三人に倒されていく。

「“なんなんだよ”つか・・・まあ見ての通り新人だ。<sup>ルキー</sup>  
チーム名は『双月の凶刃』とでも名乗っておこうか。」

うわ・・・自分で言ってるじゃないわ。めっちゃ中二臭！  
まあチーム名は考えないといけなかったし、これでいいか・・・

そう思っただけ俺はチーム名を決定した。

「『双月の凶刃』だと？そんなチーム聞いたことねえぞ！」

「当たり前だ。今作っただけだからな。」

俺はそう言っただけバルムンクを手に戻す。そして、剣を全て俺の上空へと待機させる。

そして、俺は最後の一人になったリーダー格の男に剣を全て突っ込ませる。

——ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュ……——

無数の剣が男を貫き、男は絶命した。

「さてこれで終わりだな。もう大丈夫だよ。お姫様？」

俺は7歳くらいの人質の少女に声を掛ける。

「あつ、ありがとうございます。でも、奥にもう一人いるんです。その娘も助けてあげて下さい。」

俺は少女に言われて奥へと進む。

「リム達はここで待っていてくれ。できれば、この盗賊達の武器と防具を一つに纏めて置いてくれると助かる。」

俺はそう指示を出し、奥の洞窟へと足を進める。

洞窟の奥には盗賊団が溜めていたであろうお宝や、武器が大量にあった。

俺はそれらを回収しつつ、一番奥の独房のような牢屋で横になっている少女を見つける。

「おい。大丈夫か？」

俺は少女に声を掛けるが、少女は反応が無い。気を失っていた。

俺は少女を背負い、さっきの広場に向かう。

「君が言っていたのはこの少女で間違いないかい？」

俺は確認のために人質の少女に言う。

「はい。その娘です。この度は危ない所を助けて頂き、本当にありがとうございました。」

私はセシル「グランツ」アルベルド。改めてお礼を言わせて下さい。

「

そう言つてセシルは俺達に頭を下げた。

「いや、成り行きで助けただけだよ。それよりここを出よう。いつまでも女の子がこんな場所にいていいもんじゃないしね。」

俺達はそう言つて洞窟を後にする。

（ご主人様。先ほど確認したのですが、最後にご主人様が倒したこのリーダー格の男、『宵闇』の首領ゲイル「バンデット」です。賞金首にもなっていますね。）

（そうか。わかったありがとう。）

アリアから念話を聞いて、俺は行動に出る。

「さっき奥で忘れ物をしたから、リム達は『ヒカリゴケ』を回収したら先に洞窟を出て。」

「「わかりました。」」

「それじゃあ洞窟の出入り口で合流ね。セシルの護衛は二人に任せるよ。」

そう言って俺は奥に引き返す。

「こいつだな。」

俺はゲイルの首を切り落とし、麻袋に入れる。そして、リム達が纏めておいてくれた武器を倉庫の中に回収しその場を後にする。

出入り口でリム達と合流し、山を降りた所で日が落ちてきたのでこのままベースキャンプを張る。

「悪いなセシル。今日はこのまま野宿だ。明日には家に帰れるから、今日は我慢してくれ。」

「大丈夫ですよジュンさん。これも貴重な体験です。」

公爵の娘だから嫌がると思っていたら、そんな事はなかった。

「ご主人様。もう一人の女の子が目を覚めました。」

もう一人の女の子を看病していたリム達が報告に来てくれた。

「わかった。セシル、君も来るかい？」

「はい。行きます。」

俺はセシルに声を掛けて、女の子が寝ていたテントに向かう。

「あつ、ご主人様。」

俺に気付いたロッテがこっちを見て言う。

「ロッテ、女の子が目を覚ましたんだって？」

「はい。今さっき起きました。」

そう言ったロッテは、俺に女の子が見えるようにしてくれた。

「やあ、気分はどうだい？俺はジュン。君を助けた者だ。」

「アイリス。アイリス」コルセット。」

「アイリスちゃんか。アイちゃんって呼んで良いかな？」

こくつと小さく頷いたアイちゃん。どうやらあだ名で呼んで良いようだ。

「じゃあアイちゃん。改めて気分はどう？どこか痛くない？」

俺がそう聞くと、ふるふると首を横に振る。

「お腹は空いてないかな？ご飯は食べれる？」

こくつとまた小さく頷いた。ご飯は食べれるらしい。

「じゃあ今からご飯作ってくるね。あとでアリアに持ってこさせるから少し待ってて。」

こくつと頷いたので、俺達は一回全員でテントを出る。しかしセシルが残ると言ったので、結局俺達だけテントを出ることにした。

そうして、俺はアイリス用の病人職のおかゆを作りながら、今後について考えていた。

「ご主人様。ちょっといいですか？」

物思いに耽っていたら、ロツテが声を掛けてきた。

「どうしたロツテ？」

「あの・・・アイちゃんの事ですが、あの子私達で育てませんか？」

「どうして？何か理由があるの？」

「あの娘、凄い魔力を感じたんです。多分私より魔力量は大きいと思います。」

「それ本当か？」

俺はロツテの言葉を聞き驚く。

「はい。多分きちんと育てれば、超一流の魔法使いになると思うんです。」

「超一流にねえ・・・まあ引き取るのは、明日アイリス自身に聞い

てから考えよう。アイリスが俺達と行きたいって言うなら俺はアイリスを歓迎するよ。」

「はい。ありがとうございます。」

ロッテはほっとしたように言う。

「じゃあ、夕飯が出来たから皆でご飯にしよう。」

そうして俺達はご飯を食べて、それぞれのことを言いながら眠りについた。

## 罪と罰と新たな決意

パズズ山の深夜の森。

小川の近くに一人の男がいた。

「ぐっ、げえ……ごほっはあはあ……」

男は胃の中の物を吐き出し、真っ青な顔をして小川を覗き込む。

「はあ……ひでえ顔。こうなる事、覚悟してたんだけどなあ……」

男は自虐的に力なく笑い、先ほどの戦闘のことを思い返していた。

あの時、ゲイルを殺した時、俺は初めて人を自分の意思で殺した事を認識した。

自分の能力を使い、ゲイルを串刺しにした時、自分で刺したわけじゃないのに、まるで自分が刺し殺しているような感覚がした。

正直に言うとは怖かった。刺す度に力が抜けるような感覚がした。

刺す度に、『もういい。もうこいつは死んでるんだ。』って思った。ただ能力は止められなくて、結局十数本もの剣でゲイルの体を串刺しにした。

始めに剣が刺さった時、リム達を助けた時の事を思い出した。

あの日、初めて自分で人を殺したあの日から、ずっと夢を見てきた。

何度も何度も、目を閉じるたびに思い出す。炎の槍で殺された、あの盗賊達の光景が目には焼きついて離れなかった。

怖かった。何度も目を背けようとした。

だけど結局出来なくて、もう目を背けちゃだめなんだって思った。

この世界に来る前に、色んなファンタジー小説で主人公の『人を殺した重さ』が書かれていた。

あの時は人事のように見ていたけど、いざ自分がそうになると怖くて逃げ出そうとした。

だけど結局、人を殺した事実からは逃げられない。

「分かってる・・・俺はもうこの世界から逃げられない・・・」

あの日、神様に会ったあの日、ファンタジーの世界にいけるって思ったとき凄く嬉しかった。

あの時は軽い気持ちで行くと言った。

自分が死なないように能力を貰い、夢にまで見た異世界に行った時から、俺はもう逃げられなかった。

「俺は、本当にこの世界で生きていけるのかな？」

自問自答する。

・  
神様から言われた事や、人を殺した事、異世界でのこれからの事・

色んな感情が、自分の中でグルグルと渦巻いては消えていく。

使命感や罪の意識、不安や孤独感で押しつぶされそうになる。

——ガサッ——

不意に、後ろの茂みから音がした。

「ッ！誰だ！！」

俺は咄嗟に振り返ると、そこには二人の獣人がいた。

「あの・・・ご主人様？大丈夫ですか？」

「顔、真っ青だよ？」

心配そうな顔で俺を見る獣人の姉妹、アリアとロッテがそこに立っていた。

「・・・なんでもない。それより、二人ともこんな所でどうしたんだ。」

俺は無理やり笑顔を作り、二人を見る。

「なんでもないなんて嘘です！」

「そうだよ！何でそんなに悲しい顔をしてるの？」

二人に追及された。でも俺は、それでも二人に心配を掛けまいとする。

「本当になんでもないんだ・・・さあ、二人とも。いつまでもこんな所に居てないでキャンプに戻ろう。」

俺は勤めて明るく言って、二人の横を過ぎ去ろうとする。

——ギョツ——

しかし、俺は通り過ぎようとしたリム達に抱き止められた。

「先ほども言いました。何でもないなんて嘘です。どうして私達に話して下さらないんですか？」

「そうだよご主人様。私達、ご主人様に何があったか分からないけど、そんな悲しそうな顔で泣いてるご主人様なんて放っておけないよ。」

ロツテに言われて初めて気が付いた。自分は今泣いているんだって。涙を止めようとした。二人に悲しい顔を見られたくなくて・・・

「辛い時は泣いて下さい。」

「私達がそばにいますから・・・」

必死に涙を止めようとしたけど、二人の温もりが暖かくて、二人の言葉が胸に響いて、俺は声を上げて泣いた。

しばらくしてから俺は泣き止んだ。

胸の中にあつた不安が消えてくれた。

「ありがとう。大分すっきりした。」

俺は泣いているときに黙ってそばにいてくれた二人に礼を言う。

「いえ、お役に立てられて何よりです。」

「私達は、ご主人様の従者ですから。」

二人が笑顔で言ってくれて、俺は本当に嬉しかった。

「それでさ・・・二人とも俺の話を聞いてくれないかな・・・」

「ご主人様が話して下さるのなら・・・」

「私達はいくらでもお聞きします。」

そうして俺たち三人は、ベースキャンプに戻って火を囲みながら座

った。

.....

しばらく沈黙が続いたが、俺は意を決して二人に話していく。

俺がいた世界の事、神様との出会い、初めて人を殺した罪の意識、そしてこれからの事・・・

二人は黙って俺の話を聞いてくれる。

俺は話している内に、だんだん気分が楽になっていくのを感じた。多分、誰かに聞いて欲しかったんだと思った。

「これで俺の話は終わりだ。二人ともありがとな。こんな話を聞いてくれて。」

俺が話し終わると、二人は何を言おうか分からないと言った顔をしていた。

「正直俺は、あの時、お前達を助けた時、『何で人を殺してまでこいつらを助けたんだろっ』って思った。」

俺がそう言つと、二人はビクツと肩を震わせた。

「人を殺して、罪の意識に押し潰されそうになった。だけどそんな時、お前達が俺を救ってくれた。」

俺の言葉に二人は俺の顔を伺う。

「罪の意識に囚われて、闇に向かおうとした俺を抱きとめて、暖かい温もりをくれて、俺は嬉しかった。」

「同時にお前達を守ろうと思った。闇に向かいそうになった俺を止めてくれて、光に向かって俺を進めてくれた君達を、今度は俺が守ろうと思う。」

「あの日、君達を助けたことは後悔していない。従者になってくれた大切でかけがいのない君達を、今まで俺を支えてくれた君達を、今度は俺が守りたい。」

「だから、まだ俺に何が出来るか分からないけど、リム達はこんな俺に付いて来てくれるか？」

俺は、正直な気持ちを二人に伝えた。

グダグダで、纏まってない俺の話。だけど素直な本音。

だけど二人は言ってくれた。

「はい！どこまでも貴方と共に！」

二人は俺に抱きついて泣いている。俺はそんな二人の背中を撫でながら、ふと空を見る。

まだ夜が明けてない夜空に俺は思う。

神様からの使命はまだ分からないけど、これから先、何があっても逃げないようにしよう。辛い現実から目を背けないように・・・

人を殺した罪は一生消えない。だから俺は死ぬことで逃げずに、俺に殺された人の分まで精一杯生きよう。

この世界で大切な人が出来た。大切に、愛しくて、守りたいと思える人。

俺は二人の背中を見て決意する。

ちゃんと生きよう。この世界で。どんな困難が待っていようと、しっかり目を逸らさずに真っ直ぐ前を見よう。

俺は新たな決意を胸に、再び空を見上げる。

そこには満天の夜空が優しく輝いていた。

## ”友達”と新たな仲間

翌朝。俺は朝食の準備をしていた。

「あつ・・・」

声が聞こえたので振り向くと、リム達がいた。

「おつ、おはよう。」

「「おはようございます・・・」」

少し気恥かしい中、俺達は挨拶を交わす。

「おはようございます。」

「おはよう。」

そんな中、セシルとアイリスも起きてきた。

「ああ、二人ともおはよう。アイリスはもう体の具合とかは大丈夫か？」

「はい。もうすっかり。あの、助けに来てくれてありがとうでございます。」

そう言ってアイリスは俺達に頭を下げる。

「はい、どういたしまして。」

そう言って俺はアイリスの頭を優しく撫でる。

顔を上げたアイリスは、まだ緊張気味だったが、嬉しそうに俺に撫でられてくれた。

「さ、じゃあご飯にしよう。」

そう言って俺は皆にご飯を配る。

ご飯を食べながら、俺はこれからの予定を話す。

「セシーとアイは食べながら聞いてくれ。」

俺は、ご飯を食べている二人に声を掛ける。ちなみに『セシー』とはセシルの愛称だ。

二人がこちらを見たので俺は話を続ける。

「多分今日で王都に着くから、セシルは家に送り届ける。セシルもそれで良いな？」

俺は確認の為、セシルを見る。

「はい、大丈夫です。ありがとうございます。」

セシルは俺の案に頷いてお礼を言う。

そして俺はアイリスを見る。

「それから・・・アイリス。君はこれからどうする？」

俺は、アイリスの意見を聞いてみた。

「私は・・・私には、もう帰る場所がありません。」

アイリスが辛そうに言う。

「帰る場所がない？それってまさか・・・」

「はい。私の村は、ある日突然あの盗賊に襲われました。だから、もう私には帰る場所がないんです。」

突如聞かされる真実。少女は泣きながら言葉を続ける。

「私は最初、あの盗賊たちに復讐しようとしていました。ですが、ジュンさん達があの盗賊を倒してしまいました。」

「「「「「・・・」」」」」

その言葉を聞かされ、俺は言葉が出ない。

「あの時、話を聞かされて、ジュンさん達を恨みました。『どうして私に殺させてくれなかったんだ』って。

だけど、それと同時にあの盗賊が倒されて嬉しかったんです。心のどこかで、ほっとしている自分がいました。」

少女は涙を流し、自分の心境を語っていく。

「だけど、そんな自分が許せなかった。復讐が出来なくてほっとしている自分が！」

「あの日の夜、自分の目の前で親が殺されて、助けられなかった自分が無力で悔しくて、盗賊達に攫われたのが怖くて、閉じ込められた牢屋は心細くて、売られると決まったあの日から絶望して！」

アイリスは自分の心の内を叫ぶ。

「あいつらに復讐を抱いて！毎日痛め付けられて傷ついて、その度に気絶して、目が覚めたら全てが終わっていた……」

少女は荒げた息を整えて言った。

「だからもう……無理なんです。私に生きてる価値なんてないんです。帰れる場所もなく、復讐はおろか、復讐できない自分に安堵してしまう私に、生きてる価値なんかない。もう生きる目的も、意味もないんですよ……見つからないんです。もう……死にたいんですよ。」

少女は涙を流して懇願した。

しかし、アイリスがそう言った瞬間、アイリスの頬に衝撃が走る。

——パン——

鋭く、乾いた音でアイリスの頬を叩いたのは”セシル”だった。

「痛い？アイリス。でもこれで、目が覚めたでしょ？」

「セ・・・シ・・・ル？」

アイリスは何故セシルが自分の頬を叩いたのか分からなかった。

「どうして叩かれたのかわからないって顔してるわね？」

「・・・・・・・・」

「いいわ。分からないなら、ずっと疑問に抱いてなさい。  
でもね、これだけは言わせて貰うわ。」

アイリスがセシルを見つめる中、セシルは大きく息を吸い込み、

「生きてる価値がないなんて、間違っても”友達”の前で言  
うんじゃないわよ！！」

「とも・・・だち？」

「まだ思い出せないの？あの牢屋で、『友達になりました』って  
言っただじゃない！『必ず生きてここを出る』って約束したじゃない！  
私達は約束どおり、生きてあの場所を出た！やっと友達の関係が始  
まるのに！生きる目的も、意味もないなんて言わないでよ！

帰る場所がないなら私が作る！

生きる目的がないなら、私の為に生きて私を守ってよ！私もアイリ  
スの為に生きてアイリスを守るから！

生きる意味がないなら、私の傍で一緒に見つけていけばいいじゃな  
い！

だからもう二度と！死にたいなんて言わないで！！！」

セシルは泣きながらアイリスに懇願する。

セシルに抱きしめられたアイリスの目から涙が溢れる。

それは悲しみの涙じゃなくて、嬉しさの涙だと言っるのは誰の目にも分かることだった。

~~~~アイリスside~~~~

私は、ジュンさんに自分の死を懇願した。

だけど、『ともだち』という少女に自分の頬を叩かれた。

どうして？

私はずっと、あの日から疑問が晴れない。

あの日、盗賊に襲われた日からずっと、私は真っ暗な闇の中にいた。

どうして？

目の前で両親が殺された。

どうしてこんな酷い事をするの？

どうして？

自分が盗賊達に攫われた。

どうして私だけ、こんな怖い思いをしなくちゃいけないの？

どうして？

盗賊達に復讐しようとした。けれどいつも返り討ちにあった。どうして仕返しさせてくれないの？

どうして？

ある日、盗賊達に『奴隷商人に売る』と聞かされた。

どうして私だけ、こんな不幸にならなくちゃいけないの？

そして私は心を閉ざし、こんな人生になった世界を呪い、生きることに絶望した。

そんな時、一人の少女が牢屋に入れられた。

しかし、牢屋に入ってきた少女の目には希望があった。私が失った希望の眼が目の前にあった。

その少女はずっと私に話しかけてくれた。何度も、何度も話しかけてくれた。

そんな少女は、話の最後にいつも言っていた。

「私達は絶対に助かる。」、「必ず生きてここから出るんだ」って。

でも私は、その言葉に返事が出来なかった。

本当は嬉しかったけど、うまく言葉が返せなかった。

そんな時、少女は「ここから出たら、友達になりたい」って言うてくれた。

「ここから助かって、生きて二人で出られたら、その時は友達になりましょう」って言ってくれた。

私は多分頷けたと思う。彼女の言葉が嬉しくて、きつと頷いたんだと思う。

だって、『セシル』って言った綺麗な女の子は、私にその後、「約束だよ」って言ってくれたから。

その言葉があったから、私はきつと希望を手に入れたんだ。^{ヒカリ}

なんだ、私にはまだ、生きる意味があったんだ。

生きるための目的^{ヤクソク}があったんだ。

^{セシルという友達}
帰れる居場所があったんだ。

なら、こんな所で、絶望なんかしてたらダメだよね？

心配してくれた友達^{セシル}に、ちゃんと謝ろう。

~~~~アイリスside end~~~~

「ごめん。ごめんねセシル。私、セシルに言われた事、思い出したよ。」

アイリスはセシルを抱き返しながら言う。

「いいの。もういいの!」

「ありがとうね、セシル。私もセシルと生きたいよ。」

「うん・うん!」

二人の少女は泣きながら抱き合った。

俺達は、そんな二人が落ち着くまでしばらく黙ったままだった。

「落ち着いたか?二人とも?」

俺は泣き止んだ二人に声を掛ける。

「はい・・・」

あの、すみませんでした。勝手なことを言ってしまった。」

そう言ってアイリスは頭を下げる。

「いいよ。大事な事だったし。それより、いい友達を持ったな。」

「はい！」

俺は優しく言うと、満面の笑みでアイリスが返事をした。

「じゃあ、改めて聞くよ？アイリス〃コルセット。君はこれからどうしたい？」

「アイリス・・・」

俺の質問にセシルは心配そうにアイリスを見る。

当のアイリスは目を閉じ、やがてしつかりとした意思を持って俺に言った。

「私は、セシルを守りたいです。セシルと共に生きて行きたい！」

「アイリス！」

アイリスの答えに、セシルは嬉しそうな声を上げる。

「でも、今の私にセシルを守る力はありません。

だから、ジュンさん達に着いていって、守る術を手に入れたいです！」

はつきりと、俺の眼を見て自分の意思を言った。

「・・・・・・・・」

俺はアイリスの眼を見て、考えた後答えを口にした。

「俺達に着いて来ると言う事は、いつ死ぬか分からないって事だぞ？」

「分かってます。」

「セシルは公爵の娘だ。当然、護衛の人もある。その人たちに教えて貰った方がいいんじゃないのか？その方がずっとセシルと居られるぞ？」

「それでも、それでも私は、ジュンさん達に習いたいんです。」

意志は固そうだ。

俺はリム達を見る。するとリム達は嬉しそうに頷いた。

（もう良いんじゃないですかご主人様？本当はもう、答えなんか決まってるくせに。）

（そうですよ。これ以上アイちゃんを苛めたら、私許さないから。）

念話でそう伝えてくる二人に苦笑し、俺はアイリスに答える。

「わかった。俺達に着いて来い。セシルもそれで良いか？」

俺はセシルに確認を取る。

「アイリスが決めた事だもん。私は我侘なんて言えないよ。結構寂しくなるけどね・・・」

「ごめん、セシル。」

「いいよ。けど、必ず私の元に戻ってくること。勝手に死んだら許さないんだから！」

「ふふっ、うん。必ず戻ってくるよ！」

こうして俺達に、アイリスⅡコルセットが新たな仲間に加わった。

そして、すっかり冷めてしまった朝食を片付け、ベースキャンプを片付けた後、パズズ山を後にした。

来たときの約束通り、俺は獣化したロツテに乗って来た道を戻る。

アイリスとセシルは獣化したリム達に驚いていたが、二人に敵意がないと分かったら、割とすんなりリム達に懐いていた。

アリアは、セシルとアイリスを乗せて俺の後に続く。

帰る途中、丁度王都に行く道の半分を過ぎた所で、何かの軍隊とぶつかった。

「止まれ！貴様等何者だ？」

武装した集団は、武器を向けて俺達に言う。

「俺達は冒険者だ！パズズ山からの帰りで、今から王都に向かう途中だ！」

「嘘をつくな！今パズズ山は進入禁止だぞ！」

「嘘なんかじゃない！それに進入禁止だ何て知らない。どうして進入禁止になった？第一あんた達は何者だ！？」

「我々はキールⅡグランツⅡアルベルド公爵殿の護衛のものだ。進入禁止の理由は、『宵闇の討伐』の為である。」

俺はその言葉を聞いて、セシルに確認する。

「おいセシル。あれ、本当にお前の家の者か？」

「うん。多分家の人だよ。護衛の人は見たことないけど・・・」

「ただ、あの馬車は家の家紋が入ってるよ。」

ふうん。なるほどねえ。

「俺の隣にいるのはキールⅡグランツⅡアルベルド公爵殿の娘、セシルⅡグランツⅡアルベルド嬢だ。公爵殿が使いの者がいるのなら確認して欲しい。」

俺は大声でそう言うと、馬車の中から豪華な衣装を纏い、威厳に満ちた男が降りてきた。

「私は、キールⅡグランツⅡアルベルド公爵である。我が娘はどこか？」

男がそう言うと、俺はセシルを確認する。

セシルが頷いたので、俺はセシルをアリアから降ろし、公爵の前まで連れて行く。

「初めまして公爵様。私はジュンⅡアキモトと申します。パズズ山に登ったとき、盗賊団に襲われたので迎撃し、囚われていた貴殿のご令嬢を助け出しました。」

「お前が、『宵闇』を討伐したと申すか？」

「その通りでございます。最も、『宵闇』と気付いたときは、もう倒した後のことでしたが・・・」

「しかし、それは真なのか？『宵闇』はほとんどがギルドランクC以上、半分以上はBランクで構成されていると聞く。首領のゲイル

に当たってはAランク以上の実力者だぞ？」

キール公爵は疑いの目で俺を見る。

「疑われるのはごもつともでございます。ですが、倒した証拠にゲイルの御印を挙げています。どうか、後でご確認下さい。」

「ううむ、しかし・・・」

「セシル嬢からおおよその事情は聞きました。今は無事、ご令嬢が帰ってきたのを喜ぶべきでは？」

ほら、セシル嬢もキール公爵様の声を聞きたがっています。親ならば、まず娘を安心させてあげて下さい。」

そう言つて俺はセシルを見る。セシルはキール公爵に抱きつき、泣くのを必死に堪えていた。

そんなキール公爵はセシルをそつと抱き寄せた。

セシルはその行為でついに我慢できなかったのか、声を出して泣いた。

アイリスもセシルが泣いたのが移ったようにアリアに泣きついた。

アリアとロッテはいつの間にか獣人に戻り、泣いているアイリスにそつと寄り添っていた。

しばらくして泣き止んだセシルとアイリスを宥めた俺達は、公爵の

護衛の人たちと共に、一同王都へと帰ったのだ。

## クエスト成功とランクアップ

お昼過ぎ、時間的に大体3時過ぎくらいだと思う。

俺達はようやく王都に帰ってきた。

「じゃあ公爵様、俺達はもう行きますね？」

「うむ、明日日を改めて使いの者を寄こす。出来れば明日、一日空けておいてくれ。お礼がしたい。」

「かしこまりました。では失礼します。」

そんなやり取りをして、俺は『月の女神』に向かう。

「アイリス、また明日。」

「うん。セシルもまた明日。」

アイリスとセシルも、別れの挨拶を済ませたようだ。

——チリンッチリンッ——

『月の女神』に入ると、ベルの音が俺達の帰りを待っていた。

「おやまあ、ジュンたちおかえり。無事で何よりだよ。パズズ山に

進入禁止命令が出てて心配したんだよ？」

「ただいまミトさん。俺達が出た後に進入禁止になったんだって？まあ何もなかったから、俺達は安心して良いよ。」

「そうかい？ならいいんだけど・・・」

「それより、一人部屋に泊まる人数が増えて良いかな？勿論お金は払うから。」

「別にそれは構わないけど、もしかして後ろの女の子かい？」

そう言つて、ミトさんはアイリスを見る。

「うん、そうだよ。ほらアイリス。こちらミトさん。この月の女神の女将で、これからお世話になる人だよ。挨拶しなさい。」

「はい。あの、アイリス」コルセットです。よろしくお願いします。」

ペコツとアイリスは可愛らしく挨拶をした。

「こちらこそよろしく。私はこの女将でミトって言います。ミトさんって皆呼ぶから、お譲ちゃんもよろしくね。」

「それじゃあ挨拶も済んだことだし、俺達は部屋に上がります。」

そう言つて俺達は部屋に上がる。

「じゃあアイリス、俺達はギルドに報告に行つて来るから、アイリスはここで留守番してくれるかな？」

「え？私も行きます。」

「だゝめ。すぐに帰ってくるから、ちゃんと良い子にしてて。」

「うう、わかりました。待ってます。」

不満そうに言ってくるアイリスを残し、俺達はギルドに向かう。

——ガチャッ——

ギルドの扉を開けると、何故か一斉に睨まれた。

取り合えずその視線を無視しつつ、ギルドのカウンターに向かう。

「あの、クエストを達成したので確認をお願いします。」

「はい畏まりました。こちらにギルドカードを提出して下さい。」

受付係の人がそう言ってトレイのようなものを差し出す。

俺はそれにギルドカードを乗せる。

「クエスト内容、『パズズ山のゴブリン討伐』と『ヒカリゴケの採取』ですね。確認いたしました。」

それでは、チームメンバーの残りのギルドカードと、ゴブリン討伐の証とヒカリゴケをご提出下さい。」

「はい。それなんですけど、パズズ山愛好会の人に伝えて下さい。  
『数はちゃんと確認しろ』って。」

「はあ？かしこまりました。では、ヒカリゴケと、ゴブリン討伐の証である右耳が1,2・・・66!？  
あつあの失礼ですが、本当にこれだけの数を三人で倒されたのですか？」

「ああもちろん。結構きつかったけど、3人とも”無傷”で倒したよ。」

しかし驚いたよ。報告では10〜20って書いてあったけど、実際に言ってみたらその三倍の66匹だもん。」

いやあ、さすがにあの時は軽く殺意が沸いたね。」

受付のお姉さんは悪くないのだが、さすがにあの時はムカついたので、お姉さんに八つ当たりした。」

「いやあ、お姉さんは悪くないのは分かってるんだけどね。でもさすがに俺達も腹を立ててね。」

出来れば、ギルドランクを上げてくれるように上の偉い人に言って貰えないかな？

ワンランクで良いからさ。さすがに今回って個人ランクでもランクB以上に適用されるよね？」

「はっはい！ギルド長に掛け合ってみます。少々お待ち下さい。」

そう言つて慌てて立ち去ろうとするお姉さんを、俺は呼び止める。

「ああそうだ。ちょっと待って。実はもう一つあるんだけど。」

お姉さんは「まだ何か？」つて顔で振り返る。

「実は、ヒカリゴケを取りにネイル洞窟に入ったら、いきなり盗賊団に襲われちゃってさあ。

勿論返り討ちにしたけど、その盗賊団のリーダーが賞金首だったわけ。

この場合つてギルドランクは上がらないのかな？確か賞金首でも、ランクは上がるって言われた様な気がするんだけど・・・」

俺がそう言つて、ゲイルの首が入っている麻袋を取り出した。

「すぐに確認いたします！しばらくお待ち下さい。」

お姉さんは今度は本当に走っていった。

ちよつと悪い事したかな？

しばらくして、受付のお姉さん（セシリアと名札に書いてあった。）が疲れたような顔で戻つて来た。

「お待たせ致しまして申し訳ございません。ただいま確認した所、特別処置といたしまして、皆さんのランクをCランクにする事が決定致しました。

こちらをご確認下さい。」

そう言つてギルドカードを渡される。

俺は早速リム達のにカードを渡して、それぞれのカードの中身を確認した。

名前：ジユンⅡアキモト

レベル：12

ギルドランク：C

種族：人間

職業：冒険者、剣士

ステータス

筋力：C

体力：C

魔力：A A

敏捷：C

器用：C

精神：A

運勢：E X

保有スキル

神の祝福（A）、精霊の祝福（B）、英雄の資質、天才、黄金率（B）

保有アビリティ

ドロップ上昇（S）、体力上昇、体力増幅、魔法威力上昇、魔力共

有、思念通話、????

装備品

武器

大剣：バルムンク

防具

頭：-

鎧：プレートメイル

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

名前：アリア＝リム＝グラシア

レベル：11

ギルドランク：C

種族：王虎族

職業：冒険者、魔法双剣士

ステータス

筋力：A

体力：A

魔力：B

敏捷：S

器用：C

精神：C

運勢：C

保有スキル

精霊の祝福（B）、獣化

保有アビリティ

魔法威力上昇、魔力共有、思念通話  
装備品

武器

双剣：氷炎双剣ヴィルマフレア

防具

頭：-

鎧：アイアンプレート

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

名前：ロツテリムグラシア

レベル：10

ギルドランク：C

種族：王虎族

職業：冒険者、魔法拳闘士

ステータス

筋力：A

体力：A

魔力：A

敏捷：S

器用：D

精神：C

運勢：C

保有スキル

精霊の祝福（B）、獣化

保有アビリティ

魔法威力上昇、魔力共有、思念通話

装備品

武器

グローブ：グローリーアーツ

防具

頭：-

鎧：アイアンプレート

盾：-

外装：旅のマント

アクセサリー：エドランの腕輪

皆レベルが上がっているな。

まあ主な戦闘は、あの2回だけだったけど・・・

「はい。確認しました。何かすいませんねえ、無理言っちゃって。」

セシリアさんが、あまりにもビクビク怯えているみたいだったから、フォローをいてれおいた。

「いっいえ。こちらの不手際ですし・・・

それから報酬ですが、『ゴブリン討伐』の報酬はこちらの不手際です。報酬はギルドから銀貨30枚が支払われます。

それと、『ヒカリゴケの採取』が、規定通り銀貨5枚、盗賊団『宵闇』の討伐をして頂いたので、特別に金貨10枚、

首領のゲイルの賞金首が、金貨10枚、合計で、金貨20枚と銀貨35枚をお受け取り下さい。」

そう言つて、お金が積み残されているトレイを受け取る。

「・・・はい。確かに受け取りました。ところで一つお聞きしたいのですが、モンスターのドロップアイテムはどこで換金すれば良いですか？」

「はい。モンスターのドロップアイテムは、ギルド所属の各加盟店で換金しています。詳しくはこちらのガイドでお確かめ下さい。」

そう言ってセシリアさんはガイドブックみたいな小さな本を渡してくれた。

「分かりました。ありがとうございます。」

お礼を言って、俺はギルドを後にした。

そして、月の女神に戻った俺達は、アイリスを呼んで地下の食堂に行く。

「それじゃあ、俺達の初クエスト達成と、アイリスとセシルの無事を祝って乾杯！！」

「かんぱーい」

俺達の初クエストを無事に成功させたとマスターに話したら、ご馳走を用意してくれた。

俺達は、マスターや他の冒険者を巻き込んで、盛大な祝勝会をしたのである。

楽しい宴は夜遅くまで続いた。

## 穏やかな休日

翌朝。俺は部屋の中で昨日行ってきたクエストの戦利品の確認をしていた。

「おー！さすがは悪名高き宵闇の盗賊団。品揃えがハンパないな。」

そう言っただけ俺は戦利品を確認した。

### ゴブリン討伐の戦利品

アイアンナイフ：5本

ブロンズナイフ：10本

アイアンソード：4本

棍棒：20本

小型の戦斧：3本

布の服：30枚

皮の胸当て：5枚

ゴブリンの秘薬：22個

ゴブリンの牙：66本

### 宵闇の盗賊団討伐の戦利品

アイアンナイフ：10本

スチールナイフ：16本

アイアンソード：14本

バトルアックス：20本

小型の戦斧：9本

アイアンプレート：30枚

レザープレート：15枚

ミステイククローク：7着

魔導師の杖：4本

レイピア：6本

ショートスピア：8本

武器に関しては以上だ。それと宝石とお金がたくさんあった。

「とりあえず売却するのは、棍棒と魔導師の杖、それと防具類だな。武器は能力で使えるし、取っともいいだろ。」

俺はそう決めて、今日やることを考える。

とりあえず、最初はギルドだな。アイリスの登録と俺たちのチーム名の登録をしなくちゃ。

後は、ゴブリンの秘薬と牙、それと棍棒と魔導師の杖、防具類の売却だな。

まあどっちにしろ、セシルの家の使いの人が来ないと始まらないんだけど・・・

俺はそう苦笑して、セシルの家の使いの人の到着を待った。

しばらくして、部屋がノックさせる。

——コンコン——

「ジュンさん？私です、ココルです。セシル様がお見えになられました。」

セシルが？なんでだろう？とりあえず部屋に通すか・・・

「ああ。わかった。どうぞ、入って。」

そう言うて俺はココルとセシルを部屋に通す。

「おはようございます。みなさん。アイリスさんはよく眠れましたか？」

ココルがそう挨拶して、アイリスの近くに移動する。

「おはようございます。みなさん。昨日はお世話になりました。アルベルドの使いで参りましたセシルです。今日は皆さんを家に招待する為にやってきました。」

セシルがココルに習うようにして入り、悪戯に成功したような笑みを浮かべた。

「セシル！おはよう！会いたかったよ！」

アイリスが驚き、セシルに抱きつく。

「うん、おはようアイリス。昨日はよく眠れた？」

抱きつかれたセシルは、そのままアイリスを抱き返し、質問をする。

「うん。でもセシルに会えなくて少し寂しかったな・・・」

アイリスは元気よく返答し、その後少し寂しそうな声で答えた。

「それは私もだよ。でも今日は一緒にいれるから、一日中一緒にいよう?」

「本当?」

「もちろん!」

そうして二人は嬉しそうに話をしていた。

「うゝ・・・アイリスさん、私の質問に答えてくれませんでした。」

ココルが悲しそうに言ったので、俺は不憫に思いココルの頭を撫でた。

「悪いなココル。アイリスも悪気があった訳じゃないんだ。許してやってくれ。」

そう言いながら頭を撫でてやったら、ココルが慌てた様に手を振って言う。

「い、いえ!大丈夫です。分かっていますから!」

「そうか?」

「はい。もちろんです。」

そう言って、ココルは俺から離れていった。

俺はココルの行動に少し寂しさを感じた。そして、今だ話をして  
いるセシルたちに声を掛けることにする。

「セシル。もういいか？少し話がしたいんだが・・・」

遠慮がちに話しかけた俺だが、セシルはすぐに俺に向き直り、返事  
をしてくれた。

「あ、はい。おはようございますジュンさん。話って何ですか？」

「ああおはよう。話って言うのはさっきの事だ。セシルはさっき『  
今日セシルの家に招待する』って言ってたけど、それってすぐにか  
？」

「はい。一応そのつもりでしたけど、ジュンさんたちに用事がある  
ようならそれが終わってから来るようにと、お父様から言われてい  
ます。」

「そうなんだ。それはありがたい。実は今日、アイリスにギルドの  
登録をしようと思っていたんだ。あと、アイリスの買い物な。」

「そうなんですか？でも、確かギルドの登録は15歳以上からって  
聞いたことがあるような・・・」

セシルが首を傾げて言う。

「え？そうなのか？」

「はい。確かそうだったはずですよ。私も詳しくは分からないので、

ギルドに直接聞いたほうが早いかもしれません。」

「なるほどな・・・わかった。そうすることにするよ。」

俺は納得して今日の方針を決めた。

「あの・・・ジュンさん。お願いがあるんですけど・・・。」

セシルが遠慮がちに言うてくる。

「なに？どうしたの改まって。」

「今日、ジュンさんたちに付いて行ってもいいですか？私もアイリスと一緒にいたいですし。」

セシルは上目使いで、指をツンツンさせながら聞いてくる。

「いいよ。最初からセシルを誘うつもりだったし。アイリスの服も買わないといけないから、セシルが選んでくれるとアイリスもきつと喜ぶよ。」

俺はセシルのお願いを笑顔で承諾した。

「ありがとうございます。」

セシルは嬉しそうにお礼を言った。それを聞いていたアイリスも嬉しそうにしていた。

「じゃあ早速出かける準備をするか。あ、そうだった。ココル、お願いがあるんだけど・・・。」

俺は移動するための準備をしようと思ったが、あることを思い出したのでココルに尋ねた。

「はい。なんですか？」

ココルは突然のことで首をかしげる。

「荷車を借りたいんだけど、ここって置いてあるのか？」

「荷車ですか？ありますけど、今日はそれを使って買い物をしてないといけませんので・・・」

ココルが申し訳なさそうに言う。

「そっか。なら仕方ないな。けど弱ったな・・・」

俺はそう言いながら思考を巡らせる。

さあどうすっかな。店の中で倉庫から売却物出すわけにもいかないし、ドラクエみたいに『ふくろ』のような物があればいいんだけど、この世界にはないみたいだし・・・

俺は考え事をしていたら、セシルが声を掛けてきた。

「あのジュンさん？よろしければ家のを貸しましょうか？」

「え？いいの？ならお願いしたいんだけど。」

俺はそう言って、セシルの提案に乗ることにする。

「分かりました。なら家に連絡しておきますね。家の者にこの宿まで持ってくるように言っておきます。ココルさん、申し訳ないのですが宿の前を少しお借りしますね?」

そう言つてセシルはココルに許可を得ようとした。

「あ、はい。どうぞ。」

ココルは少し驚いてセシルに許可を出す。

「ありがとうございます。では、早速家に連絡を入れておきます。」

そう言つてセシルは一度部屋を出て行つた。

「さて、俺たちも出かける準備をしよう。俺はもう準備できてるから、アイリスとリム達も準備が終わったら食堂に降りてきて。」

俺はそう言つて部屋を出た。

食堂のテーブルでセシルと一緒に待っていると、アイリスとリム達が降りてきた。

「お待たせいたしました。ご主人様。」

アリアがそう言ってくる。

「いや、そんなに待ってないよ。それより今日の予定を話すから、みんな聞いて。」

そう言って俺はみんなをテーブルに座らせる。

「じゃあ今日の予定だけど、まず最初にギルドに行く。目的は、昨日忘れていた俺達のチーム名の登録と、アイリスのギルド登録の確認。」

その後に、この前のクエストで手に入れた戦利品の売却の為に、昨日ギルドで受け取ったガイドブックに従って移動。それから、アイリスと俺達の日用品の買い物。最後にセシルの家に行く。

こんな感じの流れになるけど、みんないいかな？」

俺はそう言いながら確認を取っていく。

「かしこまりました。」

「私も大丈夫です。」

「私もです。」

リム達、アイリス、セシルの順番でそれぞれ承諾してくれた。

「じゃあ、早速移動しよう。」

そう言っただけ俺達は、最初の目的地であるギルドに足を運ぶ。

そして俺達はギルドに到着して、今二階の受付窓口まで来ている。

「あの、すいません。俺達のチーム名が決まったので登録したいのですが。」

俺は受付のお姉さんに声を掛ける。

「あ、ジュンさん達ですか。チーム名が決定したんですね。ではこちらに記入をお願いします。」

そう言つて俺達のチーム登録書を渡してくる。

俺は登録書を受け取り、空欄のチーム名のところに記入していく。

「はい。確かに確認しました。これより、ジュン＝アキモトをリーダーとした、チーム名『双月の凶刃』が発足されました。チームにおいての説明と詳細は、こちらのガイドブックに書いてありますのでご確認ください。」

「はい。ありがとうございます。あの、後この子をギルド登録したいのですが、出来ますか？ギルドの登録は15歳以上と聞いたのですが・・・」

「はい。その通りです。ギルドの登録は15歳からとなります。失礼ですがその子は何歳ですか？」

受付のお姉さんはアイリスを見ながら質問してくる。

「12歳です。」

アイリスは少し緊張しながら答えた。

「あの、何とかありませんかね？」

俺はどうかできないか受付のお姉さんに聞いてみる。

「そうですね。15歳以下の人が登録する場合、いくつかの条件をクリアすれば登録は可能になります。」

「その条件は何ですか？」

俺は希望を見出し聞いてみることにした。

「はい。その条件は、王国もしくはギルド長の推薦を受けること、王立ザンクトヒルデ学院の冒険者育成コースで規定の単位を修得し、尚且つ学院長の推薦状を受け取ること、後は我がギルドの冒険者養成コースを受けて頂き、半年間の研修の後、卒業試験で試験管を倒すことが出来れば登録は可能になります。」

「なるほど。分かりました。でも、すぐに身分証が欲しいんですけど、どうすればいいですか？」

「身分証の登録ですか？そうですね、先ほどの登録条件の中で、王立学院の方と、我がギルド養成コースの方ですとすぐに発行が出来ます。王立学院の方は学生証として、ギルドの方は仮のギルドカードとして発行が出来ますが、いかがでしょうか？」

そう言われて俺は考え込む。

そつだな。アイリスの今後のことを考えると、王立学院に行かせた方がいいと思う。けど金がな〜・・・王立と言われてるぐらいだから結構掛かると思うし、今の手持ちで対応できるか不安だ・・・

「あ、あのジユンさん？」

俺が考え事をしていたら、セシルが声を掛けてきた。

「え？なにセシル？」

「よかつたらアイリスを学校に行かせてあげてください。私もこの生徒ですし、冒険者育成コースは費用が安いですし、うまくすれば三ヶ月くらいで卒業できます。」

「そうなのか？」

俺は確認のためにお姉さんに聞く。

「はい。中にはそのような方もいらっしやいますが、そのような方は小さい時から過酷な訓練を受けていた人たちと聞いています。」

「なるほどな。よし決めた。セシル、学院に案内してくれないか？アイリスを入学させたい。」

「はい！もちろんです。」

俺の答えにセシルは嬉しそうに言う。

「アイリスのそれでいいか？」

「あ、はい。ありがとうございます。」

俺の言葉を聞き、アイリスも嬉しそうにお礼を言った。

それを見ていたリム達の嬉しそうにアイリスを見つめていた。

「あ、そうだ。すいません。後ひとつ聞きたい事があるんですがいいですか？」

俺は大事なことを思い出し質問する。

「はい？なんですか？」

「学院に入学した後に、俺達と一緒にギルドの依頼を受けることは出来ますか？」

「学生がギルドの依頼を受ける場合は、Bランク以上の人が一名以上護衛として付かなければなりません。これはチームでも同じです。ジュンさんたちの場合は、ジュンさんのチーム内で誰か一人でもBランクになれば、その子と一緒に依頼を受けることが出来ますよ。」

「わかりました。ありがとうございます。じゃあ俺達は早速学院の方に行って入学手続きをしてきますね。」

「はい。お気をつけて行ってらっしゃいませ。」

俺達は受付のお姉さんに見送られながら、ギルドを後にした。

「さて、じゃあセシル。王立ザンクトヒルデ学院の道案内を頼んでいいかな？」

俺達はギルドを出て、学院に行くためにセシルに声を掛ける。

「うん、任せて！こっちだよ。」

そう言ってセシルは元気よく歩き出す。

俺達もセシルの後に続き、学院を目指し歩いて行った。

## 王立ザンクトヒルデ学院

王立ザンクトヒルデ学院。

俺たちが今いる国、『アーセナル王国』の王都、『ザクトン』の中にあり、この国最大の学院だとか・・・

そんな感じで、セシルは嬉しそうに俺たちに学院の説明をしていた。

「うちの学院の凄い所は、国語、算数、社会、魔法基礎論、薬学の必修科目に加えて、政界や商会、工業技術に冒険者の育成のための基本的な学習まで、幅広く取り扱っているところなんですよ。」

セシルは自慢げに言う。

「しかしまあ、よくそれほどまでに講師を集められたもんだな・・・」

俺はあまりの凄さに、少し呆れ気味に言う。

「そこなんですよ！元々、この学院は国王陛下たつての願いだったと聞いています。何でも、先々代の国王陛下が子供好きで、子供にも教育の素晴らしさを知ってほしいと思ってこの学院が作られたそうです。」

「へー、それは凄いな。よほど民のことを考えていたんだろ。」

俺がそう言つと、セシルは嬉しそうに返事をする。

「はい！先代の国王陛下も、現国王陛下も素晴らしい方です。」

へえ・・・民にここまで慕われている国って言うのも珍しいな。まあ俺が知っているファンタジー小説の国が少し過激だったただけか・

俺はそう思い、少し自嘲気味に笑った。

そして、しばらく歩いていると、学院の姿が見えてきた。

「あ！見えてきました。あれが王立ザンクトヒルデ学院です。」

セシルは胸を張って両手を広げ、俺たちに学院を紹介する。

そして、俺たちの目の前には、東京ドーム3個分はありと思われるほどの巨大な学院が建っていた。

「あれ？リディア先生だ。おい！リディアせんせい！！！」

セシルは、校門の前で掃き掃除をしている修道服を着た女性に向かって、大きな声で手をブンブン振っている。

「？ああ、セシルですか？御機嫌よう。今日は公爵様から休みだと聞いていましたが、どうしたんですか？」

リディアと呼ばれた女性は、セシルに気付き、掃き掃除をやめてこちらに向かってくる。

「御機嫌ようリディア先生。今日は、この前盗賊団から助けてもらった冒険者さんを、家まで案内するところだったの。」

セシルはリディアさんの問いかけに元気いっぱいに答える。

「はい御機嫌よう。でもセシル、学院の外ではシスターを付ける様にと、いつも言っているではありませんか。」

そう言つてリディアさんは少し怒った様にセシルに注意する。

セシルも注意されて苦笑いをしていた。

「しかし、この方達がセシルを救つて頂いた冒険者様なのですね。改めて私からもお礼を言わせてください。私の大事な生徒を救つて頂いて、ありがとうございます。」

そう言つてリディアさんは俺たちに深いお礼をした。

「あ、いや、俺たちもたまたまその場に居合わせただけです、どうか頭を上げてください。」

俺はリディアさんの行動に慌てて、急いで頭を上げて貰う様にリディアさんに言う。

しかし、なかなか頭を上げてくれないリディアさんを何とか説得し、今日の本題へと入ることに成功した。

「なるほど。今日は、そちらのアイリスさんの入学手続きをしに我が校にいらっしゃったんですね。」

「はい。先ほどギルドの方で聞いたら、15歳以上じゃないと登録が出来ないと言われまして・・・」

「そうなのですか。そういう事情でしたら我が校も大歓迎ですよ。幸いにして我が校は入学金は格安ですからね。」

「入学金は安いって聞いたんですけど、失礼ですがいったいいくらなんですか？」

「はい。入学金は制服代と教科書代、それと初期手続き費用で銀貨5枚になります。」

「は？そんな安いんですか？」

「はい。加えて選択科目一つ加わることに、銀貨5枚を頂戴しております。」

「はあ・・・だけどそれってやっぱり月で、ですよ？」

「いえ、年で、ですが。」

リディアさんはにっこりと首をかしげる。

「おいおいおいおい、マジですか？銀貨5枚って日本円で5万円つすか？どんだけ安いんだよ！しかも年でって・・・パネエよ！王立学院！」

「あつはつは・・・ホント安いですね。でもなんでそんなに安いんですか？これじゃ採算合わないんじゃない？」

俺はもつともな疑問を聞いてみる。

「あ、それは大丈夫です。ここまで学費が安いのはですね、この学院を作られた先々代の国王陛下が大の子供好きでして、『この国に住む未来ある子供たちに』と作られたのが始まりでして、学院の運営はすべて国から出しているんですよ。」

それに、この学院を卒業していった人たちは、政界や商業界、ギルドを通じてたくさんの方の寄付をしてくれていますので、いっほど運営に困っているという状況でもないんです。」

「はあ・・・なるほど。」

確かに、それならこの安さも頷けるよな。

「では早速入学テストをしたいと思いますが、よろしいですか？」

「え？テストなんてあるんですか？」

俺は突然のことではびつくりした。

アイリスのことだから大丈夫だとは思っけど、それでもやはり心配だ。

「はい。まあテストと言っても、能力を確認するだけですから、そう構えなくてもいいですよ。」

そう言っリディアさんはくすくすと笑った。

「では、アイリスさんのテストと、入学の各手続きをいたしますので、事務所までご足労願います。」

そう言っ、リディアさんは学院の中に入っていく。俺たちもその

後続いた。

「はい。ではジュンさんは、こちらの入学手続きの記入をお願いします。」

事務所に案内された俺たちは、まず初めにリディアさんの指示を受け、入学手続き書に記入をしていく。

えっと、入学希望者はアイリスⅡコルセットと。保護者はジュンⅡアキモトだろ。住所は・・・住所？これって『月の女神』でいいのか？

「あの、すいませんリディアさん。住所って俺たちが今泊まっている宿屋でいいんですか？」

「はい。それで構いませんよ。しかし、そうなるとアイリスさんは寮生活になってしまいますがよろしいですか？」

「え？それはどうしてですか？」

俺は寮生活と聞いて驚く。

「はい。王都に住む人以外の入学は、寮からの通学が義務付けられています。」

これは、ジュンさん達の様な冒険者様の事を思つての配慮になります。冒険者というのはいつ死ぬか分からない危険な職業です。ですから、予めこちらでお預かりして、立派な冒険者に育てる為に一緒

になる冒険者様と隔離して過ごす事にしています。

これは、我が国のギルド長の格言の一つにある『冒険者とは自由な旅人である』と言う言葉の下にある行為であり、一つのチームに囚われず、自由な意思を持つ心を育てる事を目的としてるためであります。」

「なるほど、じゃあ入学したらアイリスには会えなくなるんですか？」

「いえ、そこは大丈夫です。保護者の方や、保護者様の冒険者のチームはいつでも面会できますから、ご安心ください。」

「そうですか。なら良かったです。」

俺はその言葉を聞いて安堵し、入学手続き所の残りの部分を記入していく。

「はい。これで入学手続きは完了いたしました。それで、我が校は明後日から長期休暇中ですので、アイリスさんの入学は1ヶ月後になります。」

「わかりました。あの、その間にアイリスと一緒に簡単なギルドのクエストをやるうと思っっているんですけど、その所はどうなるんでしょうか？」

「はい。アイリスさんはすでに入学手続きが完了していますので、これから能力の確認を行い、学生証を発行いたします。この学生証を持ってギルドに行って、Bランク以上の護衛の方と一緒にギルドのクエストを受けることが出来ます。」

「なるほど。わかりました。あと、この選択科目なのですが、これは後から追加することは出来るんですか？」

「はい。大丈夫ですよ。」

「わかりました。では、入学金の銀貨5枚と、とりあえず選択科目にある『護身術』を選択しますのでプラス5枚です。確認してください。」

俺はそう言って、リディアさんに銀貨10枚を渡す。

「はい。確かに受け取りました。制服は後ほど寸法を合わせて、教科書と一緒に『月の女神』までお送りいたします。では・・・」

リディアさんは「んんっ」と咳払いをして

「王立ザンクトヒルデ学院へようこそ、アイリス＝コルセットさん。これからは一緒に勉強をする仲間として、歓迎いたします。どうか、楽しい学生生活を謳歌してください。」

そう言ってリディアさんはアイリスに向かって微笑んだ。

「・・・。はい！よろしくお願いします！リディア先生！！」

一瞬ポカンとしたアイリスだったが、リディアさんの言った意味を理解して、パアツと花が咲いた様な笑顔でお辞儀をした。

「はい、こちらこそよろしく願います。では、アイリスさんの能力の確認をしたいと思います。アイリスさんはそのまま動かないでくださいね。」

そう言うと、リディアさんは机の上においてあった虫眼鏡の様なスカウターを装着し、アイリスを見ていく。

「！！そんな・・・こんなことって・・・」

しばらくアイリスを見ていたリディアさんだが、次第に顔が険しくなっていた。

「え？どうしたんですかりディアさん。」

俺はリディアさんの顔に不安を感じ、直接聞いてみた。

「あ、すいません。こちらをご覧ください。」

そう言ってリディアさんは、カードを差し出し操作していく。すると、カードからある情報が映し出された。

名前：アイリスⅡコルセット

レベル：3

ギルドランク：-

種族：人間

職業：学生

ステータス

筋力：D

体力：E

魔力：SSS

敏捷：E

器用：D  
精神：S  
運勢：A  
保有スキル  
魔力完全無効化、天才、見切り、直感  
保有アビリティ  
ドロップ上昇（A）  
装備品  
武器  
-  
防具  
頭：-  
鎧：-  
盾：-  
外装：-  
アクセサリ：-

「そんな！うそ・・・」

まず最初に驚いたのはロッテだった。

「おお！魔力値が凄いな・・・ロッテから聞いてたけど、まさかここまでとは・・・」

俺は暢気に感想を言うと、ロッテが凄い形相で言ってきた。

「ご主人様！何暢気な事言ってるの！これは大変な事なんだよ！」

「え？やっぱりSSSって凄いのか？」

「確かにそれも凄いけど、もつと驚くべき所はこれ！」

そう言つてロツテは、『魔力完全無効化』と書いてある項目を指差した。

「これがどう凄いんだ？」

「これは文字どおり、魔力で出来たものを無効化しちゃうの。つまり、私たち魔法使いにとっては天敵ともいえる特殊体質なんだ。」

「ああなるほど。魔法が効かなかったら、魔法使いじゃ打つ手ないわな・・・」

「うん。そうなんだけど、問題はアイちゃんの持つ魔力量なんだ・・・」

「?どういうことだ？」

俺は疑問に思い首をかしげる。

「『魔力完全無効化』っていう能力は、さっきの言っただけで魔力で出来たものを無力化しちゃうの。それが例え、相手だろうが自分自身だろうが・・・」

「え?じゃあそれって・・・」

「うん。アイちゃんの持つ魔力は、完全に宝の持ち腐れなんだよ。」

俺はその言葉を聞き絶句する。

世界最高と言われても過言ではないSSSランクの魔力を持つアイリスが、『魔力完全無効化』と呼ばれる特殊体質のせいで、魔術師の最高峰の道程を断たれたのだ。

神様よ・・・なんつー理不尽な事してくれんだよ・・・

俺はこの世界に送った神を、少しばかり恨んだ瞬間だった。

## 星麗会

アイリスが『魔力完全無力化』の能力者だった事が分かって、一時騒然となったが、俺たちはアイリス本人にも事情を話すことにした。

「と言う訳でだ、アイリス、君は極めて稀な特異体質だと言う事が分かった。」

俺はロツテの説明の元、アイリスに事の顛末を伝えた。

「はあ？今一よく把握できませんが、とにかく私は魔力があるけど、その『魔力完全無効化能力』のせいで魔法が使えなくなったと・・・」

アイリスは、首をかしげながら言う。

「まあそう言う事だ。俺たちの方でも、何とか魔法を使えるように情報を探してみるから、しばらく魔法はお預けだな。」

「分かりました。」

納得したのか、アイリスは頷いた。

「では、お話しも付いた事ですし、アイリスさんの制服の寸法を合わせに行きましょう。」

ポンッと手を叩き、リディアさんが提案してくる。

「そうですね。お願いします。」

俺たちは、アイリスの制服の寸法を合わすために事務所を移動し、被服室に向かった。

被服室に着き、アイリスを女性陣に任せ、俺は外でアイリスの今後のことを考えていた。

魔力完全無効化体質か・・・また厄介なものを・・・

しかし、この世界ではどんな効果になるんだ？ねぎ魔の明日菜みたいならまだマシだけど、もし違っていたら打つ手が無いな・・・

はてさて、どうしたもんか・・・

そんなことを考えていたら、不意に教室の扉が開いた。

「ご主人様、お待たせいたしました。アイちゃんのサイズが測り終えました。」

「ん・ああ、ご苦労さん。リディアさん、制服はどのくらいで出来ますか？」

「そうですね。大体一週間もあれば、月の女神にお届けが出来ますよ。」

「そうですね。じゃあそれまで楽しみにしてるよ。」

そっいつて俺はアイリスに微笑む。

するとアイリスは小さな声で「はい」と言っ、赤くなりながら顔を伏せた。

それを見ていた他のメンバーは、クスクスと笑って嬉しそうな笑みを浮かべた。

「では、これで入学手続きは全て完了いたしました。もしこれからジュンさん達にお時間がありでしたら、授業風景の見学も出来ますが、如何なさいますか？」

リディアさんがそう提案してきたので、俺はお願いすることにした。

「では、是非お願いします。悪いなセシル、お前の家に行くのはもうちょっと時間がかかりそうだ。」

俺はセシルを見て謝る。

「いえ、いいですよ。あ、月の女神に頼んでおいた家の荷車はどうでしょうか？」

セシルは思い出したように言う。

「あ・・・そうだった。ごめん、また日を改めて借りてもいいか？見学が終わったら、多分夕暮れ前だと思うし。」

「はい。わかりました。ではそのように手配しておきますね。」

今の時間帯は2時過ぎ頃。見学がどのくらいで終わるのか分からないが、この馬鹿みたいに広い校舎の見学となると一時間や二時間じ

や終わらないだろう。

俺はそう当たりをつけて、せっかくセシルに用意してもらった荷車をキャンセルした。

「では授業風景の見学に移りたいと思います。教室に向かいながら、この学校の事を少しお話していきますね。」

そう言つてリディアさんは歩き出す。俺たちもその後続き、リディアさんの説明を受けながら、教室の授業風景を見学した。

「我が校では、まず読み書きを習う国語、四則演算の算術を習う算数、国の歴史を知る社会、魔法の基本的なことを習う魔法基礎論、人体の構造や病気などの基本的な知識を習う薬学を必修科目としています。」

「へえ、結構本格的だな。」

俺は感心したように言う。

「はい。まあ必修科目は大体3ヶ月もあれば単位を習得してしまいます。あとは、個人的に習いたい分野の教科を選択し、自分の将来を決めていきます。」

「なるほど、だからこんなに選択科目が多いわけか・・・」

「その通りです。それにただ多い訳ではありません。財界や政界、またその他の方面のスペシャリストを講師としてお招きしています。」

」

「へえ、具体的には？」

「そうですね。魔法基礎論と魔法応用論は、宮廷魔術師の代表であるクレア・マーカス様が講師をしておられます。あと、時々ですが帝王学の授業では、現国王陛下が講師をしておられる時がありますね。」

「ブツ！こ、国王が講師やってんの？」

「はい。国王はなかなか講師をする機会が無いのですが、講師をするときはいつも大人気なんですよ。」

リディアは笑顔で言う。

「おいおい……ずいぶんとぶっ飛んだ国王だな。大丈夫なのかこの国？」

俺がそう思っていると、教室にたどり着いた。

「あ、着きました。ここが今授業中の教室ですね。今は魔法基礎論の授業ですか。では早速教室にお邪魔しましょう。」

そついうとリディアは教室の扉に手を掛ける。

「って！ちょっと待った！今授業中でしょ？邪魔しちゃ悪いって！」

俺は慌てて止めに入ったが、もう既に扉は開かれた後だった。

「？大丈夫ですよ。こういう事はいつもの事ですから。」

俺の制止を聞かず、リディアは笑顔で答える。

「そうだぞ少年。こいつの行動はいつものことだ。それより見学なら早く入ってくれるとありがたいんだが・・・」

教室から声が掛けられた。おそらく授業中の先生だろう。

「あ、すみません。すぐに出て行きますから。」

俺は授業の邪魔をしたことを謝罪し、教室を出ようとする。

「構わん。早く入りなさい。」

そう先生に急かされる。

いや構わんってあんた！さすがにまずいでしょ？

俺はそう思い悩んでいると、先生は俺たちのほうに向かって歩いてきた。

「まったく。早くしないか。リディア、見学者はこの5人でって・・・君はセシルじゃないか？」

先生は俺たちの後ろにいたセシルに気がつく。セシルも苦笑いしていた。

「あはは・・・御機嫌ようクレア先生。」

「ああ。しかしどうしてまた君が？この人達は君の関係者かい？」

「はい。そうなんですよ。今日の大切なうちのお客様です。」

先生の質問にセシルが答えると、先生は少し考えるようにして、手に顎を乗せた。

「ふむ。訳ありみたいだから深くは聞かない。まあとにかくだ、見学者はこの四人でいいのか？」

再び先生はセシルに尋ねた。

「あ、いえ、正確にはアイリス・・・この子が見学者です。後の三人はこの子の保護者です。」

そういつてセシルはアイリスを前に出す。先生はそんなアイリスを見て

「君、名前は？」

そう尋ねた。突然問われたアイリスも、少し慌てたように答える。

「え、えつと、ア、アイリス」コルセットです。今日入学しました。よろしく願います。」

そう言ってお辞儀をした。

「うむ。よく出来たな。偉いぞ。アイリスか・・・私はここで、魔法学の講師をしているクレア＝マーカスだ。よろしく頼む。」

そう自己紹介すると、クレア先生はアイリスの頭を撫でた。

アイリスも、撫でられた時は戸惑ったような表情をしていたが、次第に表情が柔らかくなり、嬉しそうな顔をしていた。

「おっと、自己紹介をしていたら私の講義の時間が終わってしまっただな。皆、今日の講義はここまでとする。各自復習を怠るなよ。」

そうやって先生は授業を終わらせ、教室を出ていった。

そして、それを皮切りに教室の生徒たちが一斉にアイリスを取り囲む。

そして始まる質問攻撃。曰く「どこから来たのか？」とか、「お名前は？」とか、「どこの教室になるの？」とか色々質問されて、アイリスは目を回していた。

そんなアイリスをセシルが助けて、俺たちは次の見学場所に行く。

そして、特別教室棟や訓練場広場などを案内してもらい、今は何故か生徒会室（こちらの学校では星麗会せいれいかいというらしい）に来ている。

「あの・・・なんで俺たちこんなところに来ているんですか？」

俺は待たれている間に、リディアさんに質問をした。

「それがですね、星麗会のメンバーにセシルを助けたのがジュンさん達だって事が知られちゃいまして、お礼がしたいからって言われ

てここまでお通しするように言われたんです。」

いやいや、あんた先生でしょ？なに生徒の言いなりになってんの？

俺がそんな風に考えていたら、リディアさんはそれに気がついたのか、涙を浮かべて言い訳・・・もとい反論してきた。

「だ、だって仕方ないじゃないですか！今期の星麗会のメンバーはギルドマスターの孫娘を筆頭に、この国の王女様に公爵家の娘なんですよ？下手に逆らったら私の首が飛んじゃいます！」

うわゝ・・・なんか今、凄い事言ったぞ。この人・・・

「って！王女様！？何でこの国の王女様が学校になんか通ってんだ？」

「そ、それは・・・」

「それは我が国の仕来りだからですの。」

リディアさんの声に被せる様に扉の奥から声が聞こえた。

そして扉を開けると同時に、二人の女子生徒が入ってくる。

「お待たせして申し訳ありませんわ。私はこの学園の星麗会メンバーの副会長を勤めさせて頂いております、ユーテシア・アーセナルと申します。以後、よろしくお願いいたしますわ。」

そう言いながら入ってきた女子生徒。金髪のロングストレートの髪をなびかせ、勝気な目が印象的な美少女だった。

「ひ、姫様！」

「……姫様！！？」

リディアさんの言葉に、俺とリム達、そしてアイリスが驚く。

そしてリディアさんは慌てて頭を下げようとするが、先にユーテシアに制される。

「リディア先生。ここは学校ですので、私に頭を下げる必要はありません。ここではわたくしも、一生徒に過ぎませんので。」

「で、ですが……」

「もう……私はここでは普通にいたいんです。ですから、今は王女のわたくしを忘れて、一人の生徒として見て下さい。」

「わ、わかりました。」

ユーテシアはリディアを無事説得できたことにホッとし、改めて俺たちの方を見た。

「初めまして。わたくしはこの国の第一王女、ユーテシア・アーセナルと申します。今は学生として、この王立ザンクトヒルデ学院の生徒会副会長を勤めさせて頂いております。どうぞ、よろしく願います。」

そう言って、ユーテシア王女は右手を差し出し、握手を求めた。

「あ、はい。俺はジュン・アキモト。最近冒険者になったばかりです。この学校には俺たちが保護したアイリスが通うことになりますので、この子と仲良くして頂けると助かります。」

そう言って俺はアイリスを紹介し、彼女と握手をした。

そして、握手が終わると、ユーテシアの後ろにいた女子生徒が声を掛ける。

「じゃあ、今度は私の番だね。私はリースリット・クレメンティスです。ギルドマスターの孫で、この学院の生徒会長をしています。よろしくね。」

赤髪のショートボブの美少女、リースリットは、俺たちに笑みを浮かべる。

「ああ、こちらこそよろしく。」

それに俺たちも笑みを持って答える。

「せっかくだからあなたも自己紹介をしなさいな。セシル？」

リースリットはセシルに自己紹介を促す。

「分かりました、リース会長。では、改めまして、セシル・グランツ・アルベルトです。この学校で生徒会書記をしています。よろしくお願いします。」

そう言っでセシルは俺たちに自己紹介をする。

そして俺たちも、アリア、ロッテ、アイリスの順番でそれぞれ自己紹介をした。

その後、ガールズトークしながらで仲良くなっていくアイリスを見て、改めてこの学校に入れて良かったと思う俺だった。

## 混乱の晩餐会

「そういえばセシー？この後はどのような予定なの？」

しばらく話をしていると、リースが唐突に聞いてきた。

ちなみに、リースと言うのはリースリットの愛称だ。

「えと、この後は私の家にジュンさんたちを招待する予定です。この前のお礼がしたいとお父様に言われていますので・・・」

セシルはリースの質問に答え。すると、今度はユーテシア王女が聞いてきた。

「この前と言うのはあなたの誘拐事件のことですか？」

「はい。その通りです。私はジュンさんたちに助けて頂き、とても良くて頂いたんです。」

そう言ってセシルは俺のほうを見る。

「ま、まああの時は俺達もちょうどネイル洞窟に用事があったし、盗賊達を倒せたのもたまたまだよ。」

俺は少し恥ずかしくなり、頬を赤くしながら言い訳をする。

「そんなことないです！あの時のジュンさん達は凄くかつこよかったです！」

セシルがそう言っ て目をキラキラさせながら言っ た。さすがに恥ずかしいです……

「そう言えば……今日、お爺様もキール公爵様の家に行くと言っ ていたわ……ねえセシル？もしかして、今日はお爺様もいらっ しゃるの？」

俺が照れている中、リースが思い出したように言っ た。

「はい。そうですよ会長。私が攫われたのは宵闇の盗賊団ですので、討伐のお礼が言いたいと言われていました。ギルドの方でも、結構被害があっ たようです。」

「そうね。確かにギルドも被害を受けていたわ。討伐に行っ て帰っ てこなかつ た冒険者の方も多かつ たし……」

リースの発言で、一瞬だけその場が重くなっ た感じがした。

「そうですね。ならわたくしも王国を代表してお礼を言わせて頂きますわ。ねえセシルさん？わたくし達も、今日あなたのお家へ行っ てもよろしいかしら？」

ユーテシア王女は、手をポンツと叩き、名案とばかりセシルに尋ねた。

「それいい考えね。私も学院を代表させてお礼がしたいわ。せっか くキール公爵がお礼の場を用意しているんだもの。これに乗らない手はないわ。でも、あなたは本当に大丈夫なのユーテシア？今日は体調が悪いように見えただけ……」

ユーテシア王女の提案にリース会長が乗る。しかし、リースはユーテシアの体調を心配していた。

「大丈夫ですわ。朝から少し気分が優れませんでした。今はもうすっかり良くなりましたの。」

リースの質問に笑顔で答えるユーテシア。その表情に安堵し、再びリースはセシルに問いかける。

「ならよかった。じゃあセシル？私達もお礼がしたいから、今日あなたのお家へ行っても良いかしら？」

「そうですね。それが良いと思います。早速うちに連絡を入れておきますね。」

セシルはそう言って、嬉しそうに生徒会室を出て行った。

そして、リースとユーテシアは今日の生徒会の仕事を終わらせ、セシルや俺達と一緒に校門に出た。

するとセシルが手配したのか、校門にはセシルの家の家紋が入った巨大な馬車が待っていた。

「お嬢様、リースリットお嬢様、ユーテシア王女殿下、そしてジュン様にその従者様。お待ちしておりました。どうぞ、馬車にお乗りください。」

馬車で待機していたのは、まさに執事！といった初老の男性だった。

「お待たせいたしましたガイルさん。さっそくですが、家まで願います。」

そう言つてセシルは馬車に乗り込む。それに続くようにリースとユーテシアが乗り込んだ。

俺達はその光景に呆然としてみると、ガイルと呼ばれた執事が近づいてきた。

「さあ、ジュン様たちもお乗りください。屋敷で旦那様がお待ちしています。」

「は、はい。では失礼します。」

俺達はそう言つて馬車に乗り込んだ。

乗り込んだ馬車は、子ども達を含めて7人乗っていたが、それでもまだ余裕がある馬車だった。

そして俺達を乗せた馬車は、三頭の大きな馬が引つ張る中、セシルの家を目指す。

しばらく馬車に揺られていたら、ゆっくりスピードを落として馬車が停止した。

「お嬢様方、到着いたしました。」

ガイルさんが馬車の扉を開けて、セシルの家に到着したことを教えてくれた。

次々と降りていく皆を見ながら、俺は「やっと着いたか」と思いながら馬車を降りる。

しかし、馬車を降りたらそこは別世界だった。

広々とした庭の奥には、噴水があり、その周りには色とりどりの花が植えられていた。

そして更にその奥には3階建ての巨大な家。3メートルほどの玄関を筆頭に、これでもかと豪華に装飾された外装は、御伽噺に出てきそうなほどのお城のような建物だった。

「これ・・・ほんとにセシルの家？」

「うん。そうだよ。」

アイリスも俺と同じ事を考えていたのか、ぽかんと口を開けていた。そして無意識の内に零れたアイリスの言葉を、セシルは無邪気に答える。

「お嬢様。旦那様が広間でお待ちです。」

ガイルさんがセシルに言い、その場を離れる。

「ありがとう。じゃあ皆、お父様が広間で待ってるみたいだから付

いて来て。」

セシルは俺達にそう言い、自分の家に入っていく。俺達もセシルの後に続いた。」

「お父様。ただいま戻りました。遅くなって申し訳ありません。」

大広間に入った俺達を待っていたのは、キール公爵とセシルによく似た女性だった。そんな二人に、セシルは部屋に入るなり謝罪をする。

「おお帰ったか。お帰りセシル。遅くなった事は事前に聞いておるから、頭を上げなさい。そしてジュン殿。よく来てくれたな。」

キール公爵はセシルの頭を上げさせて、俺に話しかけた。

「キール公爵。昨日ぶりでございます。今日は招待してくださり、ありがとうございます。」

「ああ。まあそんな固くなくても良い。ジュン殿はセシルを助けてくれた恩人だからな。」

「いえ、そういう訳にもいきません。俺達はただの冒険者。キール公爵と対等に話すわけにはいきません。」

「ふむ。なかなか頭が固いのだな君は・・・もう少し砕けて話しても良いんだぞ?」

「そうですか？なら少し砕けた話し方でお話したいと思います。」

そう言っただけ俺とキール公爵は笑いあった。

「そうだ。ジュン殿にも紹介しておこう。私の妻でフリージアだ。よろしく頼む。」

そう言っただけキール公爵は隣にいた奥さん、フリージア夫人を紹介した。

「フリージア・グランツ・アルベルドと申します。この度は娘のために奮闘して頂き、本当にありがとうございます。」

そう言っただけフリージア夫人は俺達に頭を下げる。

「ご丁寧にありがとうございます。私はジュン・アキモトと申します。セシル嬢の事は本当に偶然が重なっただけですので、そこまで畏まられますと困りますね。」

そう言っただけ俺も自己紹介をし、頬を掻く。

「なに。偶然にしる必然にしる、私の娘を助けたのは事実なのだ。お礼は受け取っただけいい。」

「わかりました。では受け取らせて頂きます。」

「よろしい。ならジュン殿の願いを一つ叶えさせてくれ。私達の出る範囲で叶えさせてもらおう。それがセシルを助けてくれた、私達に出来るお礼だ。」

「願いですか？俺は特にないんですが・・・リム達は何かあるか？」

そう言つて俺はリム達に振る。しかし、二人は首を横に振つた。叶えたい事はないらしい。

「キール公爵。今俺たちが欲しい願いが見つからないんですが、どうしましょうか？」

「本当はないのか？金や家もやれるぞ？なに、遠慮するなジュン殿。」

「いや・・・金は宵闇から巻き上げたのがまだ残ってますし、俺達は冒険者ですから、世界を回ってみようと考えています。ですので、宿暮らしでもいいかなって・・・」

「むう・・・そうか。ならジュン殿がこの国を出るまで保留にしておくから、それまでに何か考えておいてくれ。」

「わかりました。そうしますね。」

「なら、次だ。夕食を用意したので今日は家で食べてくれ。家のコックに腕を振るわそう。」

「はい。ありがとうございます。ご馳走になります。」

そう言つて俺達は話を終えたので、一同食堂に向かった。

食堂に向かう途中にギルドマスターが到着したので、一緒に話しながら食堂に向かった。

「しかし、君には驚かされたよ。4日前にギルド登録をした冒険者なのに、3人でゴブリンを66匹倒し、宵闇の盗賊団を壊滅させたのだからね。」

食事中、ギルドマスターが俺に話しかけてきた。

「まあゴブリンの時はびっくりしましたね。でも宵闇の盗賊団のときは倒せたのは偶然ですよ？宵闇だって気が付いたのも倒した後でしたし。」

「ははは、まあこちらの不手際もあったが、君達には本当に感謝しているよ。私に出来ることがあったらいつでも相談しなさい。出来る限りの対応をとることにしよう。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って和やかな会食の中、事件は起きた。

「うつ・・・ごほっごほっ！」

——ガシャーン——

ユーテシア王女が咳き込んだと思ったら、突然テーブルに倒れこんだ。

そしてその拍子にテーブルの料理が散乱する。

「ユーテシア！？いったいどうしたの？うつ・・・」

隣にいたリースリットがユーテシアの体に触れようとしたら、リースリットもユーテシアに重なるように倒れる

「ユーテシア王女！？リース会長！？どうなさった——」

——ガシャーン！——

向かいにいたセシルが立ち上がって叫んだが、すぐにその場のテーブルの上に倒れた。

そして、俺は周りを見渡してみると、アリアにロツテ、アイリスが同じように倒れている。

「アリア！ロツテ！アイリス！？いったいどうした！なにが起こっているんだ！？」

俺は混乱せずに入られなかった。

「医者だ！至急医者を呼べ！」

混乱の中でキール公爵の櫓が飛ぶ。

そしてしばらくして医者がやってきて、晩餐会の会場にいた女性全員が客間へと運ばれた。



## 混乱の晩餐会（後書き）

誤字が多いと感想が来ています。読者の皆様本当にすいません。  
誤字の方は見つけ次第ご報告をいただけるとありがたいです。

## 七夜病

王女・・・もとい、あの晩餐会にいた女性全員が倒れて、今客間のベットで寝ている。

そして、医者が入り診察している中、俺は客間の前で診察が終わるのを待ちながら先ほどのことを思い出していた。

あの時、ユーテシア王女が倒れてから、隣にいたリースが体に触れようとしたら同じように倒れた。そして向かい側にいたセシルやその隣に座っていたアイリス、そして俺の向かいで食事をしていたりム達も同じように倒れた。

もし、毒物なら俺にも被害があってもよさそうなのだが、俺はいたって健康・・・

というか、なぜ女性全員が倒れるんだ？食事をしていた俺達のほかに、後ろで待機していたメイドさん達も一緒に倒れたのが分からない・・・

「クソ！いたいなにが起きているんだ・・・？」

俺が苛立っていると、診察が終えたのか、客間から医者が出てきた。

「せんせい！どうですか？いたいなにが起きたんです！？」

俺は出てきたばかりの医者に問い詰めるようにして聞く。

「君は？あの場所にいた少年だね。私はキール公爵に診断結果を伝えなければならぬ。君も一緒に来なさい。君が抱えていた獣人族の女性は、君の従者なのだろう？」

そう言つて医者 of 先生は俺を大広間へと促した。

俺もそれに頷き後に続く。

「キール公爵。お嬢様方の病氣が判明しました。」

「おお！わかつたか。して、どんな病氣にかかつてしまつたのだ？」

そうキール公爵が尋ねると、医者 of 先生は少し言い辛そうに答える。

「はい。お嬢様方の病名は、ずばり『七夜病』です……」

「な、なに！『七夜病』だと！？クスリ、薬は今手元にあるのか！？」

キール公爵は病名を聞いた瞬間、慌てだした。そしてキール公爵に薬の所在を聞かれた医者 of 先生は、ゆっくりと首を横に振る。

それを見たキール公爵は放心し、倒れるように後ろの椅子に座り込んだ。

「あの……『七夜病』ってどんな病氣ですか？」

俺はどんな病氣が分からなかつたので、医者 of 先生に聞いた。

「ああ、そうだね。『七夜病』と言つのは、その名前の由来通り、七夜……一週間で必ず死んでしまう病氣なんだ。

初期症状は軽い風邪に良く似ているから、早期発見が困難な病気です。必ず末期症状になるまでまず見つからない。

末期症状と言うのは、感染している患者が突然倒れることのことなんだ。」

そう言われて、俺はユーテシア王女が突然倒れたのを思い出した。

「心当たりがあるようだね。話を続けるよ。この病気が一番悪い所はその感染力にある。

感染している患者が倒れてから数分、凄まじい感染力で周囲の人を巻き込んでいく。この感染病は、何故か女性にしか感染しないんだ。だから、あの食堂にいた女性全員が倒れたってわけさ。そして、感染して倒れた女性も、今日から7日経ったら確実に息を引き取る。」

そう言われた瞬間、俺の目の前が真っ暗になった。

リム達が死ぬ？まだ何一つ守れてないのに？

「な、治す方法はあるのか？さっき薬がどうのってキール公爵が言ってたよな！？」

そう言っただけ俺は医者の先生を問い詰める。

「治す方法はある。だがそのための薬がないんだ。」

「薬はどうすれば手に入る？材料があれば、あんたは薬を調合できるのか？」

「材料があれば調合は可能だが、危険だ！」

「出来るんだな！？なら場所を教えろ！すぐに原材料をとって来る  
！！」

「だ、だめだ！危険すぎる！！」

俺がとりに行くと言ったら、医者の方が凄惨な形相で止めた。

「たのむ！行かせてくれ！！仲間！助けたいんだよ！！！！」

そう言つて俺は医者の方に土下座をする。

「な！くっ・・・わかった。薬のある場所を教える。薬の原材料は死の森の『生者の泉』の水、通称『虹の雫』と呼ばれる水と、その奥にそびえる劉ヶ谷と言う山の頂上付近に生息する『星根草』という薬草だ。」

「なに！？死の森と劉ヶ谷じゃと！いい、いかん！今あそこは危険地帯なんじゃ！！君は死ぬ気が！？」

医者の方の話の聞いていたギルドマスターが、血相を変えて止めに入る。

「俺は死にません！！それに、今からギルドに緊急クエストで張り出しても7日以内に終わるとは限らないでしょう！？俺ならどんなことが起きようとも無事に帰ってこれます。」

「しかし、どんなに自信があろうとも、今のあの場所は一つに付きチームランクA級の危険なクエストになっているんじゃないぞ！『死の森』に『劉ヶ谷』の二つなんてそれこそチームランクS級に匹敵するほどの危険度じゃ！！！！」

「上等です！！Aだろうが、Sだろうが、絶対に達成して見せます！！」

「君はあの場所の危険度が分かっているから、そんな簡単に言うことが出来るんじゃない。『死の森』に『劉ヶ谷』のモンスターは全てCランク以上、しかも今、死の森のモンスターはほとんどが繁殖期で気性が荒くなっておる。

加えて劉ヶ谷は、山の中腹付近に毎年Bランクの翼竜が繁殖のために占拠しているんじゃないぞ！」

「でも、どんな困難な事があっても、絶望的な状況でも、誰かがやらなくちゃ誰も助けられないんですよ！あんだだって孫を助けたいでしょう！」

「！！そ、それは・・・そうじゃが。」

俺の言葉にギルドマスターが怯む。

そして俺は、医者先生、ギルドマスター、キール公爵に土下座をして頼み込む。

「お願いします！！俺を行かせてください！！必ず、生きて7日以内に帰ってくることをお約束しますから！！！！！」

「わかった。ジュン殿に全てお任せしよう。」

「キール公爵！？」

「ギルドマスター殿。ジュン殿の言う通り、誰かがやらなくては私

達の娘は助からないんだ。なら私はジュン殿に賭けてみたい。」

「くっ・・・わかりました。ジュンと言ったね。この件は君に任せる。ワシの孫を頼んだよ。」

「ありがとうございます。」

俺はお礼を言っただけで準備に取り掛かる。

「では早速準備に取り掛かりたいと思います。ギルドマスターは『死の森』と『劉ヶ谷』の地図と、生息するモンスターの情報、そして劉ヶ谷にいる翼竜の情報をお願いします。」

医者先生は『死の森』にある『虹の雫』の場所の地図と、『劉ヶ谷』の頂上付近に生息する『星根草』の地図と、草の絵と特徴の書いてある紙をお願いします。」

「わかった。すぐにギルドに掛け合わせよう。」

「わかりました。私は一度診療所に帰ります。ジュン君の言っている資料がありますので。」

「お願いします。俺は、これから準備のために武器屋と道具屋に行つて買い物をしてきます。」

そう言っただけで俺は部屋を飛び出そうとした。

「待ちなさいジュン殿。買物に行くならお金は私が出そう。おい！誰がいるか！」

キール公爵がそう言っただけで、部屋の奥からガイルさんが現れた。

「お呼びでしょうか、旦那様。」

「ジュン殿に軍資金を。とりあえず金貨2000枚を渡しなさい。」

「畏まりました。ジュン様、軍資金の方は玄関に用意いたしますので、お持ちください。」

「はい。ありがとうございます。」

そう言って俺は今度こそ飛び出した。

俺は玄関でガイルさんからお金を貰うと、急いで武器屋に向かった。

そして武器屋に到着した俺は、閉店間近の武器屋に飛び込み店主を問い詰める。

「すまない店主。ここにある武器を何でも良いので金貨1900枚分売ってくれ！」

「へ、へい。どうぞ、好きなものを持って行って下さい。」

そう言って俺は武器を物色する。

斬撃系の武器は結構持っているから、今は打撃系の武器を中心に買おう。

そう思い俺は武器を選んでいく。

「あ、ありがとうございます。」

選んだ武器を空間倉庫の中に入れて、俺は道具屋に急いだ。

武器屋の店主の目の前で空間倉庫を使ってしまったが、緊急事態と  
言うことで諦めた。凄く驚いた顔をしていたが、この際無視しよう。

そして、この前買い物に使った魔法道具屋の前に来ていた。

「おや、あの時の坊やじゃないか？もう店じまいだよ。何か用かい？」

閉店作業をしていた店主が俺に気づき、声を掛ける。

「すいません。緊急事態なんです。ハイポーション ハイエーテル 高回復薬と高魔力回復薬を金貨  
100枚分売ってもらえませんか。」

「なにかヤバそうな事態だね。良かったら事情を聞かせてくれるかい？」

俺はそう聞かれたので事情を話す。

「なるほどね。わかった。どっちも25個ずつになるけどいいかい？」

「はい。構いません。それでお願いします。」

「わかった。じゃあこれだよ。後私からの選別だ。」

そう言つて俺は高回復薬ハイボーションと高魔力回復薬ハイエーテルの他に、黄色の丸玉が5つ入っているケースを貰つた。

「これは？」

「それは冒険者御用達の万能薬さ。効き目は抜群だから、毒や火傷、状態異常に陥つた時に使いな。」

「あ、ありがとうございます。」

俺はお礼を言つてキール公爵の家に戻つた。

そして、キール公爵の家に着いた俺は、ギルドマスターから『死の森』と『劉ヶ谷』の地図と生息モンスターの情報を貰い、特例でクエストを作ってもらつた。

さらに、医者先生から『生者の泉』の地図と、『星根草』の詳細が書いてある紙を受け取り、出発を明日の早朝に決めて眠りに付いた。

アリア、ロツテ、アイリス……絶対に助けてやるからな！

特例緊急クエスト

『七夜病の治療薬の原材料の採取』

個人リンクSSS

依頼内容

死の森にある生者の泉の『虹の雫』と劉ヶ谷に生息する『星根草』の採取

報酬：白金貨200枚

七夜病で苦しんでいる者に救いの手を。絶対に生きて帰るんじゃぞ  
ギルドマスター ジーニアス「クレメンティス

## 七夜病（後書き）

連投は久しぶりです。

誤字がありましたらご報告ください。

漢字が苦手な作者ですので、間違っている漢字や文法を正しい漢字や文法と一緒に教えていただけると助かります。

突入！死の森！！

翌朝。昨日の夜のうちにキール公爵家から食料を1週間分貰った俺は、急いで買って、空間倉庫の中に突っ込んだ物を整理していた。

「よし、武器も確認したし、今回のクエストはブロンズ系の武器の使用はやめておこう。ギルドマスターの話じゃCランク以上のモンスターは、ブロンズ系の武器は効きにくいって言ってたし・・・」

そう言っただけで俺は、再度今回のクエストで使用する武器を確認した。

#### 武器

アイアンナイフ：15本  
スチールナイフ：16本  
アイアンソード：18本  
バスタードソード8本  
小型の戦斧：12本  
バトルアックス：20本  
レイピア：6本  
ショートスパア：8本  
モーニングスター：5本  
鎖付き鉄球：5本  
フレイル：4本

#### 道具

ハイポーション  
高回復薬：25個  
ハイエーテル  
高魔力回復薬：25個  
万能薬：5個

以上だ。昨日買った武器はバスタードソードにモーニングスター、鎖付き鉄球にフレイルだ。

「よし。行くか!」

俺はそう気合を入れて、クエストに出発する。

出発場所である北の正門では、キール公爵とギルドマスターがいた。そして、噂を聞きつけたのか、数多くの野次馬であふれかえっていた。

「ジユン殿。無事に帰ってきてくれ。」

キール公爵から激励を受ける。

「ジユン君。これを。」

そして、ギルドマスターから青い玉を貰った。

「これは？」

「これは『ダムールの玉』と言って、お互いの事がわかる玉じゃ。もし、君が死ぬようなことがあったらこっちの赤い玉が割れるようになっておる。」

「なるほど。わかりました。」

「いいな。この玉は貸すだけだから、必ずワシに返しに来なさい。」

けして死んではならんぞ！」

「はい。では、行つて来ます。」

俺はギルドマスターと約束を交わし、キール公爵が用意してくれた馬を断つてフライの魔法を発動させる。

魔法の事は隠さなきゃいけなかったけど、こうなったら仕方ない。リム達を助ける為だし、なりふり構つてられない！！

「必ず、6日以内に帰つてきます。それまで、リム達とアイリスのことをお願いします！！」

そう言つて俺は全速力で『死の森』に向かう。地図を見たから位置はばっちり記憶しているので、迷うことなく北をまっすぐ進んだ。

時速100kmでフライの魔法を使っているので、あっという間に王都ザクトンが見えなくなった。

行く途中で見えた魔物や冒険者、行商人を全て無視して4時間の時間をかけて『死の森』に到着した。

「くっ・・・さすがに全速力はきついな。もう魔力が3分の2も持たっていた。」

俺はそう悪態をついて、ハイパーテル高魔力回復薬を一つ飲み干す。

「ふう。これ一本で魔力が3分の1回復したか。とりあえず何があるかわからないから魔力は満タンにしておこう。」

そう言っただけはもう一本の高魔力回復薬<sup>ハイエーテル</sup>を飲み干す。

「んじゃ、行くか。」

俺は気合を入れて『死の森』に突入した。

「ゲアアアア!!」

「ブルル!!」

「キシヤー!!」

『死の森』に入っただけ、何度か戦闘をしたが、同じようなグループに囲まれること6回目。

俺の目の前には青い巨大な熊に、オットコト又シ見たいな白い猪、そして体長が15メートルはありそうな巨大な蛇が現れた。

一定空間内意思強制付与を使い、空間倉庫から武器を取り出して迎撃しながら、バラムンクで熊に切りかかる。

腕に盾のような物を付けた熊の攻撃をかわしながら、俺は熊の体を切りつける。

「ガアアア!!」

魔力を纏って更に切れ味が増しているバルムンクの一撃で、青い熊が絶命する。

そして、残りの白い猪と巨大な蛇は武器達によって串刺しになり、絶命していた。

今の俺にはモンスターを解体する時間がないので、倒したモンスターごと空間倉庫の中に放り込む。

「しかし、こんだけモンスターに遭遇するなんてな。さすが死の森だ。でもそろそろ俺の武器の切れ味が落ちてもいいのに、空間倉庫から出した時は新品そのものの切れ味になってやがる。一体どういうことだ？あの爺の恩恵か？」

俺は、出しっぱなしで先ほどまで戦闘していた武器達の切れ味が元通りになっていることに疑問を感じた。

「このクエストが終わったら実験するか・・・今はこの恩恵があるほうがありがたい。」

そう結論付け、俺は『生者の泉』を目指す。

「あった。これだな。『生者の泉』ってのは。」

死の森をさまようこと2時間、ようやく俺は目的の泉を発見することが出来た。

「だけど、おとなしく『虹の雫』を採らしてくれるわけじゃねーな。」

俺は虹色に輝く泉の前で鎮座しているモンスターを見据える。

あっちも俺に気が付いたようで、その全身で真っ黒な毛並みを逆立たせて戦闘体制を取っている。

敵の容姿は巨大なイタチ。20mはあるその体格に、虎の様な顔付きで獰猛な赤い目が俺を捕らえている。そして、前足には翼があり、胴体と同じくらいの長さの尻尾の先は棘が付いていた。

「グルアアア!!」

突如咆哮。俺は不意打ちの咆哮に一瞬だけ怯んでしまった。

そして黒い大イタチはその一瞬の隙を見逃さずに突っ込んでくる。

「ク・ソ・が!!」

俺は巨大な体格の割に、凄まじいスピードで突っ込んでくる大イタチの突進をかわし、すれ違い様にバルムンクで攻撃する。

その攻撃でこちら見たイタチと目が合った。だが、イタチは俺の攻撃がまったく効いていないと言う様に口元を歪める。

——ドン!!——

イタチと目が合って呆けていたら、横腹を鈍器のような物で殴られ

た。

「グッ!!」

突然の不意打ちの短く呻き声を上げ、そのまま吹っ飛ばされて地面に転がる。

「ク・・・ガハ！何だ今のは？突然殴られた？」

俺はイタチに注意を払いながら、周囲を窺う。

しかし、周りには俺とイタチ以外生物の気配がない。

こいつがやったのか？しかしどうやって・・・

俺が思案していると、イタチはその巨大な尻尾を自在に振り回す。

あの尻尾で攻撃したのか。今度から気をつけないとな・・・

イタチは尻尾の先に付いている棘を、俺に向かって飛ばしてきた。

「ちょ！それ飛ぶのかよ！」

俺は慌てて避けると、その攻撃は牽制だったのか、避けた先にイタチが先回りしていて、その鋭利な前足の翼を振りかぶっていた。

「チィ!!」

——ガキン!!——

俺はイタチが振りかぶった右前足の攻撃をバルムンクで受け止める。ガチガチと剣と前足で競り合っていたが、所詮は人間と巨大イタチ。こちらが力負けするのは火を見るより明らかだった。

そして、次第に力で押され始めた俺は、倉庫の中からブロンズ系の以外の全ての剣を選択し、矢の様に巨大イタチに叩き込む。

しかし、間一髪でその攻撃に気付いた大イタチは、俺との競り合いをやめバックステップの要領で後ろに下がる。

俺は後ろに下がった大イタチを追撃するように、残りの武器を全て取り出し、素早く意思を付与させる。

「さあ。こっからが本番だクソイタチ！！」

俺はそう宣言し、攻撃は全て武器に任せ『詠唱』を開始する。

ここからは俺のオリジナル呪文だ。いくぞ！！

【我が呼び掛けに答えよ。灼熱の業火を纏う紅の魔神よ、我が手に集いて力となれ。】

【赤きは矛、紅こそ力。我が声が聞こえるならばしかと聞け。荒ぶる者よ、其処に脈動する力無く、ただ灰炎のみ。猛るもの、其れを残す灰燼の剣こそ炎の力】

【そしてその名を真によびし者はここにあり。その力は絶対。】

【汝、我が契り願うは灼熱の業火】

詠唱が完成し、俺の魔力が白き炎に変換されていく。

「喰らいやがれ！！」  
【ヴォルカニックランス 壮絶なる灰燼の矛】」

右手に炎が集約され、形成されるのは一本の槍。2 mほどの大槍は、高圧縮された火の魔力を最大限まで循環され、真っ白に光り輝いていた。

そして高速を超える速度で投げられたその槍は、上空から地面めがけて投げられ、巨大イタチの胴体に突き刺さり大爆発を巻き起こす。

——ドーン！！——

本来、クレーターだ出来るほどの威力なのだが、ジュンが威力を落とし、クレーターまでは出来なかった。しかし、その威力は絶大で、巨大イタチの命を一撃で刈り取った。

だが、ジュンも全力で魔法を使ったので魔力がすっからかんになってしまっている。

「うつ・・・さすがにふら付くな。」

極度の魔力消費で立ちくらみが起きたジュンは、その場に倒れるように座り込む。

そして、空間倉庫からハイエーテル高魔力回復薬を乱暴に取り出して口に含む。

「ゴクッゴクッ・・・ぷは！あゝ あ・・・キツかった。めちやくちや強かったなこいつ・・・」

そう言ってジュンは先ほどまで戦っていた大イタチを見る。そこには完全に絶命したイタチが横たわっていた。

しばらく見ていたジュンだが、体力が回復したのか、もう一度空間倉庫から高魔力回復薬と高回復薬を一本ずつ取り出して飲み干した。

「さてと、任務の一つ目を達成しに行くか。」

そう呟いて、俺はギルドマスターから預かった空瓶に『生者の泉』の水を汲む。

そして、空瓶の中に七色に輝く水を確認してから、それを空間倉庫に突っ込む。

それから俺は、『生者の泉』の中に手を突っ込み手の先に空間倉庫を展開する。

そうして泉の水を大量に入手し、先ほど戦った大イタチを空間倉庫の中に放り込んだ。

「そろそろおなかも減ったし、飯にするか・・・」

そう言っただけ俺は空間倉庫の中から調理道具と食料を取り出した。

お昼ごはんが完成し、飲み水を泉の水にして一口含んだら、何と魔力が満タンまで回復した。

俺は上機嫌でご飯を平らげ、泉の水をガバガバ飲んだ。そして、高魔力回復薬の空瓶を魔法で作った水できれいに洗ってから、泉の水を汲んだ。

それから人心地付くまで休憩し、目の前にそびえ立つ大きな山、

劉ヶ谷』に向かって歩き出す。

突入！死の森！！（後書き）

初の強敵との戦闘と、詠唱呪文の初披露です。

誤字や文法間違いがあつたらご報告お願いします。

激闘！？×死闘！×劉ヶ谷

「はぁ・・・はぁ・・・」

王都ザクトンの中をただひたすら走る男がいた。

その男は時に躓きながら、それでも何とか体勢を立て直してようやく目的の建物に着いた。

——バン！——

乱暴に開けられた扉の先に目をやると、自分の姿を見て驚く職員達、そして同じように驚く熟練の冒険者達、自分の姿を見ても興味を示さない冒険者達と、三種類の人種に分かれていった。

そんな中、男は目を配らせ、近くにいた『総合案内』と書かれている机にいた女性に声を掛ける。

「ラミアさん！ギルドマスターはいるか！？」

男はよほど急いでいるのか、ラミアと呼ばれた総合案内の女性に問い詰める。

「は、はい。ギルドマスターなら奥の執務室にいらっしゃいます。しかし今は来客中で・・・」

「わかった！ありがとう！」

男は短くお礼を言うと、ギルドの奥にあるギルドマスターの執務室

に、足早に向かっていた。

「ちょ、ちよつと、ジャンさん!!?」

奥の執務室に向かった男、情報屋ギルドの幹部であるジャンは、ラミアの制止を聞かずに執務室の扉を開いた。

「じいさん!いるか!?」

パンツと乱暴に開けられた扉に勢いよく入って来たジャンに、ギルドマスターであるジーニアスは、突然の来客に驚いた。

「何じゃ騒々しい。今はキール公爵がいらしているのだ。もっと静かにせんか。」

「キール公爵もいたのか。ならちようどいい。いきなりで悪いんだが、あんた達に悪い知らせだ。」

ジャンは、ジーニアスの説教を無視し、話をする。

「悪い知らせだと?一体何があつたんだ?」

キール公爵は、ジャンの突然の訪問に嫌な予感を感じながら話を促した。

「2日前、隣国のライオット王国に飛竜が観測されたと情報が入った。」

「飛竜が?別に珍しいことじゃなかるうに・・・」

ジーニアスが呆れるように声を上げる。

「最後まで聞いて欲しい。その飛竜なんだが、昨日の夜、国境付近の町を襲ったそうさ。その飛竜は町を襲った後、北東にと飛び去ったそうさ。」

そして、ジャンはそこで区切って深呼吸をする。

「生き残った町の住民と目撃証言を合せた結果、その飛竜の正体がわかった。その正体は・・・」

もったいぶるジャンに、ギルドマスターとキール公爵は息を呑む。

「その正体は、バハムートだと推測される。しかも二匹・・・おそらく番だろうと、俺達情報屋ギルドは推測した。そして、そいつらの目的はおそらく、劉ヶ谷にある竜の卵だろう。」

「な、なに！バハムートじゃと！？なぜ伝説に近い竜が今さら劉ヶ谷に向かうのじゃ？」

「たぶん伝承の通りじゃないのか？爺さんだって知ってるだろ？バハムートの伝承ぐらい・・・」

「それは知っているが、まさか真の話だったとは・・・」

「それはどんな伝承なんだ？」

ジーニアスとジャンが話を盛り上げている中、完全に蚊帳の外だったキール公爵が二人に尋ねた。

そしてジーニアスは公爵にその伝承を聞かせていく。

曰く、それは最強の竜種。曰く、それは天空をすべる王たる存在。曰く、子どもを作るのは数百年に一度。そしてその卵は孵化する直前まで誰も手出しが出来ない。破壊するにも、物理攻撃はもちろん、魔法による破壊も出来ず、動かすことさえ出来ないと言われている。

そして、劉ヶ谷にもその卵は数年前に発見されていることがわかっていった。

しかし、バハムートの卵の孵化は特別で、半年で孵化することもあるれば、十数年という長い年月をかけて孵化することもあると言われている。

そんな話を聞かされたキール公爵は、次第に顔が蒼白となった。

「な、なら今の劉ヶ谷は・・・」

キール公爵は二人を見る。しかし、二人の反応も自分と同じく良くない物で、首を横に振るだけだった。

「間違いなく。チームランクSSS級の危険度に跳ね上がった。ジユンの事は、もう諦めたほうがいい・・・」

ジャンが意を決してその言葉を口にする。

そして、その言葉を聞いた二人の表情は更に沈み、執務室は重い空気に包まれた。

## 劉ヶ谷。

本来は、ここは谷ではなく山だったと言われている。

ではなぜそのように呼ばれているかというと、曰く、強力なドラゴンのブレスの一撃で、山の中央が削れて谷のようになったと言われている。

俺は、昨日持たされたギルドマスターからの資料を読み返しながら、今森の中で気配を消して身を潜めている。

なぜそのような事をしているかというと、目の前にいる翼竜の番たちの数に呆れているからだ。

死の森にある『生者の泉』を出発して、劉ヶ谷と呼ばれる山を身体能力強化魔法を使って登り始める事3時間。赤、青、白と色は違うがゆづに3メートルは超えている熊に遭遇すること数回、全長50センチはあると思われる巨大な蜂に襲われること数回、更に1メートルに近い巨大な体格を持つ狼や、死の森にいた蛇に、俺と同じくらしいの身長なのにデップリと太った二本足で走ってくるトカゲに襲われること数十回。

やっとの思いで今回の最重要危険地帯の山の中腹付近、十数キロの長さのその丘は、通称『竜の腹』と呼ばれるなだらかな斜面に見える竜たち。ざっと見積もっても30組の翼竜の番たちである。

今回相手の翼竜は、一頭あたりの強さはチームランクCクラスで、個人で挑むのはAクラスになる。そしてその翼竜、ランドドラゴン

と呼ばれる翼竜は、その特徴として、わかりやすく例えるのなら、トカゲの前足にこうもりの様な巨大な翼が付いたと言えるだろうか？

そしてその全長は平均にして20メートル前後になる、大型の竜種である。

しかし、上記の説明はあくまで一頭あたりの強さであり、今回の複数の戦闘となると、その難易度は急激に跳ね上がる。しかも、今は産卵期。非常に気性が荒くなっており、一頭あたりのランクも一段階上がっていると、ギルドマスターは言っていた。

そんな非常に凶暴になっている竜種を、今から相手にしなくてはいけないかと思うと、深いため息が出て、今まで感じたことのない後悔が俺を襲う。

「はあ~~~~・・マジでこいつらを相手にするのか・・」

もう一度木の影から、我が物顔で占拠しているランドドラゴンたちを覗き見る。

「でもこいつらを倒さない限りは先に進めないし、回りこんでいる時間もない。」

そうなのである。一応翼竜たちを回りこんで回避する道はあるにはあるのだが、その方法をとるには、一度下山をして迷路になっている死の森を抜けて、もう一度山を登らなくてはならない。

その道を取るとなると、いかに身体能力を魔法で強化しようとも、絶対的に時間が足りなくなってしまうのだ。

しかも城の位置からして、回り込んで『星根草』を入手し、また回

り込んで戻るより、一直線で『竜の腹』を突破して帰ったほうが早いのである。

しかしどちらにもリスクがある。前者は時間のリスクが、そして後者は命の危険があるのだ。

「ま・・・どちらを取るかなんて比べるまでもないけどな・・・」

俺は悩むことなく後者を選択する。

「危険はあるが、乗り切れないほどの危険と言っわけでもない。覚悟を決めるか・・・」

俺は覚悟を決めて、『竜の腹』の草原へと飛び出した。

そして俺は走りながら詠唱を開始する。

【我が呼び掛けに答えよ。灼熱の業火を纏う紅の魔神よ、我が手に集いて力となれ。】

【赤きは矛、紅こそ力。我が声が聞こえるならばしかと聞け。荒ぶる者よ、其処に脈動する力無く、ただ灰炎のみ。猛るもの、其れを残す灰燼の剣こそ炎の力】

【そしてその名を真によびし者はここにあり。その力は絶対。】

【汝、我が契り願うは灼熱の業火】

詠唱が完成し、右手に火の魔力が集約される。直径にして10メートル。その小さな太陽は、今か今かと出番を待ち、更に燃え上がった。

「ファイアフルフレア  
落千の砲火！！」



うだ。

俺はそんなことを考えながら、翼竜たちの攻撃をかいくぐり、その首を切り落としていく。

一頭一頭に時間をかけている暇がないので、予め資料で見た弱点である首めがけて、思いっきりバルムンクを振り下ろす。

フレイムシュート  
「追尾する炎弾

シャインフリーズ  
凍て付く閃光

サンダーブレード  
切り裂く紫電の劔！！」

そして、時にはバルムンクで首を切り落とし、時には魔法で翼竜の命を刈り取っていった。

しかし、こちらにもまったくの無傷でいられるはずもなく、徐々にダメージを受けていき、全身に傷を負っていった。

回復薬で傷や魔力を回復していつているが、それでも間に合わず、後十匹を残すところで翼竜たちに囲まれてしまった。

ちつ、魔力は残っているのに、全身にダメージを食らいすぎた。これは絶体<sup>ピンチ</sup>絶命って奴かな？

そんなことを思っていたが、俺はまだ諦めてはいなかった。

絶対生きて帰るって約束したんだ。こんな所でくたばってたまるか！少々危険だが、アレをやるしかない！

俺は残りの魔力を全て注ぎ込み、古代魔法の詠唱を開始する。

この世界には古代魔法が存在する事を、以前ロツテに教わった。

そして、ここに来る前にギルドマスターから火属性の古代魔法の一つ。その詠唱と効果を教わった。

イメージはばつちり出来ている。後は俺に扱えるかどうかだ！

「【煉獄よりいでし不浄の炎よ、悪しき魂を焼き払え】」

詠唱を唱え、魔力と共に魔法に注ぎ込む。

上級魔法以上に魔力を一気に持つていかれ、それでも足りないのか、魔法が俺の生命力までも持つていこうとする。

苦しい・・・

いつもと違う感覚が俺を襲う。だが、アリアとロツテはそれ以上に苦しんでいるんだと思うと、自然と苦しさが和らいだ。

「俺の命を持つていけるものなら持つていきやがれ！！行くぞ翼竜ども！！！」  
【灰燼<sup>エクスプロージョン・ノヴァ</sup>と帰す煉獄炎】！！！！」

その魔法は、冥界より召還されし煉獄の炎。魂までも焼き尽くすその不浄の炎は、俺を中心に全てのものを焼き尽くす。当然、俺を取り囲んでいた翼竜は焼け死に、それでもまだ足りないとはかりに、『竜の腹』全体を覆いつくすように広がって行き、その全ての存在を焼き払った。

「カハツ・・・すげえ威力。初めから、これ使っておけばよかった

かな？」

血反吐を吐きながら、俺はその超広域殲滅魔法の威力に驚き、倒れた後、この戦いの勝利を静かに喜んだ。

「よかった。とりあえず、まだ生きてる・・・」

俺は仰向けで倒れて、昼下がりの青空を眺めながら回復薬を取り出した。

ハイポーション  
高回復薬を飲み干して、まだ回復しきっていない体に鞭を打って、翼竜の死体を回収していく。

エクスローション・ノヴァ  
【灰燼と帰す煉獄炎】で一度は全て焼き払われたが、腐っても竜種炎の攻撃に耐性があるのか、所々焦げてはいたが、その体のほとんどが無事だった。

ハイポーション ハイエーテル  
俺はそれに安堵し、高回復薬と高魔力回復薬を飲みながら、端から翼竜の死体を回収して行った。

極度の疲労と、古代魔法を使用した代償により、内臓が破損したような感覚がした俺は、試しに魔法道具屋で貰った万能薬を飲んでみたが、結局無駄だった。やはり、状態異常といっても毒や火傷、凍傷や麻痺などの症状にしか効果がないみたいだ。

「やっぱだめだったか。あんま期待はしてなかったけど・・・」

そして俺は、回復薬のおかげで何とか外傷の傷と魔力だけを回復して、『竜の腹』の奥にある山道へと進む。

——バツサ！バツサ！——

空を羽ばたく、鳥の羽の特有の音が耳に響いた。

そしてその音は次第に大きくなっていく。

俺は恐る恐る後ろを振り返り、その存在に目を見開いた。

激闘！？×死闘！×劉ヶ谷（後書き）

今月から少し更新速度が落ちると思います。なるべく一週間以内に書き上げることが目標にしていますが、気長に待ってやってください。

あと、感想を下さった読者の皆様。本当にありがとうございます。稚拙な小説ではございますが、これからも応援よろしく願います。

## 絶体絶命？vs 天空の覇者

——バツサ！バツサ！——

空を羽ばたく、鳥の羽の特有の音が耳に響いた。

そしてその音は次第に大きくなっていく。

俺は恐る恐る後ろを振り返り、その存在に目を見開いた。

そこには、まごうことなく飛竜の姿があった。

黄金に輝くその体。西洋竜に酷似する体格は、間違いなく御伽噺に  
出てくるドラゴンそのもの。そしてその体より更に大きな翼には、  
三日月の様な模様があり、その姿はまるで・・・

「って・・・まんまレイアじゃん。」

そう、初めて見たこのファンタジー世界でのドラゴンは、モンハン  
に出てくるリオレイアに非常によく似ていたのである。

「しかも金色って。思いつきり希少種だし・・・あれ？まさかと思  
うけど、もしかして・・・」

俺はレイアを警戒しながら、目と鼻の先の頂上付近へと目をやる。

すると、頂上付近の少し手前の洞窟から、銀色の飛竜が出てきたの  
を目撃した。

「はい。あれ完璧にレウスですね。わかります。ありがとうございます。」

俺は完全にパニくり、この状況から早くも逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。

「いやいやいやいや、リオレイアとリオレウスの希少種の番との戦闘って、どんな無理ゲーだよ！！しかも翼竜60頭倒した後の連戦とか無理すぎるだろ！！！」

俺は自分の不幸を呪い、思わずそう叫ばずにはいられなかった。

そして、その魂の叫びが届いたのか、先に俺を発見して様子を見ていたレイアの目が、ギョロつと俺を捕らえて、その禍々しい口を開き、奥から炎をちらつかせる。

「あ・・・ヤバー！！」

ドラゴンブレス。とっさに俺の頭にそんな単語がよぎった。

俺は、思いっきり魔力を足に溜めてその場を移動する。足に溜め込んだ魔力を一気に開放し、地面を思いっきり蹴って横に避ける様に地面を蹴った。

——ゴウッ！！——

と、そんな音を出しながら、俺がさっきいた場所を灼熱の炎球が通り過ぎていく。

「アブね！！間一髪だった。」

俺は無事に回避したことに安堵し、レイアを見据えて戦闘体制を取る。しかし俺はもう一頭存在を忘れていた。

俺のいた場所に影が差し、ふと上を見ると、レウスが空中でブレスの体制を取っていた。

「ちょ！ばっ！？ザケンな！！」

俺は慌ててその場を移動する。

そして何とかブレスの直撃は避けた物の、炎球が地面に衝突し爆発が巻き起こった。俺はその爆発で飛ばされてきた石や爆風を、もろに受けてしまった。

「ぐっ、うわ！」

思わず声が漏れる。しかし、敵はそんな俺に回復をさせる余裕など作ってはくれない。

レウスは空中で俺が足を止めているのを見て、連続してドラゴンブレスを撃ってきた。そしてレイアも負けじと地上に降り立ち、俺の逃げ道を塞ぐ様にドラゴンブレスを連続で撃ってくる。

番だからこそ出来る完璧な連携。最初は何とか避け続けていたが、次第に先読みされるようになり俺は成すすべなくブレスにやられていく。

そして、ついにブレスにやられた俺は、その灼熱の炎に身を焦がす。

「ぐあああああああああ……！！！！！！！！！！」

あまりの高熱のその一撃は、俺を瀕死に追いやるのは簡単だった。

俺はそのまま倒れ、意識を闇の中へと落とす。

おれ……ここでしぬのかな？

闇の中に意識が落ちる中、俺はそんなことを思っていた。

——ココデアキラメルノカ？——

だれだ？

闇の中で、俺に誰かが問いかける。

——キサマノオモイハソノテイドダッタノカ？——

うるさい。おまえはだれだ？

——ワレハブキ。キサマガモツケン。——

けん？ばるむんくか？

——ソウダ。ワガチカラヲシンニカイハウセシアルジヨ。ワガチカラヲカイハウセヨ。——

ちからのかいほう？なにをいつているんだ？

——ワガチカラカイハウセヨ。サスレバキサマニシンノチカラヲア  
タエン。——

なにいつているんだ？おれにはもうむりだ。たたかえるちからの  
こつていない。

——イマイチドトウ。キサマノオモイハソノテイドナノカ？キサマ  
ハココデアキラメルノカ？キサマノカエリヲマツモノガイルノデハ  
ナイノカ？——

そんなことない。おれはあきらめたりしない。かならずかえるとや  
くそくしたんだ。

闇の中で、この世界に来てからの今までの思い出が、走馬灯のよう  
に頭の中を駆け巡る。

——ソウダ。キサマニハキサマノカエリヲマツモノガイル。ソレヲ  
ユメユメワスレルナ。ソシテワレモソノイチインダ。——

ああ。ありがとうな。バルムンク。

——レイナドコノキキヲダッシテカラニシロ。キサマニイチドダケ  
チカラヲカソウ。ソシテ、キサマジシンノシレンヲミゴトノリコエ  
口——

わかった。

——ワスレルナ。ワガチカラヲシンニカイハウスルチカラハオモイ

ノツヨサ。ソレヲユメユメワスレルナ。――

ああ。ありがとな。相棒!!

――フツ。ナツカシイヒビキダナ――

闇の中から意識を取り戻した俺は、ゆっくりと立ち上がる。

すると、リオレイアが背を向けて飛び立とうとしていた。

上を見上げると、リオレイアの方もまだ俺が立ち上がったことに気が付いていない。

俺は倉庫の中から万能薬を取り出し口に含む。

万能薬が即効性なのか、さっきからジクジクと痛みあった全身の火傷が、嘘の様に引いていくのがわかった。

そしてそのまま回復薬を取り出して飲み干し、全回復していく。

そこでもうやくレウスが気付き、咆哮をあげる。

『グオオオオオオ!!!!』

その咆哮に気付き、レイアの方も俺のほうに振り返る。

そして二頭の番は、先ほどと同じようにドラゴンブレスを俺にぶつけてきた。

「ふん！二番煎じだな。同じ攻撃が効くかよ！！」

俺はイメージを固めて、バルムンクを構える。

そして二頭の放つドラゴンブレスが迫りくる中、俺は右下に構えていたバルムンクを左上へと切り上げる。

「こっつー！！」

俺は、目の前で二頭が放った炎球が重なって更に大きくなった炎球をバルムンクで打ち返す。

巨大になったドラゴンブレスは、二頭のちょうど中間を通り過ぎた。

その光景を見たレイアとレウスは、お互いの顔を見て頷きあい、その巨体に似合わない超高速の速度で俺に襲い掛かってきた。

俺はその攻撃を何とかかわしつつ、バルムンクで斬りつけていく。

しかし、二頭の異常なまでに息のあったコンビネーションに、俺は次第に押され始めていった。

片方の攻撃をかわし攻撃をしたが、攻撃の後のわずかな隙に炎弾のブレスを叩き込まれ火傷を負う。火傷を治そうと万能薬を使って治すが、その隙に強烈な突進攻撃に回復薬を使わざる終えない状況に追いやられる。

だが、こちらもただ攻撃を受けていたわけではない。ヒットアンドアウェイで攻撃を繰り返し、徐々に弱らせていったのだ。その証拠に、リオレウスの方は明らかに動きが鈍ってきた。

俺はこの隙を見逃さず、一気に勝負に出ることにした。

「【罪深き者よ、その罪を請い神雷の裁きを受けよ】」

唱えるのは雷の魔法。威力は古代魔法にも匹敵する俺のオリジナル魔法第二弾。

ゲームの中ではレイアもレウスも雷属性に弱かったはず。この世界ではどうかはわからないけど、たぶん効果はあるはずだ。

「墮ちろ！！サンダー・ジャッジメント【裁く神の雷】」

それは天空より振り墮ちる極太の神雷。天より地を貫かんとする裁きの雷がレウスに降り注ぐ。

レイアはとっさにレウスに近づき、その身で守ろうとしたが間に合わず一緒に裁きの雷を食らう羽目になった。

そして、一撃でレウスの命を刈り取った雷を見ながら、俺は『虹の雫』を飲み干し魔力の回復を図った。

レウスと一緒に感電していたレイアが意識を取り戻し、パートナーであるレウスの死を確認すると鬼のような形相で怒りを表し、先ほどの倍のスピードで俺に襲い掛かる。

「早！！」

あまりの速さに対応できなかった俺は、レイアの前足につかまれそのまま空中に放り投げられた。

そしてレイアはそのまま円運動を使い、その棍棒のように棘のついた尻尾をバク宙の要領で俺に叩き付けた。

『ムーンサルト』である。

俺はもろにその攻撃を食らい、地面に叩き付けられる。そして何とか立ち上がるが、すぐに膝を地面につけてしまう。

「な、なんだ？体の力が抜ける・・・？」

俺はすぐにこの身が毒を受けたことに気付いた。

「マジか？ここまでゲームと一緒に・・・」

万能薬を使いきった今、この毒は正直言ってキツイ。ハイポーション高回復薬も残り3本。ぶっちゃけて言えば下山するときに1本は残しておきたいから、実際に使えるのは2本が限度。ここで使って、後はこの戦いを制した後に使うのが理想的。ならば・・・

俺はハイポーション高回復薬を飲み、レイアの出方を窺う。

あつちもさっきの行動でかなり疲れているはず。さっきの【サンダー・ジャツシメント裁く神の雷】だって相当な威力を食らったはずだ。次の一撃でこの戦いを終わらせてやる。

そう決意し、俺は自分の相棒へと目をやる。

お前の力、絶対に使いこなしてみせる！！

約束を力に、想いを剣に！！俺は自分の意思を・・・想いを強く、強く願ってバルムンクを握り締める。

「汝が力解放せよ！！汝が主、ジュン」アキモトが命ずる！その力を解放し、真の姿を現せ！！」

自然と紡がれる解放の詞。そしてそれに呼応する様にバルムンクの刀身が光り輝く。

その光り輝く刀身は、かつて邪悪龍を倒した剣として後世に伝えられた伝説の剣。竜種に対して絶対の威力を持つその剣は、最強の座に君臨するにふさわしい威圧感を出していた。

そして、バルムンクはその刀身に自ら周囲の魔力、サンダー・ジャッジメント【裁く神の雷】で周囲に放電している雷の魔力をその身に宿し、バチバチと静電気を発している。

俺はそんなバルムンクをリオレイアに突きつけて宣言する。

「これで終いだ！！次の一撃で、お前を倒す。」

俺の意思が伝わったのか、リオレイアも低い唸り声を上げて体制を低くして構える。

そして俺達は睨み合い、数秒の後お互いに地面を蹴って激突した。

『グアアアアアア！！！！』

「はああ！！！！【雷皇滅龍斬】！！」

同時に攻撃を繰り出し、お互いにぶつかり合った。

俺はリオレイアの攻撃で、防具が粉々に粉碎されて体の内部もひどい損傷を負った。そして、そんな俺の後ろでは、リオレイアが倒れる音がした。

「勝った・・・勝ったぞちくしょー！！！！」

俺の勝利の雄叫びが劉ヶ谷に木霊する。

俺は興奮のあまり先ほどの戦いで受けたダメージを忘れて小躍りをした。

そして、徐々に傷を受けているのを思い出し、ハイボーション高回復薬と『虹の雫』を飲み干す。

回復し終えた俺は、リオレイアとリオレウスを空間倉庫の中に丁重に放り込み、最終目的地である頂上へと足を進める。

そして、今回のクエストのもう一つの原材料、『星根草』を発見した。医者の先生から貰った資料を何度も見比べて本物であることを確認し、人数分をナイフで刈り取り、医者の先生に貰った専用の入れ物に入れて空間倉庫の中にしまう。そして、そのまま一度人数分の『星根草』をナイフで刈り取り、今度はそのままの状態で空間倉庫の中にしまいこんだ。

全ての作業が終わって、辺りを見渡したらすでに夕暮れ時だった。

俺はリオレイアの番がいた洞窟に入ると、そこには金貨や宝石、よくわからないマジックアイテムや武器が溜め込まれていた。

「そうか・・・そういえば龍って光物を溜め込む習性があるんだっけ。」

俺はそれらを全て回収し、その奥にある光る卵の存在に気付いた。

「卵が光ってる？これも一応持って帰るか。」

俺はそう判断し、そのまま光る卵を倉庫の中にしまった。

そして、夕食を食べてそのまま眠りに着いた。

## クエスト達成！

「グッ、ゴッホ、ゴホッ。」

王都ザクトンを出発してから一夜明けての二日目の朝。

目覚めは血反吐を吐きながらだったので最悪でした。

俺は吐いた血の処理をして、魔法で水を出して口を洗い、ついでにそのまま洗顔をする。

洗顔が終わったあと、そのまま少しぼーっとして、昨日リオレイアからムーンスルトを食らい、毒を受けていたことを思い出す。

「一晩寝たけど、まだ体が痺れるな。今はまだ痺れる程度だけど、これから下山して、森を抜けなくちゃならない。この体、持つかない？」

俺は自分の体に自問自答する。

「いや、必ず持たせるんだ！皆のために・・・！」

俺は新たに決意をして、山を降りる準備をする。

とは言っても、下山は登るより簡単で魔法を使って降りればいい。

フライで最大限まで浮いて、そのまま重力に従い山を下りて行けば、死の森も素通りできる計算である。

「虹の雫もまだまだ大量にストックがあるし、星根草も手に入れた。来たときのモンスターも全て倒して回収したし、レイアとレウスが溜めた財宝も回収した。うん。忘れ物はないな！」

俺は一つ一つ確認して、洞窟の外に出る。そこには、快晴の青空が広がっていた。

「うん。今日もいい天気。んじゃ、帰るか。」

俺は山の頂上からの景色を堪能して、王都がある方角に向けて一気に魔法を使い下山した。

「ぐ・・・はあはあ。くそ！下山がここまで大変だったなんて。」

俺は何とか下山したが、正直に言うと今かなり危うい状態である。

一晩寝て体力を回復を図ったのだが、下山した状態の時はすでに半分近い体力が持っていかれた気がする。

しかも、魔力がうまく練れずに、いつも以上に魔力を消費してフレイの魔法を使ってしまった。

「レイアの毒の影響だよな？ここまで酷いとは予想外だったぞ。」

俺は何とか気力を持ち直し、最後のハイボーションハイボーションを飲み干し、王都に向かう。

「さあ、こつから先は回復アイテムなしのガチンコ勝負！俺が王都に着くのが先か？それとも、リオレイアの毒が全身に回り、くたばるのが先か？」

俺は負ける気がしない勝負に燃えて、来たときと同じように全速力で王都へと帰還する。

俺vsリオレイアの毒。結果・・・勝利！！

俺は王都に向かう途中に一度だけ魔力が尽きかけたので、『虹の雫』で魔力を回復させ、ノンストップで王都へと着いた。

しかし、レイアの毒も俺の全身に回り、何度か血反吐を吐く羽目になった。

だが、俺はそんな状態でも気合と根性で乗り切り、ふらふらの状態で王都の北門へと到着することが出来た。

「し、死ぬ・・・さすがに死ぬ・・・」

俺は意識を朦朧とさせ、ギルドへと急ぐ。俺の姿を見た人々は、魔物でも見たように顔を驚愕させ、モウゼの如く道を空けてくれたので、ギルドまでの移動がとても楽だった。

そして、目的の王国直属の中央ギルドに到着し、その扉を思いつき

り開ける。

バンツと大きな音をたてて開いた扉の先には、ジーニアスギルドマスターとキール公爵の姿があった。

「ジュ、ジュン殿！？無事だったか！？」

「ほ、本当に良かった。しかし、二日で帰ってくるとは……やはり、無理じゃったか……」

キール公爵は驚き、そしてギルドマスターは諦めの表情で俺を見た。

「ポ、回復薬と毒消し……もしくは、万能薬をください……」

俺は要求をするだけして、近くにあったテーブルへと倒れこんだ。

「わ、わかった。セシリア！聞いていたな！ギルド内にある回復薬<sup>ポーション</sup>と、万能薬をありったけ持つてくるのじゃ！」

ギルドマスターのジーニアスは、受付にいた部下に指示を出す。指示を受けたセシリアと呼ばれた女性も、急いでその場を後にした。

そして、わずか数分で俺の前には大量の回復薬<sup>ポーション</sup>と万能薬が並べられた。

俺はすぐさまそれに飛びつき、万能薬を飲んでから回復薬<sup>ポーション</sup>をガバガバ飲んだ。

そして全回復した俺は

「ふつかーっ！……！！！！！！」

大声を上げて、復活を宣言した。

「いっや、マジ死ぬかと思った。今回はマジ死ぬかと思った。」

大事な事なので二回言いました。まさに九死に一生を得た俺。

そんな俺を、嬉しそうに、そしてどこか諦めたような表情でキール公爵とジーニアスギルドマスターが眺めていた。

「よく無事に帰ってきたなジュン殿。しかし、やはりクエストは放棄したか……」

「仕方あるまい。命あつてのものだねじゃ。ワシらがジュン君を責める事は出来んよ。」

そう言つて肩を落とす二人に、俺は今回のクエストの報告をする。

「あ、クエストはちゃんと達成しましたよ。これが証拠です。」

『はあ……！！……？？？』

俺が証拠の品である『虹の雫』と『星根草』を取り出すと、二人は酷く驚いていた。

「ば、ばかな！あそこは行くときにも言ったが、死の森と劉ヶ谷の一つ一つはチームランクS級の危険地帯なんじゃぞ！？それをわずかに二日で往復したと言つのか？」

「ええ、そうですねにか？」

「あ、ありえん。死の森の迷路を走破したのか？」

「いいえ、一直線に突っ切りました。」

「な、なんじゃと？魔物はどうしたんじゃ？竜の腹には翼竜がおったじゃろ？それはどうした？」

「邪魔だったんで全滅させました。」

「ば、ばかな・・・Cランク以上の魔物とBランクの翼竜をたった一人で全滅させたじゃと？あ、ありえん・・・」

「まあ現実逃避は良くないですよ？それより、早くこの原材料で薬を作って、俺の仲間を助けてください。」

俺は放心しているギルドマスターを無視し、キール公爵に薬の原料を渡し、キール公爵を医者の下へと送らせた。

俺は、走って行くキール公爵を見送りながら、未だ放心しているギルドマスターに声を掛ける。

「あの、少し良いですか？」

「な、なんじゃ？」

俺が声を掛けると、少し体を震わせて警戒するようにギルドマスターが反応する。

「場所を借りたんですが・・・出来れば出来るだけ広い場所が良いです。」

「出来るだけ広い場所とな？なら、王立学院の訓練場広場を借りるとしよう。」

「ありがとうございます。早速行っても良いですか？あと、人手を借りたいのですが・・・」

「ふむ。何をするかわからんが協力しよう。少し待て。ギルドの職員を用意する。」

「ありがとうございます。」

俺はギルドマスターにお礼を言い、準備が出来るまでテーブルに座って待っていた。

そして、ギルドの方の面子が揃ったので、俺達は王立学院に向かう。

そして今、王立学院の訓練場広場に俺達はいた。そしてそこには噂を聞きつけたのかたくさんの野次馬に冒険者、そして学院の生徒達で溢れ返っていた。

「何でこんなことになったんだろっ・・・」

俺はこの人だかりに呆れる。もっとこじんまりとやりたかったのだが、こうなったら仕方がない。

俺は深いため息を吐きながら、今回の行動についてギルドマスターに報告する。

「今回は俺の我がままに付き合って頂きありがとうございます。ここに来たのは他でもありません。昨日、死の森と劉ヶ谷で討伐したモンスターの解体作業を手伝って欲しいんです。」

「なるほどの？しかし、魔物はどこにおるんじゃ？ジュン君は何も持っていないように見えるが？それに本当にこんな人数がいるのか？」

ギルドマスターの疑問も最もである。俺はほぼ手ぶらの状態だし、今回用意してもらったお手伝いさんの職員は120名。さすがにギルドの職員だけでは手が回らないので、信用の置ける冒険者を見繕ってもらい手伝ってもらっていた。

「まあ百聞は一見にしかずです。」

俺はそう言って、空間倉庫の中にある討伐したモンスターを全て取り出していく。その数200匹超。

内訳は

ランドドラゴン60頭

リオレイア希少種1頭

リオレウス希少種1頭

青い熊14頭

白い熊15頭

赤い熊11頭

巨大な蜂30匹

巨大な蛇19匹

巨大なトカゲ22匹

巨大な狼35頭

黒い大イタチ1匹

巨大な猪14匹

以上である。

モンスターを出すたびに「嘘だろ?」とか、「信じられん」とか、酷いときには「化け物だ」とか失礼な言葉を口にする奴がいた。

「こ、これは・・・バハムート!? ジュン君。君は本当にこれを倒したのかね?」

そう言ってギルドマスターが指をさしたのは、レイアとレウスだった。

「は? バハムート? リオレイアとリオレウスじゃないんですか?」

バハムートって言ったらFFに出てくる最強のドラゴンだろ? 他のゲームにも最強種扱いで出てくるし・・・

「リオレイアとリオレウス? そんな魔物は聞いたことないぞ? とにかくこの龍はバハムートと言って、竜種の中でも最強種に数えられるドラゴンじゃぞ。本当に君が倒したのか?」

「ええまあ。こいつには一度殺されかけましたけど、何とか倒しました。俺が毒を食らってギルドに帰ってきた時も、こいつの毒を食らっていたんです。」

そう言つて俺はレイアのほうを指差す。

「な、なんと・・・バハムートを、しかも成熟した番をたつた一人で倒してしまうとは・・・」

ギルドマスターが酷く驚いていたので、俺はまずい事でもしたのかと不安になった。

「あの・・・やっぱ倒したのはまずかったですかね？一応襲われたので返り討ちにしてみましたけど・・・」

そう言つた瞬間、野次馬の方、特に冒険者の野次馬から「うそだろ？」とか、「何者だよ？」とか、「やっぱり化け物・・・」とかやはり失礼な声が届いた。

しかし俺は、そんな野次馬を無視してギルドマスターの返答を待つ。

「いや、まずくはないのじゃが・・・ジュン君を本当にCランクのままにして置いてよい物かと考えてしまつての。」

「あゝ、ランクですか。俺はBランク以上になればそれでいいです。後はギルドマスターの判断にお任せします。」

俺は疲れていたので、少し投げやり気味に答えた。

「わかつた。ランクのことに關しては追つて連絡しよう。」

「わかりました。・・・あつ、そうだ。そう言えばレイア・・・バハムートの番のいた洞窟でこんな卵見つけたんですけど、換金つて

出来るんですか？」

俺はあの時洞窟で見つけた光る卵のことを思い出し、空間倉庫から黄金に輝く光る卵を取り出してギルドマスターに聞いてみる。

「こ、これはバハムートの卵！？しかもこの輝き・・・もうすぐ孵化する。生まれる寸前じゃぞ！？」

俺が両手に抱えている卵を見たギルドマスターは、すごく興奮したように言った。

「は？」

俺はギルドマスターの言って事が一瞬理解できなかった。しかし、ギルドマスターがそう言った瞬間に卵に異変が起きる。

——ピシッ！パキ・・・パキパキパキ・・・——

と、卵に輝が入り、卵が縦に割れていく。そして・・・

「くきゅー。」

パカッという音が聞こえるんじゃないか？と思うくらいに綺麗に割れて、卵から生まれてきたのは小さな金の竜だった。

「きゅー？」

突然の出来事に安心して金の竜を見ている俺と、この世に生まれて間もない、幼い金の竜のつぶらな瞳と目が合った。

「か、かわいい・・・」

不思議そうに顔をかしげる幼竜に、俺は一発でハートを落とされた。可愛い。可愛過ぎる。今なら親馬鹿になる大人の気持ちかわかるかもしれない。

俺は不意にそう思っていると、生まれたての翼を広げ、パタパタと懸命に羽ばたかせて俺の肩に乗る。そして俺の頬を舐めた。

「お、おいなんだよ？どうしたんだ？」

俺は突然の行動に戸惑った。

「うゝむ・・・どうやらジュン君の事を親と誤認してしまったみたいじゃ。」

「はあ？なんで？」

俺はギルドマスターの言葉を聞き驚く。

「竜種は生まれて最初に見たものを親だと認識するんじゃ。」

「それって、もしかして刷り込みか？」

「そうじゃ。」

俺はギルドマスターの言葉にうなだれる。そして、幼竜はそんな俺を心配したのか、ペロペロと頬を舐める速度を増した。

俺は必死になっている幼竜を捕まえて目の前に持つてくる。そしてしばらく見つめあい、俺は意を決して幼竜に言う。

「俺はお前の本当の親じゃない。お前の本当の親は俺が殺したんだ。それでも、お前は俺を親だと思ってくれるのか？」

「きゅー！」

俺の質問がわかっているのか、わかっているのか幼竜は元気に鳴き声をあげた。

「ま。生まれたばかりじゃわかんねーか。」

俺はそう結論付けて、幼竜に笑みを浮かべる。

「お前がもう少し成長したら、もう一度同じ問いかけをしようと思う。それまでは、俺が親代わりになってやるよ。」

「くきゅー！」

おれがそう言うのと、何と幼竜は頷いた。

「お？俺の言葉がわかるのか？まあどっちでもいいや。とにかく、俺が親代わりになるんだ。いつまでもお前じゃ嫌だよな？」

おれがそう言うのと、今度は幼竜は首をかしげる。

「名前だよ、名前。そうだな・・・」

そう言うて俺は辺りを見渡す。

「リオ・・・そうだ！お前の名前は今日からリオだ。」

俺はリオレイアとリオレウスを見て名前を決定する。あの二頭の子どもだし、共通する名前だからちょうど良いだろう。

「くきゅー!!」

おれがそう言つと、名前が気に入ったのか翼を目いっぱい広げて鳴いた。

「ははは、今日からよろしくな。リオ！」

そうしてこの日。俺に新しい家族が出来た。

それから・・・

リオを家族にして、少したったところで、今回のモンスターの採取が完了したことの報告を受けた。

そして、名前がわからなかったモンスターの説明も一緒に受けたが、今さら感があったので名前だけ覚えて適当に聞き流した。

なんでも、青い熊が『ブルーグリズリー』、赤い熊が『レッドベア』、白い熊が『キンググリズリー』、巨大な蜂が『ジャイアントキラビー』、巨大な蛇が『デスパイソン』、巨大な狼が『タイニードウルフ』、巨大な猪が『エンペラーボア』、そして巨大なトカゲが『メガロスリザード』だそうだ。

そして、『生者の泉』で戦ったあの大イタチは、実は竜種だったらしく、本当の名前は『ジントウガ』と言って、牙竜種と呼ばれる種族の中でもかなり上位に入るドラゴンだとか。

そんなこんなで、剥ぎ取ったアイテムとドロップアイテムは以下のとおりになる。

|           |    |
|-----------|----|
| 青熊の毛皮・・・  | 14 |
| 青熊の肉・・・   | 14 |
| 赤熊の毛皮・・・  | 11 |
| 赤熊の肉・・・   | 11 |
| 白王熊の毛皮・・・ | 15 |
| 白王熊の肉・・・  | 15 |
| 大蜂の羽・・・   | 30 |
| 大蜂の毒針・・・  | 30 |

|         |    |
|---------|----|
| 大蛇の牙・   | 19 |
| 大蛇の蛇皮・  | 19 |
| 巨狼の毛皮・  | 35 |
| 巨狼の牙・   | 35 |
| 大猪の毛皮・  | 14 |
| 大猪の牙・   | 14 |
| 大蜥蜴の爪・  | 22 |
| 大蜥蜴の尻尾・ | 22 |

そしてドラゴンのほうのアイテムは

|         |    |
|---------|----|
| 地翼竜の鱗・  | 60 |
| 地翼竜の牙・  | 60 |
| 地翼竜の翼膜・ | 60 |
| 地翼竜の尻尾・ | 60 |
| 地翼竜の逆鱗・ | 60 |
| 地翼竜の堅骨・ | 60 |
| 翼竜の竜玉・  | 60 |

|          |   |
|----------|---|
| 金飛竜の鱗・   | 1 |
| 金飛竜の牙・   | 1 |
| 金飛竜の翼膜・  | 1 |
| 金飛竜の尻尾・  | 1 |
| 金飛竜の逆鱗・  | 1 |
| 金飛竜の堅骨・  | 1 |
| 天空竜の金宝玉・ | 1 |

|         |   |
|---------|---|
| 銀飛竜の鱗・  | 1 |
| 銀飛竜の牙・  | 1 |
| 銀飛竜の翼膜・ | 1 |

銀飛竜の尻尾・・・1  
銀飛竜の逆鱗・・・1  
銀飛竜の堅骨・・・1  
天空竜の銀宝玉・・・1

黒迅竜の鱗・・・1  
黒迅竜の牙・・・1  
黒迅竜の鋭羽翼・・・1  
黒迅竜の棘尻尾・・・1  
黒迅竜の逆鱗・・・1  
黒迅竜の堅骨・・・1  
迅竜の黒宝玉・・・1

以上である。見たところ一つもアイテムをパクられていないので、ギルドマスターがいい人材を送ってくれたことに感謝した。

「それにしてもすごい数じゃな。これだけでも一財産が築けるぞい。」

ギルドマスターが感心したように言う。

「特にこの宝玉は、一つあれば7代先まで遊んで暮らせるほどの価値じゃ。」

そう言って指を指したのは、バハムートの落とした宝玉だった。

「へえ・・・これがね。」

そう関心した様に、二つの宝玉を手にとると、とたんに宝玉が光りだした。

「うわ！なんだ！？」

突然の出来事に驚いた俺を無視するように、宝玉はひとりでに浮き出してリオの元にふよふよと浮いていった。

「きゅ〜？」

浮き上がって目の前に現れた二つの宝玉を、リオは不思議そうに見つめた。そして・・・

——カッ！——

と、突然宝玉は光だし、辺りを光に包み込んだ。

その光がやむと、浮いていた宝玉は何事もなかったように地面に落ちていた。

俺はその宝玉を拾い上げ

「一体なんだったんだ？リア、平気か？」

俺はリオの様子を窺った。すると・・・

「うん。平気だよパパ。」

「え？リオ。今喋った？」

「うん。本当のお母さんとお父さんが、さっき力を与えてくれたんだ。」

そう言つと、リオは嬉しそうに翼をパタパタと羽ばたかせる。

「そ、そうか。喋れるようになったんだ・・・」

そう言つて俺は引きつった笑みを浮かべた。だってドラゴンってだけでも驚いているのに、人間の言葉で喋るんだもん・・・

そんなことを考えていると、リオは嬉しそうに「きゅーきゅー」と言いながら俺の周りを飛び始める

「そうだ・・・リオ。なら、改めてさっきの質問をするぞ？リオは本当に俺のことを親としてみてくれるか？リオの本当の家族を殺したのは俺なんだぞ？」

そう言つたら、リオは俺の周りを飛ぶのをやめ、俺の正面に来て言つた。

「・・・うん。私はパパの家族になる。さっき、本当のお母さんとお父さんに会えたから。それでお母さん達と約束したんだ。『幸せになる』って。お母さんとお父さんが、パパと一緒にいれば幸せになれるって言つてた。だから、私はお母さんとお父さん、そしてパパのことを信じてみる。だから私はパパの家族になる。」

リオは真剣な顔をして俺に訴える。俺は、その言葉に涙した。

「そつか。リオのお母さんとお父さんはそんなことを言っていたのか。なら、俺もリオと約束する。絶対リオを幸せにしてみせる。」

そう言つて俺はリオを抱きしめた。そして、リオも嬉しそうな鳴き

声を上げた。

そうしてしばらく抱き合っていたら、ギルドマスターが俺達の様子を窺うようにして尋ねる。

「あゝ、もういいかのジュン君？」

「あ、はい。すみません。」

俺はとっさにギルドマスターに謝り、リオを抱いたまま尋ねる。

「どうかしましたか？」

「いや、もう剥ぎ取りの採取は終わったから、ワシらギルドは引き上げてても良いかの？」

「あ！すみません。もう大丈夫です。ありがとうございます。」

そう言つて、俺はギルドの皆さんに頭を下げる。

そうしてギルドの皆さんが帰っていくのを見送ったところで、ギルドマスターから声がかかった。

「ジュン君。今回は本当に良くやってくれた。後で報酬を与えるから、君が落ち着いたらワシのところに来なさい。それから、今日はキール公爵のところに泊まるといい。君の従者もキール公爵の屋敷で治療を受けているはずじゃ。明日には回復していると思うから、傍にいてあげるといい。」

「はい。ありがとうございます。では、失礼します。」

そう言つて、俺はギルドマスターにお礼を言つてからキール公爵の屋敷に向かった。

キール公爵の屋敷に付いた俺を出迎えてくれたのは、執事のガイルさんだった。

「ジュン様。良くぞご無事で。今こうして顔を見られて安心いたしました。さあ、屋敷で旦那様がお待ちです。こちらへどうぞ。」

そうしてガイルさんの案内の下、俺はリム達が寝ている客間へと通された。

「おお、ジュン殿。よく帰つてきてくれた。私は君に何とお礼を言えばよいのか・・・」

そう言つて喜んでいるキール公爵の姿が見えた。

「ジュン君にとって来て貰つた薬の原材料のおかげで、無事薬を調合することが出来た。そして、今皆に服用し終えたところだ。本当に君には感謝している。」

そう言つて医者の方は目に少し涙を溜めて言つた。

「薬は皆飲んだんですね？これでもう大丈夫なんですよね？」

「ああ。もう大丈夫だ。おそらく明日には皆目を覚ますだろう。」

俺はその言葉を聞いた途端に、体の力が抜けていくのがわかった。

「はは・・・よかった。もう、これで・・・だい、じょうぶ・・・なんだな・・・」

そう言って俺は闇の中に意識を落としていった。

## それから・・・（後書き）

更新が遅くなると言っておきながら、ほぼ毎日のように更新してる気がします。

まあまだネタというか、ストックが少しばかり残っているせいなのですが・・・

とにかくこれで今回のクエストは完全に終了です。新たな家族、リオちゃんを仲間にしてから、少しほのぼの系を書こうかなと思っています。

まあ私の力量で書きますので、ほのぼの系にならなかったりするんじゃないかなと、勝手に予想を立てているしだいであります。

それから、感想をくださった読者様には本当に感謝しております。読者様の期待に答えようと頑張って書き終えて更新するようにしますので、応援よろしく願います。

それから、誤字や文法間違いがございましたらご報告をお願いします。

## 完治

朝。俺は部屋に差し込む柔らかな朝日を浴びて目を覚ます。・・・  
のだが、

「すー、すー・・・」

「は？」

俺が目を覚ますと、俺の腹の上で全裸の金髪少女が規則正しい寝息を立てて丸まって寝ていた。

「・・・・・・・・」

俺はこの状況に頭の回転が追いつかず、しばらくの間呆然としていた。

「お、落ち着け俺・・・！こういう時は深呼吸するんだ。うん。深呼吸だ深呼吸。目を閉じてゆっくり深呼吸すれば大丈夫・・・」

俺は一人呟き、目を閉じてゆっくりと深呼吸をする。

「スー・・・ハー・・・よし落ち着いた。これは夢だ。そうに違いない。深呼吸もしたんだ。ゆっくりと目を開ければそこにはいつもの朝が・・・」

そう言っただけはゆっくりと目を開ける。するとそこには・・・

「すー、すー・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目の前には変わることなく、全裸の金髪少女が寝ていた。

うん。どうしようこれ……。というか、俺には少女趣味そんなはない。

いや、この状況でそんなことを言っても誰も信じてくれそうにないが、本当なんだ！信じてくれ！！いや、信じてください！！！！

「う、うん……」

いい具合にパニくっていると、寒いのか金髪少女は全裸の体をもぞもぞと動かし始める。

「うん……ぱあ……。ふあ……。…」

そして、次第に意識が覚醒してきたのか、金髪少女は起床する。

大あくびしながらの起床は、少女がなかなかクルものがあつた。

そして、あくびで涙を溜めた目を、片手でくしくしと擦る。それから、パッチリとした目が俺を捕らえた。

「パパー！！」

そしてそのまま俺に抱きついてくる金髪少女。

「おわ！つとと、え？え？なに？」

俺は少女のダイブを受け止めた方がいいが、状況にまったくついていけていなかった。

その間も、ぐりぐりと頭をこすり付けてハグをする金髪少女。

「え？なに？ていうか君、誰？」

俺は混乱して金髪少女に名前を尋ねたが、その瞬間、金髪少女はぐりぐり攻撃をやめ、顔を上げて必然的に上目使いになった状態で俺に言う。

「パパ・・・リオのこと忘れちゃったの？」

「え？リオ？」

「グスツ・・・うん。」

もはや泣く寸前だった金髪少女改めリオ。俺は必死に頭を回転させ、何とかこの状況に追いつこうと頑張った。のだが・・・

——ガチャ——

と、不意に部屋の扉が開く。

「ご主人様。朝ですよ？」

「お姉ちゃん。ご主人様はまだ目が覚めてないかもしれないよ？」

そう言って入ってくる、懐かしくも愛しい声。

「「「あつ・・・」」」

そして、三人の声は見事にシンクロする。

俺は二人が入ってきたことに対する無意識の内に出てしまった声を、アリアとロッテは俺に抱きついてしているリオに対しての戸惑った声をそれぞれ呟いた。

部屋の時間は止まる。三者三様で顔を見合わせていたが、時間が経つにつれ部屋の温度は徐々に下がっていく。

時間が経つにつれ徐々に部屋の空気が下がっていく一方、アリアとロッテの全身の毛が徐々に逆立っていくのがわかった。

「ゴ・シュ・ジ・ン・サ・マ・・・!」

「ナニ・・・シテルノカナ?」

そして、髪の毛と尻尾を完全に逆立たせている二人の従者は、素晴らしいほどの完璧な笑みを持って俺に問いかけてくる。しかし、何と言つか・・・その笑みは恐ろしい物を感じさせた。というか、目が笑ってなくて、若干単色気味になっているので余計に怖く感じた。

「ま、待て二人とも・・・とにかく落ち着こう。な?」

俺は二人を落ち着かせようと必死になる。しかし、二人は落ち着こうとせず、むしろ状況が悪化したように感じた。

だが、神は俺を見捨てていなかった。

「アリアママ！ロツテママ！」

俺に抱き付いていたリオは、アリアとロツテの姿を見つけるや否や二人に飛びついた。

「あ、アリアママ？お姉ちゃん。いつの間に子ども生んだの？」

「そういう貴方だって、さっきこの子にママって呼ばれていたじゃない。」

そこで二人の頭に疑問がうかんだ。

「あれ？」「」

二人は先ほどまで怒っていたのを完全に忘れて首をかしげる。

「リオ・・・とりあえず説明してくれ。」

俺はリオの行動に片目を手で覆い、リオに説明を求める。

「「り、リオちゃん！？」「」

俺の呟いた言葉を聞き、リム達は驚いて自分達に抱きついていたり才を見つめた。

「あゝ・・・なんだ。つまり、あの時の宝玉の影響で、朝起きたら

この姿になっていたと・・・？」

「うん。そうだよパパ。」

俺はリオの説明を聞き、確認のために尋ねたが、リオはそれを肯定した。

「んじゃ、この二人がママって事は？」

「?? ママはママだよ？」

俺がリム達を指してリオに聞いてみたら、リオは首を傾げるだけだった。

「あ、いや、そうじゃなくてな・・・」

俺はどう言おうか悩んでいると、リオはますます首を傾げるだけだった。

「まあいいか。アリア、ロッテ。しばらくの間、リオの母親代わりになってくれないか？」

俺は説明を諦め、二人にお願いする。

「構いませんよ。」

「むしろ、私達からお願いしたいですし／＼／」

そう言って顔を赤らめながら二人は承諾する。

「それにしても、二人とも病気が治って良かったよ。」

「ご主人様。この度は私達のために危険なクエストをして頂き、本当にありがとうございました。」

そう言って二人は俺に頭を下げる。

「何言っただよ。俺達は仲間だ。俺の勝手かもしれないが、俺はお前達のことを家族だと思っている。それに、お前達を守るってあの夜約束しただろ？」

そう言っくと、二人は嬉しそうな顔をして頭を上げた。

それから、俺は俺が倒れた後の話を聞かされた。

俺は何と三日間眠り続けていたらしい。何でも、医者話を聞いた俺は、安心した瞬間に体の力が抜け、一気に眠りについたみたいだ。

そして、医者先生がベットまで運ばうとしたときに、俺の体の異常に気付いて、急いで診察した結果、全身打撲に骨折、内臓の破裂、全身に猛毒の潜伏という凄まじい診断結果になった。

正直な話生きているのが不思議なくらいだと、医者先生は言っていたらしい。

「へー、そうなのか。そいつはやばかったな。」

あつはつは、と軽く流そうとしたら、皆から白い目で見られた。

「何でそんなに軽いんですか！！私たちずっとごく心配したんですよ！！！」

「そうだよ！！医者の先生の話ではもう助からないかもって言われてたんだよ！！！！」

そしてリム達が俺を責め立てる。

「わ、悪かったって。」

俺はすぐさま謝罪した。

それから、二人を落ち着かせた後、俺は身支度を整え、皆がいる食堂へと移動した。

「ジュン殿！！目が覚めたか！！」

「ジュンさん！無事でよかったです。」

「本当に心配したんですよ？」

上からキール公爵、アイリス、セシルの順番で俺に声を掛けてくる。

「ええ。おかげさまで。キール公爵、この度は心配をおかけして申し訳ございませんでした。アイリスとセシルも心配かけてごめん。でも二人とも病気が治って良かったよ。」

「いや、いいんだ。本当にジュン殿には感謝してもしきれん。これくらいの事など、迷惑に入らんわ。」

「本当に心配したんですからね。でも、今回は私たちのために薬を取ってきて頂き、本当にありがとうございました。」

「ありがとうございます。」

アイリスがお礼を言うと、セシルの同じようにお礼を言い、二人で頭を下げる。

「いいよ二人とも。頭なんか下げなくて。俺はただ、仲間のために薬を取ってきただけなんだから。お礼なら、取りに行く許可を出してくれたキール公爵に言いな。あと、協力してくれたギルドマスターと、医者先生にもね。」

「何を言うかジュン殿。君は礼を言われるだけの事をしたのだ。そのための礼はしっかり受け取らないと、相手に失礼になるぞ?」

「そうですか?なら受け取っておきますね。」

そう言うと、今まで頭を下げ続けていたアイリスとセシルは、ようやくその下げていた頭を上げた。

「さて、皆お礼をし終えたところで朝食にしよう。」

それから、キール公爵の一声で、ようやく穏やかな朝が始まるうとしていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6063u/>

---

幻魔戦記

2011年9月14日02時06分発行